

(Dc50) 竪穴式住居跡



第1号土壙(Db53-1)



同上 埋土東西断面(南より)



同上 埋土中遺物出土状況



同上 南北断面(西より)



同上 東西断面西側



第1号土壙(Db53-1) 南北断面南側



同上 南北断面北側

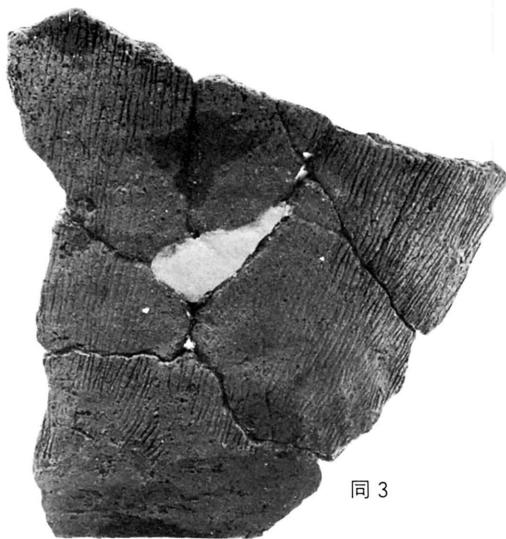
第3 図縄文時代の遺構



第1号土壙
(Db53-1)
出土物1



同2



同3



同4

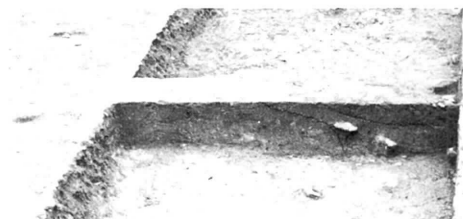


同5

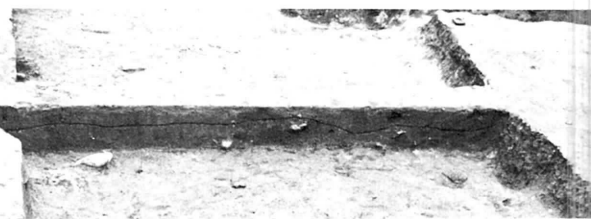


第1号(Bb06)竪穴式住居跡(南より)

第1号(Db53-1)~第4号(Db50-2)土壙

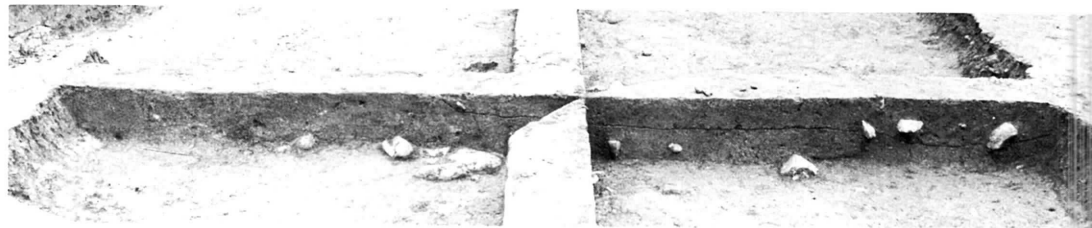


第1号(Bb06)住居跡・埋土



↑南北断面(東より)

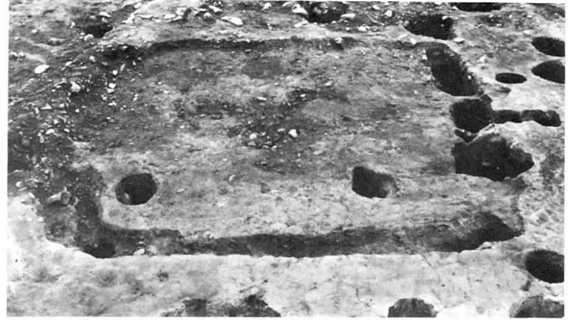
↓東西断面(南より)



第4図 縄文時代遺物及び古代遺構



同右遺構南側焼土遺構



第2号(Ch62)住居跡



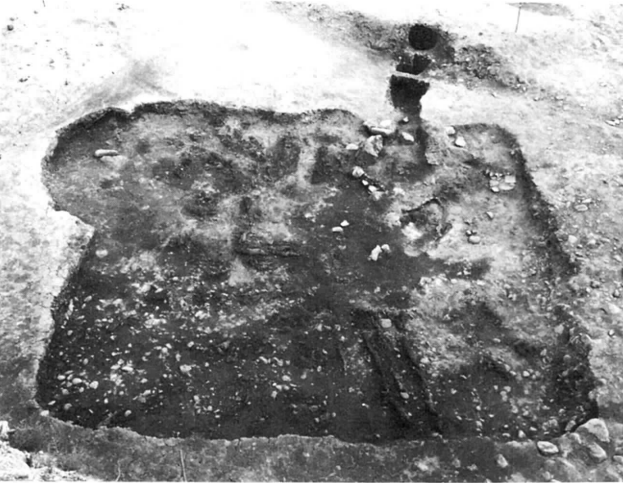
同右床面出土鉄製品



同上埋土東西断面(南より)



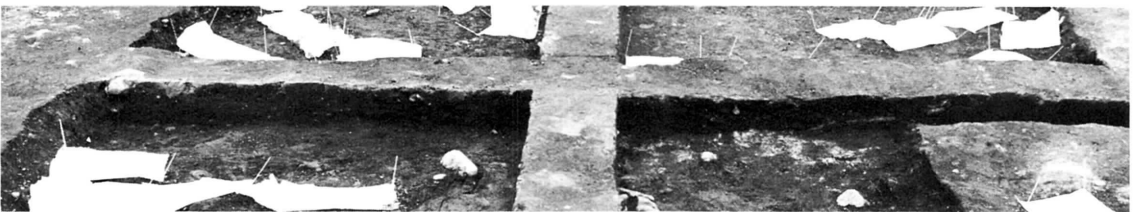
同上南北断面(東より)



第3号(Dc12)住居跡



同左カマド



同上埋土東西断面(南より)

第5図 竪穴式住居跡



西壁炭化柱



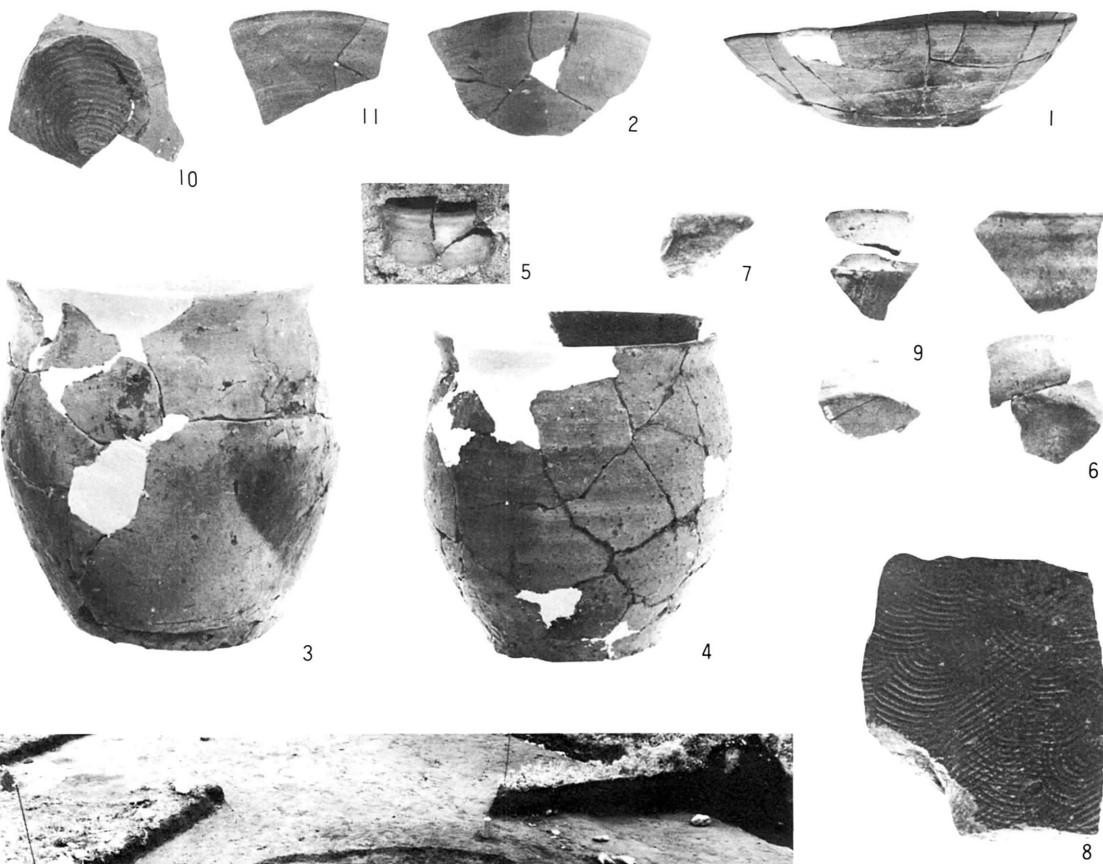
第6図 第3号(Dc12)住居跡・出土遺物



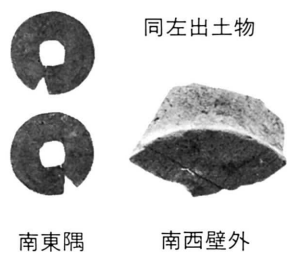
同右カマド



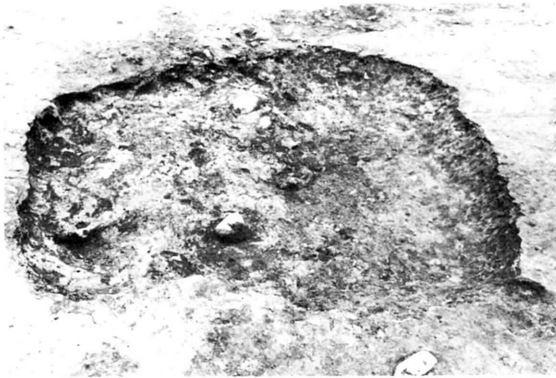
第4号(Ej 15)住居跡



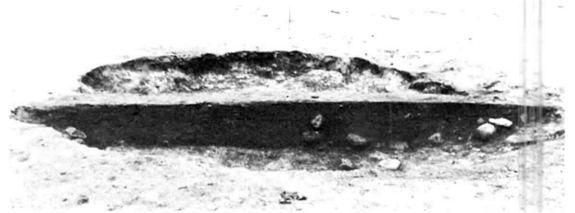
Ca62 縦穴状遺構



第7図

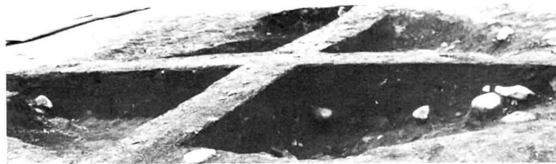
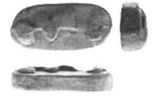


(Cd68) 竖穴状遺構



同左東西断面(南より)

同左 出土遺物
(Q.1層上面)



同上埋土東西断面(南より)



同左南北断面(西より)



(Cba75) 焼土遺構



(Dbb66) 焼土遺構



同上南北断面(東より)



同上東西断面東部分(南より)

第8図 竖穴状遺構と焼土遺構



(Dbb69)焼土遺構



同左埋土南北断面(東より)



同上東西断面(南より)



(Dbb71)焼土遺構



同左南北断面(東より)



同左埋土東西断面(南より)



(Dbc64)焼土遺構



同左埋土南北断面(西より)

第9図 焼土遺構



(Dbc64) 焼土遺構 (南より)



(Dca65) 焼土遺構



(Dbc68) 焼土遺構



同左埋土南北断面(西より)

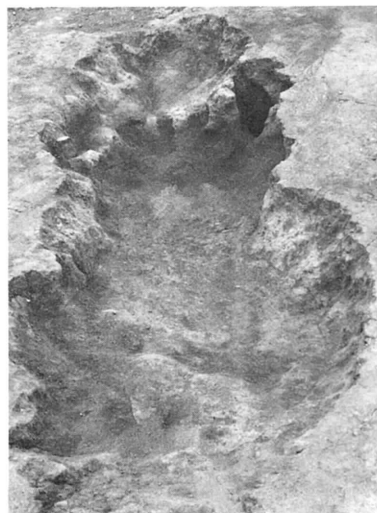


同上第一次断面

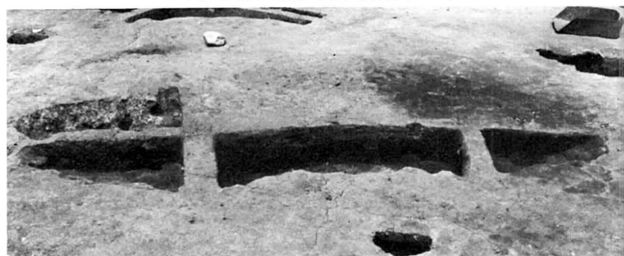


同上第一次平面形

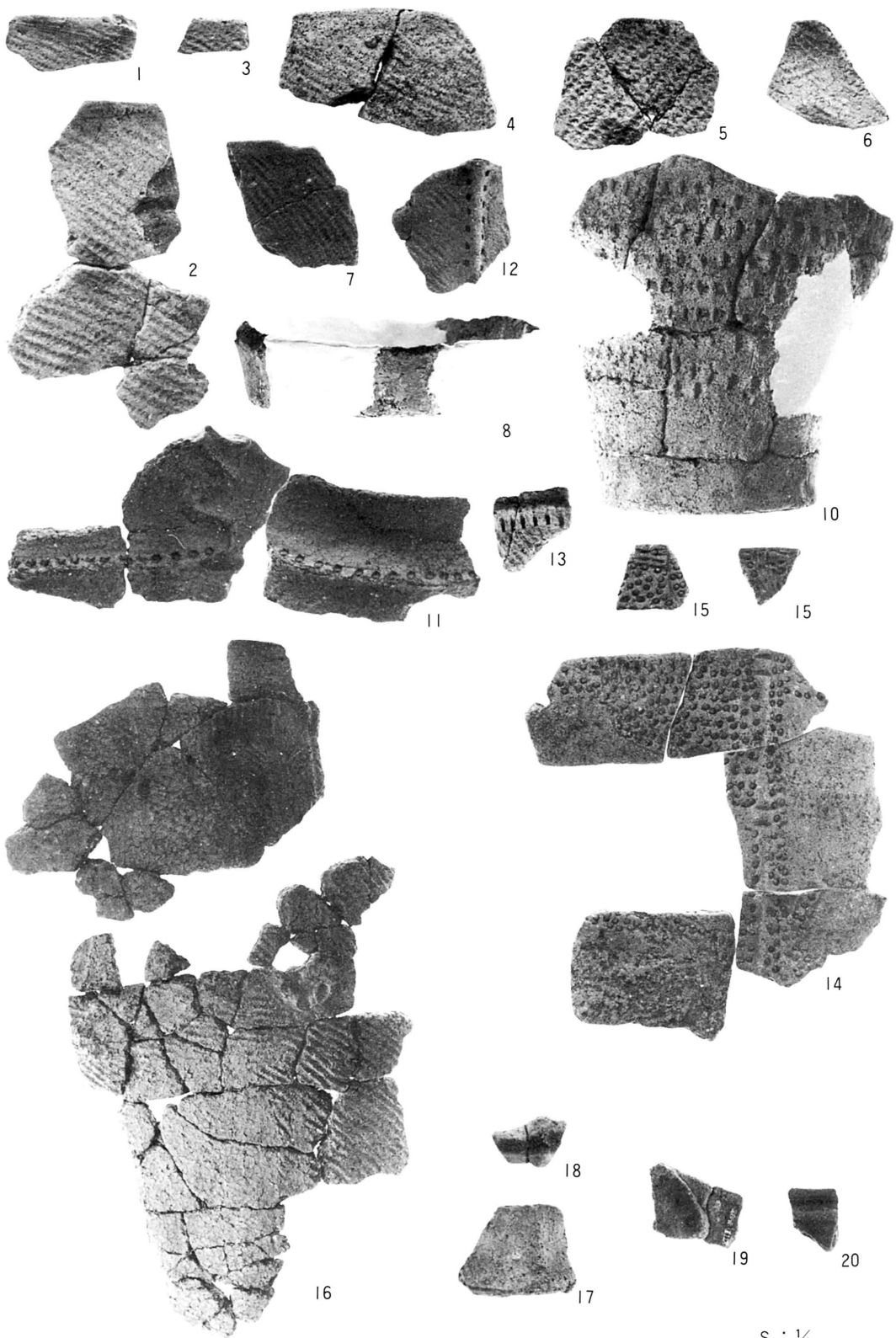
同左埋土東西断面(南より)



(D
bc
74)
焼
土
遺
構



第10図 焼土遺構



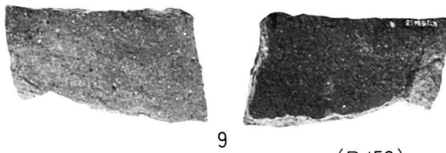
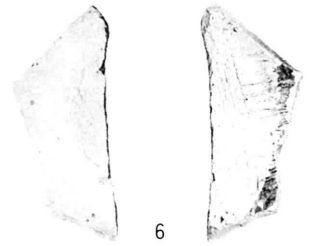
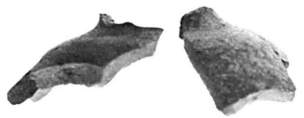
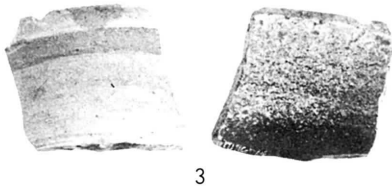
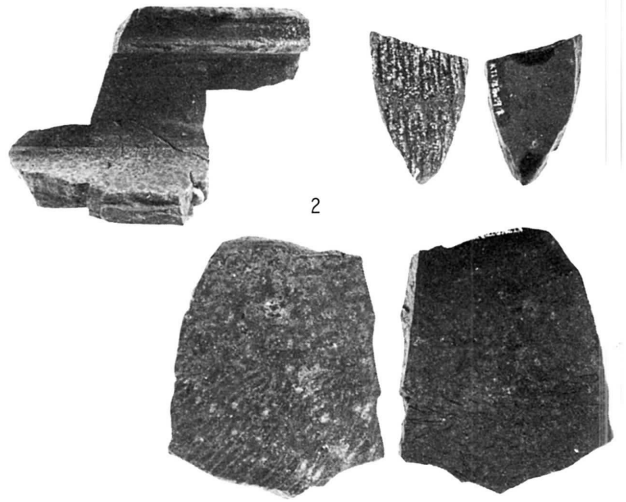
第11図 包含層出土縄文時代遺物



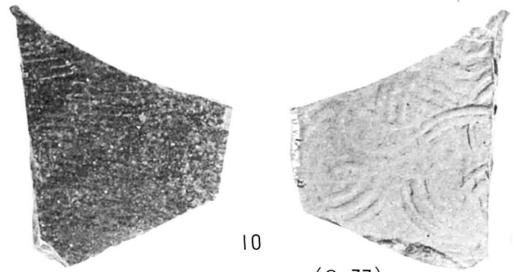
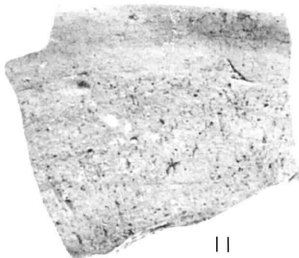
第12図 包含層出土縄文時代以降の遺物



第13図 包含層出土古代以降の遺物



(Bd53)



(Ce77)

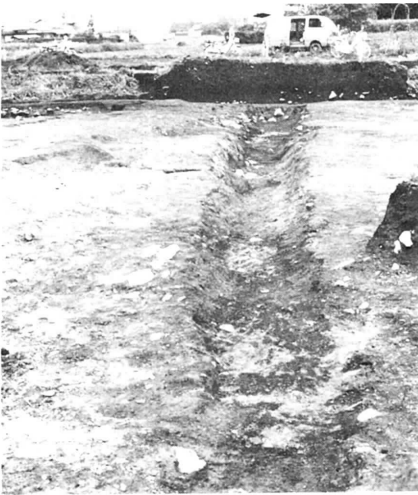
第14図 (Ba03)溝出土古代以降の遺物



Ag 53溝



Cb 77溝遺構(東より)



Cc 62溝



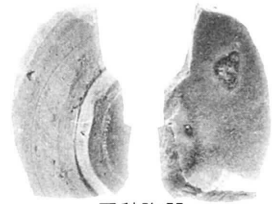
Cb 77溝とAg 53溝(南より)



同上埋土南北断面

第15図

Cb 77溝出土



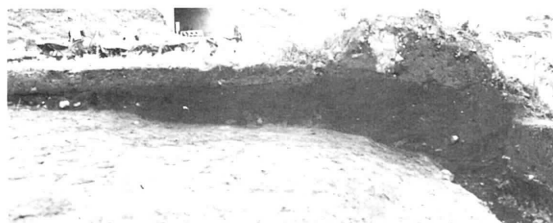
灰釉陶器



須恵器



Ba 03溝中央部全景



同上東西断面



Ba 03溝北部



同上

↑ Ba 03溝底部

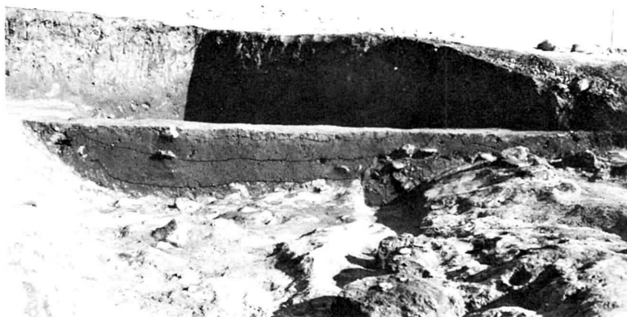
↑ 現水路底部



Ba 03溝南部 (南より)



同右埋土東西断面 (南より)

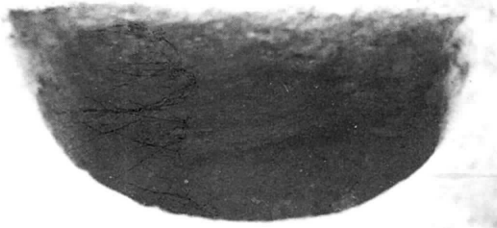


同 南端東西断面 (北より)

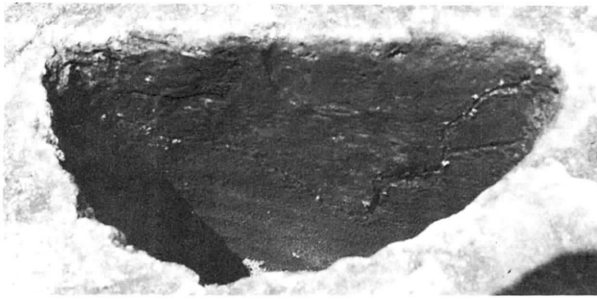


同最北端

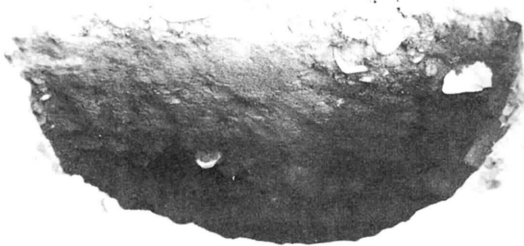
第16図 Ba 03溝



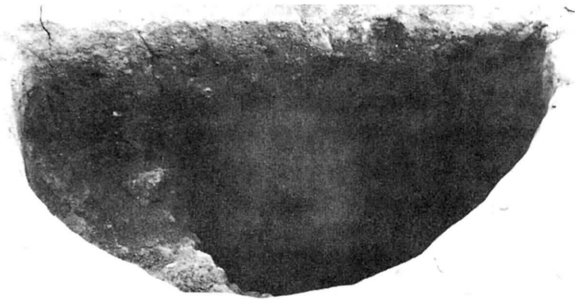
(Cg62付近柱穴 I)



(Dab68柱穴)

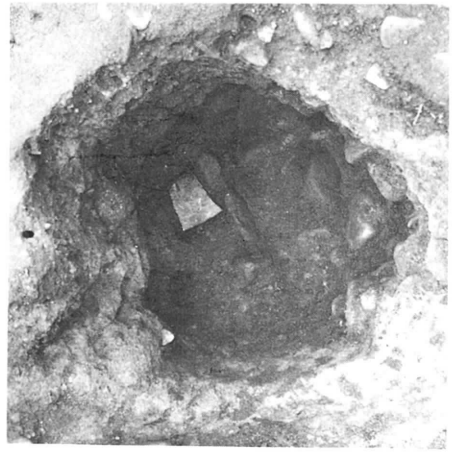


(Cg62付近柱穴)

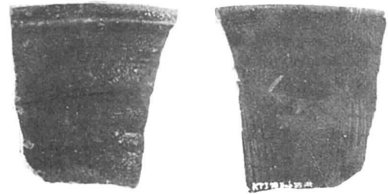


(Cg62付近柱穴No.33)

↓ Da09~12土層断面



↑ Dab55土壙 挿鉢出土状況 ↓ 同遺物



Dbc55土壙出土



Dbc63土壙出土



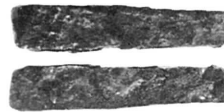
Dcb63土壙



Da12近表採



Dfe68土壙
同上出土鉄製品



(煙管)
Cij60土壙出土
Dba64土壙出土



第17図

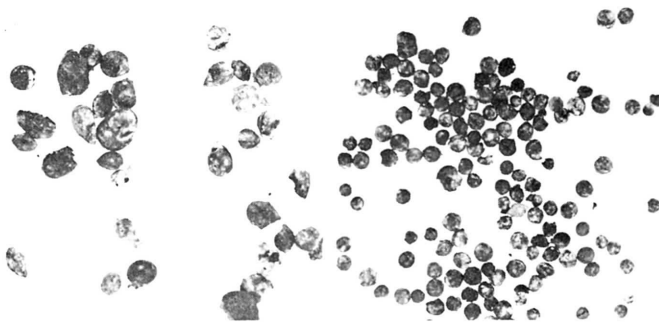


Cja 60 柱穴様土壙出土炭化米 (X 2)



同上 炭化小豆 (X 2)

同上 炭化ソバ (X 2)



同上 炭化栗 (X 2)

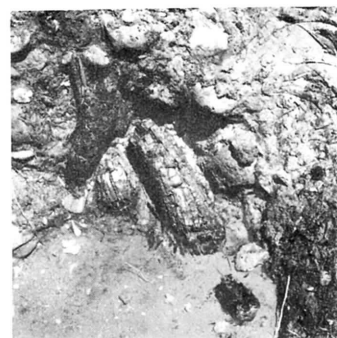
同左



第 4 号 (Ej15) 住 炭化材出土状況



↑ Bc56 包含層出土縄文土器 16



同上

↓ Dba64 柱穴様土壙 (煙管出土)

栗田 I II 遺跡発掘調査記念撮影



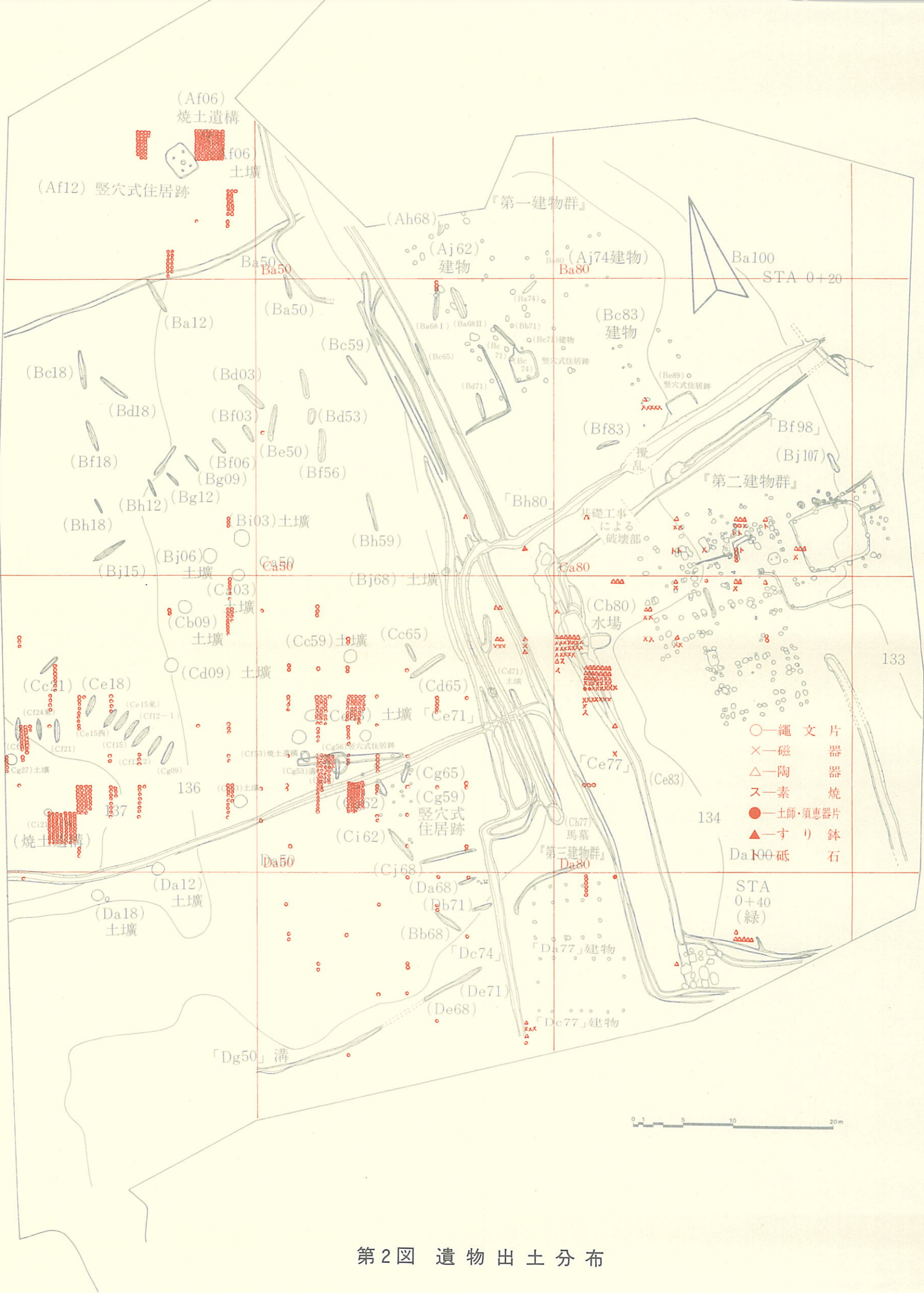
第 18 図

栗田Ⅲ遺跡

遺跡名 栗田Ⅲ遺跡（K T 78）
所在地 岩手県紫波郡紫波町上平沢字東馬場52
調査主体 岩手県教育委員会、日本道路公団
調査担当 岩手県教育委員会
調査期間 昭和53年4月14日～8月31日
調査対象面積 8650㎡
発掘調査面積 8650㎡



第1図 栗田III遺跡周辺地形図



第2図 遺物出土分布



第3図 栗田III遺跡・遺構配置図

I 位置と立地(第1図)

栗田Ⅲ遺跡は、紫波町の西部、町役場の西約4.5kmに位置する。当遺跡は中位段丘・二枚橋段丘相当面が孤立した形で、東へ舌状に張り出した基部近くに立地し、標高約133~135mである。地形は比較的平坦な、東緩傾斜面で、現状は畑地・宅地である。遺跡の北部より東方にかけて段丘崖がめぐり、その外側の低位段丘面との比高は約2mである。北方低位段丘の中期に東流する小川があり、栗田Ⅰ・Ⅱ遺跡はその南側にある。南方約500mの所には東流する滝名川があり、その南方の段丘面・西方の後背山地山麓(石鳥谷段丘等)には縄文時代より中世に亘る各時期の遺跡が多数点在する。

II 調査に於ける基準点

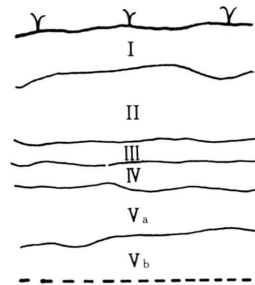
本遺跡は栗田Ⅰ・Ⅱ遺跡と同様、東北縦貫高速自動車道紫波インターチェンジ平面図(日本道路公団)に示されるSTA0+40(緑杭)とSTA0+20(緑杭)を結ぶ線を中軸線とし、STA0+20をA/B100の地点とした。これらの中軸線の各点を基準にし西方へ50mの地点に $\frac{1}{50}$ の各点を設け3×3mの格子目を設定した。

III 基本層序

第4図は調査地の北西部・Bi50からBj50にそって深掘を行ない得られた土層断面図である。この付近の標高は134.5m前後で、高低差が少なく比較的旧地形をとどめている所である。

遺構検出面はⅡ層の下部である。南西部はこの図におけるⅡ・Ⅲ層が削平され表土の下は直ちにⅣ層となっている。

東半分は標高が133.5m前後となり、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層にあたる部分が攪乱を受けている。この攪乱は江戸時代中期頃より現在に至る迄^{まで}建物^{まで}が建てられていた為で、必然的に遺構検出面はⅣ層上部となる。



- I - 黒褐色腐植土(耕作土)「10YR $\frac{2}{5}$ 」
- II - 黒色腐植土(黒ボク)「10YR $\frac{3}{1}$ 」
- III - 褐色シルト質土 「10YR $\frac{4}{4}$ 」
- IV - 黒褐色粘土質土 「10YR $\frac{3}{3}$ 」
- V_a - 黄褐色粘土 「10YR $\frac{5}{6}$ 」
- V_b - 鈍黄褐色粘土 「10YR $\frac{5}{4}$ 」

IV 検出遺構

調査の結果、次の様な遺構が検出された。

- 竪穴式住居跡 5棟
- 焼土遺構 4基
- 土壇 17基
- 構状土壇 50基
- 溝・水場跡
- 掘立柱建物群跡
- 墓壇群

第4図 基本層序

V 縄文時代の遺構と遺物

1. 竪穴式住居跡 (合計3棟)

第1号 (Cg56) 竪穴式住居跡 (第5図、一部6図、写真13図2)

〔遺構〕〔検出面等〕調査地南西寄りの地点にあり、IV層上部面にて遺構が確認された。この遺構の西方約1.70mにCg53焼土遺構がある。

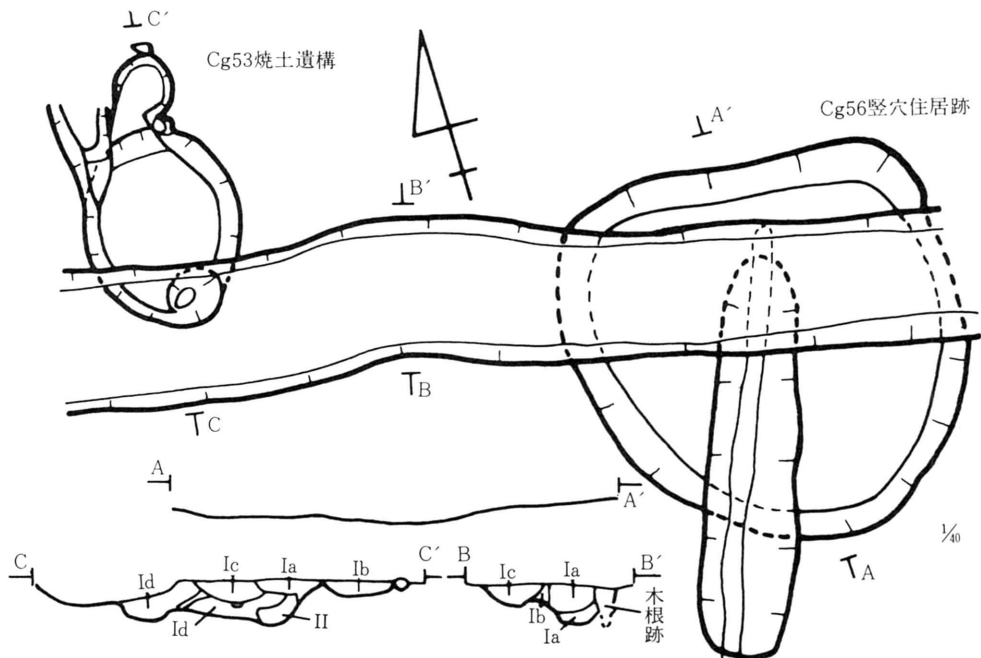
〔平面形・規模・方位〕不整円形を呈するこの遺構は、直径約2.10m、深さは約0.15m程で皿状である。北辺が幾分直線状となっているが、径は南北方向に長い。

〔床面・柱穴・炉・その他〕貼床等の施設は確認出来ない。柱穴についても同様であるが、炉については屋外の地床炉としてCg53焼土遺構が使用されたものと思われる。

〔切合等〕溝状遺構により中央部から南の方向に切られ、更に北辺にはほぼ平行な溝によりCg53焼土遺構共々切られている。

〔時期その他〕縄文土器片が床面より出土したがこれは縄文時代早期後半以降の物と思われる。

〔遺物〕出土量としては多くないが同一個体の破片と思われる。胎土中には多量の繊維を含む。口唇部にはR-L原体の圧痕が見られる。体部外面には同一原体による横位回転施文が行なわれている。この破片は切合関係にある溝状土壌の埋土よりも出土しており、接合の関係にある。



- Ia- 黒褐色(10YR%)腐植土「炭化物含む」
- Ib- 「Iaに褐色土混じる」
- Ic- 暗褐色(10YR%)シルト質土「焼土炭化物」
- Id- 褐色(10YR%)シルト質土
- II - " " " 「Idが汚れたもの」

- Ia- 黒褐色(10YR%)腐植土「炭化物土器片含む」
- Ib- " (10YR%) "
- Ic- 暗褐色(10YR%)シルト質土「霧降り状の混在」
- Id- " (10YR%) " 「褐色土多い」

第5図

(Cg53焼土遺構)

〔平面形〕 大小二つの円形が、南北に連なった形をしている。北側は径が30cm、深さが8cmと掘り込みも小さく、南側のもは直径が90cm前後で深さは20cmと大きく床面も少し焼けている。

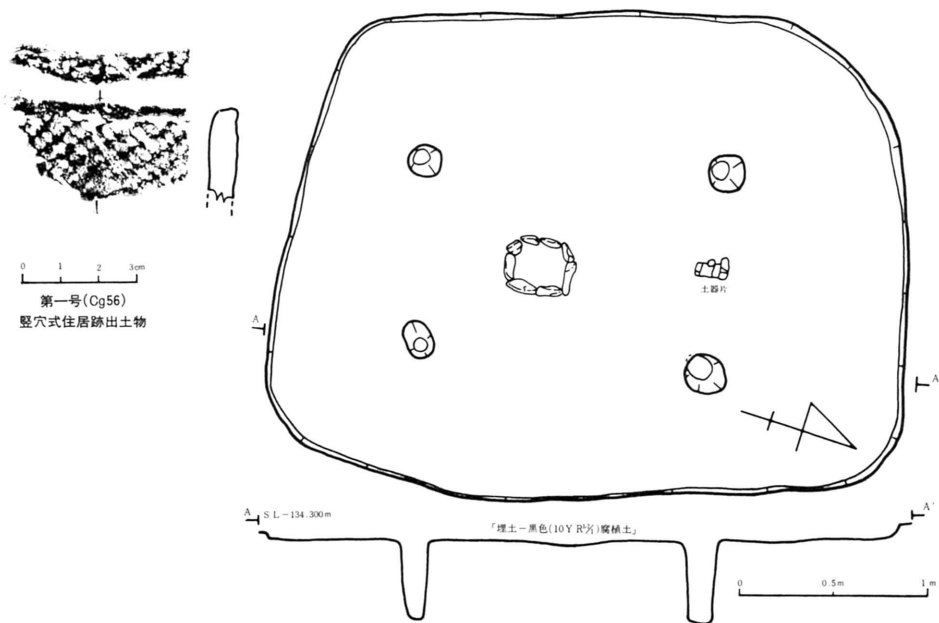
〔埋土・その他〕 北側部分は炭化物を含む程度であるが、南側の北半部上層には焼土も含まれる。但し北側壁際の石は受熱の痕跡が認められる。遺物はいずれの部分にも出土しない。

第2号 (Af12) 竪穴式住居跡 (第6図、写真3図1)

〔遺構〕 〔位置等〕 調査地北西隅に検出された。この地域の北側には段丘崖状の段差が認められる。東約2mの所にAf06焼土遺構及びAf06土壌がある。

〔平面形・規模・方位〕 長方形で南北に長く約3.3m、東西は約2.6mである。残存壁高は2～3cmと浅いが床面施設は良好に保存されている。後述する石組炉等考慮し長軸方向は北より10°西に偏っていると見る事が出来る。

〔床面・柱穴・炉・その他〕 床面は平坦で固くしまっている。柱穴はほぼ対角線上 $\frac{1}{2}$ の位置にある。打込んで立てたと思われるが他の柱穴については確認出来なかった。床面ほぼ中央(幾分南寄り)に石組炉がある。これは南北長辺40cm、東西短辺30cmで掘方を有し、川原石8個を縦位に用いて築いてある。火床面には焼土・炭化物が僅かに見られ、埋土は一層である。



第6図 第2号(Af12)竪穴式住居跡地

〔埋土・その他〕 黒色（10YR1.7/1）腐植土層のみで埋積されているが、前述の炉の場合は暗褐色（10YR3/3）腐植土と幾分異なる。この埋土を調査者は旧表土が埋積したものと見ている。

〔時期・その他〕 床面出土土器は後述する内容より縄文時代中期頃の物と見られる。第1号竪穴式住居跡に見られた屋外炉は当然考えられないが前述の東約2mの土壌についてはその関連性について考慮の必要がある。

〔遺物〕 石組炉の北方60cmの床面に横につぶれた形で出土した体部片である。外面には多量の煤が付着しているが洗浄の段階で剥落してしまった。R-L原体を横方向に回転施文してある。細目の原体を使用してある。器厚は0.6cmと薄い。底部を欠いているが彎曲の具合からは底径は8cm位と推定出来る。残高器高は約13cmである。以上より縄文時代中期以降のものと思われる。

第3号（Cg59）竪穴式住居跡（第7図、写真3図2）

〔遺構〕 〔確認面等〕 段丘崖より幾分遠のくが後世の削平により検出面はⅣ層となっている。遺構外側（北西方向）に第2号（Cg56）竪穴式住居跡・Cg53焼土遺構がほぼ等間隔で一直線にならぶ。検出面の地表よりの深さは15cm程である。

〔平面形・規模・方位〕 壁・床面共に削平による破壊が行なわれ、住居跡としての明確な輪郭は残されていないが後述する柱穴より直径約6.5m以上のやや南北に長い円形と思われる。

〔床面・柱穴・炉・その他〕 前述のごとくで、床面は基本層序Ⅳ層に深には構築されなかった事がうかがえる。推定の資料となった柱穴は9個である。それぞれの形状・埋土の状態についての詳細については省略するが遺構はDa27溝に切られておりその溝の北側には3個が存在する。又Cg62溝状土壌及びCg65溝状土壌にも切られている。

これらの柱穴配置の中心よりやや東よりに埋設土器の下半と思われるものが出土した。

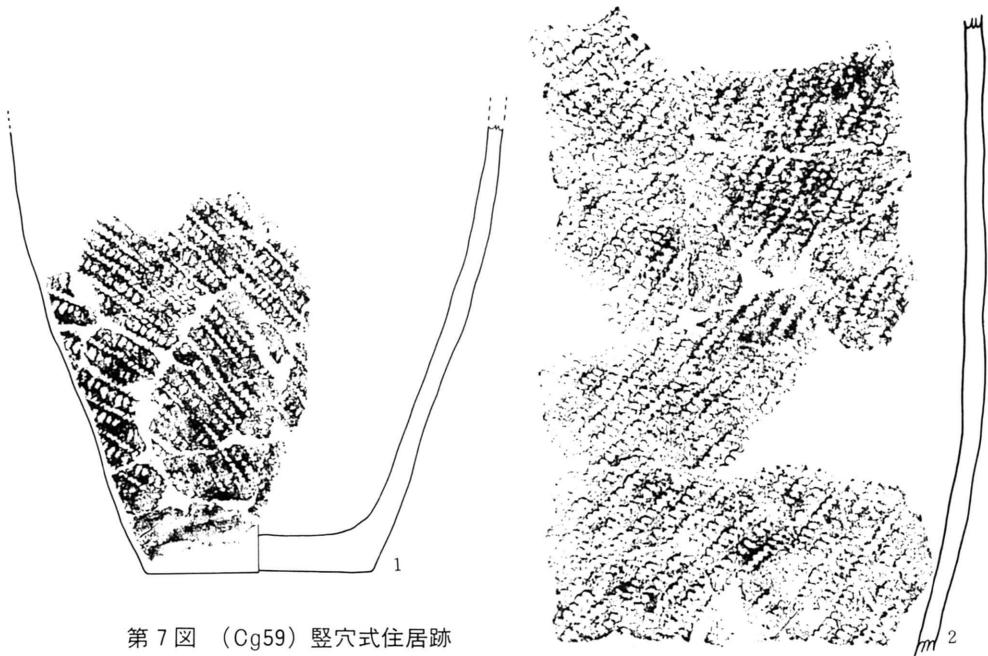
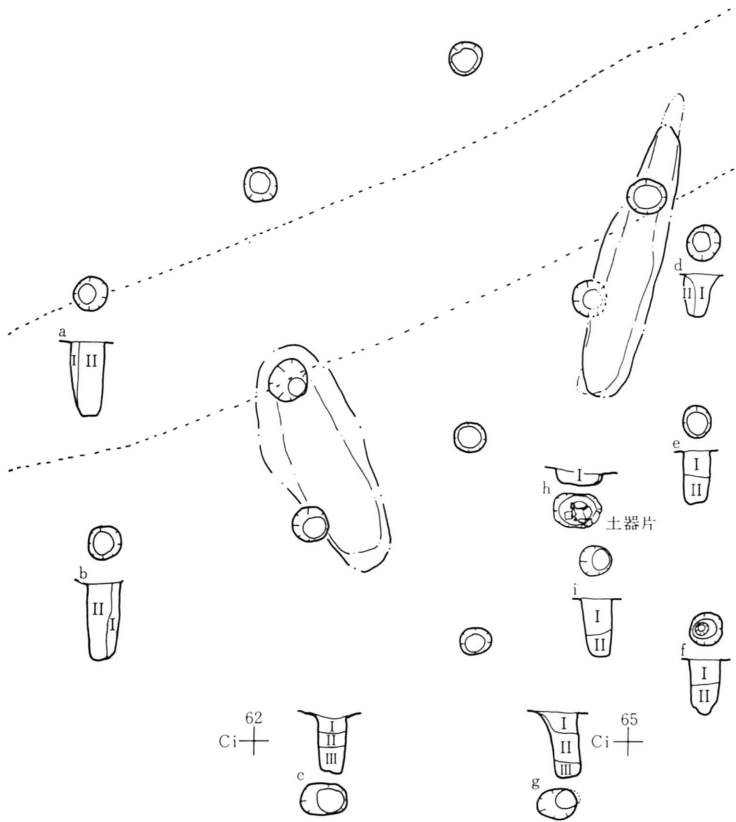
〔時期・その他〕 土器の埋設及び深鉢としての器形等より、縄文時代中期の物と思われる。

〔遺物〕 〔土器〕 1. 底部より体下半の部分が横に押しつぶされた状態で出土した。胎土は硬堅で色調としては橙色（Hue2.5YR⁶/₆）～鈍黄橙（Hue10YR⁷/₄）で酸化色を呈し器表面・内面も同様である。深鉢と思われるが現存器高約19cmで全貌については不明である。但し感じとしては胴膨らみの縄文時代中期のものに類似している。外面は縄文縦方向回転の単節L-R斜行縄文が施されている。断口部には炭質物様付着物がある。

2. Ch62グリッド内出土縄文片についても埋設の可能性がある。胎土は1同様硬堅で色調としては鈍橙色（Hue 5 YR⁷/₄）～浅黄橙色（Hue7.5YR⁸/₄）で部分的に酸化色を呈し器表面には炭質物様付着物も認められる。深鉢と思われ、現存部は縦25cm×横20cmの部分である。積上げ時の加工を示す断口は内側が下方に向かい長い。外面は縄文横方向回転の単節R-L斜行の細長い目の施文がされている。

柱穴土層面註記

- a
- I - 黑色腐植土
- II - 黒褐色土 (黄褐色土混入)
- b
- I - 暗褐色土
- II - 黒褐色土 (黄褐色土混入)
- c
- I - 暗褐色土 (地山質が霜降り状で混入)
- II - 黑色腐植土
- III - 黒褐色土 (地山小团塊混入)
- d
- I - c の III と同じ
- II - 暗褐色土 (地山質混入)
- d
- I - c の III と同じ
- II - 暗褐色土 (地山質混入)
- e
- I - c の I と同じ
- II - 黒褐色土
- f
- I - 暗褐色土 (黄褐色土混入)
- II - b の II に同じ
- g
- I - c の I に同じ
- II - c の III に同じ
- III - 黄褐色粘土 (黒色土極少混入)
- h
- I - 褐色シルト質土 (暗褐色土混入)
- i
- I - f の I に同じ
- II - b の II に同じ



第 7 図 (Cg59) 竪穴式住居跡

2 焼土遺構 (合計4基)

第1号 (Af06-1) 焼土遺構 (第8図、写真3図3)

〔遺構〕 〔位置等〕

調査地北西部の第2号 (Af12) 竪穴式住居跡の東約2mの所で検出されたが、第1号 (Cg56) 竪穴式住居跡とCg53焼土 (第3号) との関係の様な屋外炉との位置付は難かしい。

〔平面形・規模等〕 径約80cmの円形で皿状を呈する。最深部の深さは10cmである。掘方は確認出来ない。

〔埋土等〕 2層よりなり、上層は黒色 (Hue10YR $\frac{2}{1}$) 腐植土が主体で焼土や炭化物が数%の割合で含まれる。下層や壁際に炭化物と粘土の混合団塊や炭化物団塊が存する。下層は非常に薄い焼土層である。出土遺物は含まない。

〔切合等〕 南側に隣接して第2号 (Af06-2) 焼土遺構があるが、検出時の段階で前後関係は不明である。本遺構が1次的に火を使用するものとして構築され、第2号が灰の廃棄場所として2次的に使用された同時存在の可能性もある。

第2号 (Af06-2) 焼土遺構 (第8図、写真第4図1)

〔遺構〕 〔位置等〕 前述の配置関係にあり、時間的空間的位置付は難しい。

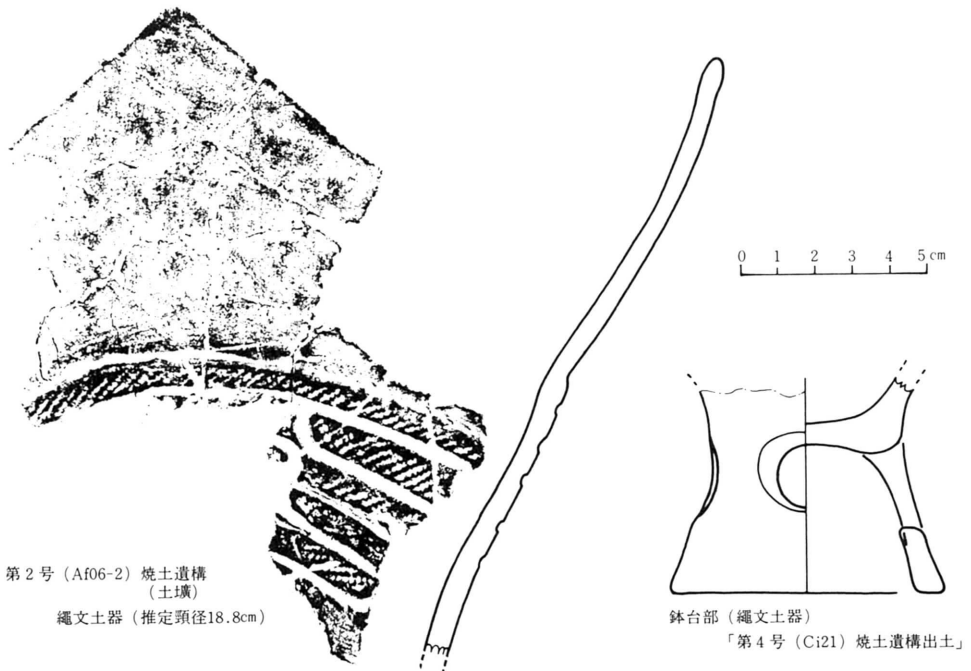
〔平面形・規模等〕 径約1mの円形で皿状を呈する。最深部の深さは25cmである。掘方は確認できないが、フラスコ状土壌の2次使用である事が窺える。

〔埋土等〕 25cmまでの深さには2層が確認出来る。上層は黒色 (Hue10YR $\frac{2}{1}$) 腐植土層で炭化物・焼土・遺物が混入している。下層は黒褐色 (Hue10YR $\frac{2}{2}$) 腐植土層で土器片が混在し焼土層を形成している。更に下位のⅢ層にも炭化物・遺物・焼土が、Ⅴ層には焼土も認められる。

〔重複等〕 調査時所見にて火の使用も確認できるが、フラスコ状土壌の埋没過程の2次使用である事も確認できる。フラスコ状土壌第5層の焼土の位置付が明確になれば第1号焼土遺構との関係が幾分とも解明出来よう。

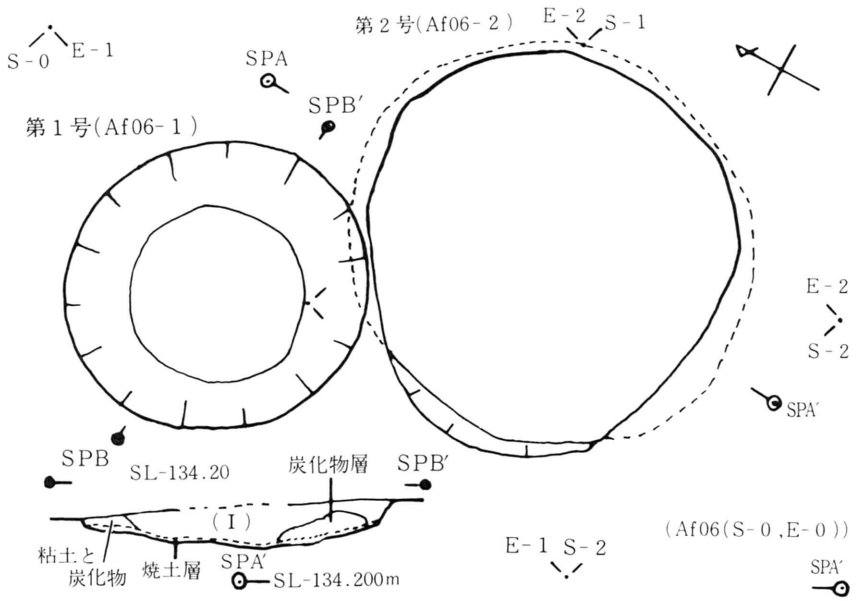
〔出土遺物〕 縄文式土器の破片で頸部より上の部分である。胎土は砂粒等も含むが微細な土質である。色調は鈍橙色 (Hue 5 YR $\frac{7}{3}$) で、器壁は約5mmと薄い焼結は良好である。Ⅲ層下部の北側破片とは接合し炭質物様付着物も認められる。器形は浅鉢型もしくは口縁部の大きく開いた深鉢型が推定されるが前者の可能性が大きい。大波状の口縁を持ち磨かれている。頸部までは最大巾9.5cm・最小巾5.5cmである。内彎気味に開いている。頸部下巾5cmの所に5段の帯状区画縄文 (L-Rの細い目) が認められるが磨消の手法は明確でない。帯状部はL様沈線で区画され明確に上下が区画されている訳でない。以上の様な加飾は、縄文時代後期・加曾利B I式に類例が見られる。

第4号 (Ci21) 焼土遺構 (第8・9図、写真3図4・4図)

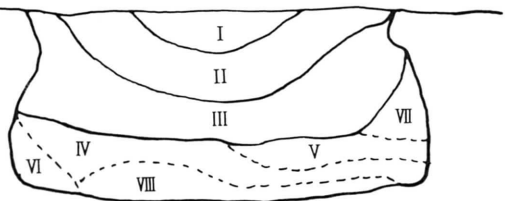


第2号 (Af06-2) 焼土遺構
(土塊)
縄文土器 (推定頸径18.8cm)

鉢台部 (縄文土器)
『第4号 (C:21) 焼土遺構出土』



- I. 黒色 (Hue10YR 5/1) 腐植土
- II. 黒褐色 (" " 5/2) "
- III. I に遺物含む
- IV. 黒褐色 (" " 5/2) 腐植土
- V. II に同じ



第8図 第1号・第2号焼土遺構

【遺構】〔位置等〕調査地の南西部に検出された。この遺構の北東方約10mには溝状土壌7基が方位をそろえて並んでいる。

【平面形・規模等】径約80cmの円形で、皿状である。最深部は30cmと他例より深い。

【埋土等】全部で6層であるが垂直方向には4層である。最上層は褐色(Hue7.5YR $\frac{4}{4}$)土で炭化物が混在している。最下層が明褐色(Hue7.5YR $\frac{5}{8}$)の焼土層で最大厚5cmである。土器片や炭化物も含み最下底には石がある。その上層には最大厚9cmのレンズ状炭化物層がある。

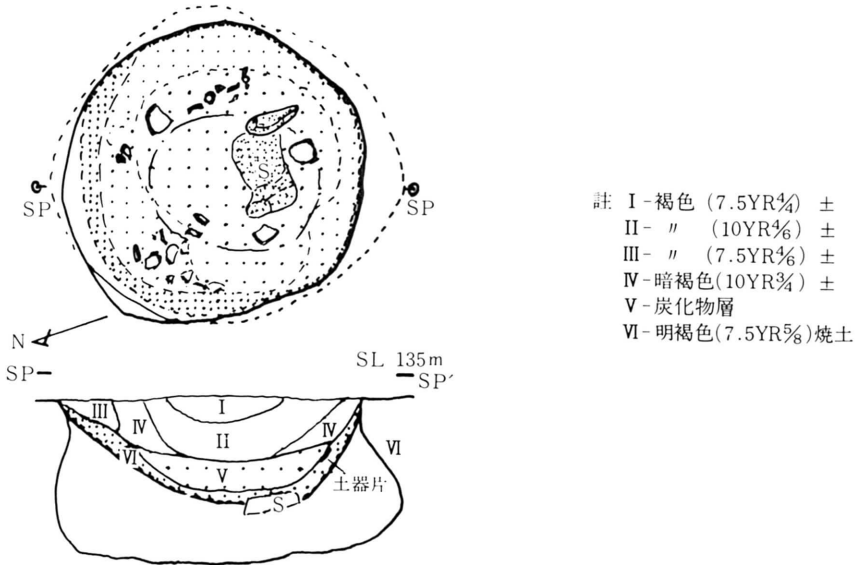
【重複等】深さ45cmのフラスコ状土壌の自然埋没の途中にて火を使用する施設として使われた。

【遺物】出土物の縄文土器は少なくとも4個体以上ある。1)は破片数の一番多いもので平口口縁の粗製土器である。2)は平口口縁の粗製土器であるが磨かれた表面に粗雑に条痕文が施されている。工具の中は8mm位で2重に引いている。条痕は直線による三角格子様の物と蛇行線状のものである。炭質様付着物が認められる。3)は外反口縁を有する小型の鉢で5)の台と胎土等酷似している。5)には径2cm程の円形すかしが入って居り台高も4cmと幾分大きい。

炭化物は栗と鬼胡桃であるが年代については¹⁴C測定により4110±70y.B.P. (3990±65y.B.P.)となり縄文時代後期前半に位置付できる。
* (BC2230~2110 (BC2105~1975))

3 土壌 (第10・15図、写真3~7図、第1表)

土壌は合計17基検出された。断面形より2群に分類できる。



第9図 第4号 (Ci21) 焼土

第一群

〔分布状況等〕 9基検出された。調査地の西半部中央寄りに見られる。

〔平面形・規模等〕 検出面形は円形で、上縁形は74cm～156cm、深さは42cm～79cm、底部径は68～87cmとなり、播鉢型に近い。底部中央に小さな穴を有するものもある。

〔埋土・出土物・その他〕 自然堆積で、黒色腐植土・黒褐色腐植土等で埋積されている。底面に接する形の出土物はない。埋積土中には縄文細片を混在するものがある。この遺物の胎土には多量に繊維を含んだ痕跡が残されている。又その他の特徴よりこの遺物は縄文時代早期後半以降の物と思われる。これら遺構は落し穴として使用されたとする例に類似する物もある。

第二群

〔分布状況等〕 8基検出された。調査地西半のやや南寄りに7基、北西部に1基見られる。

〔平面形・規模等〕 検出面形は円形で、上縁径は80～133cm・深さは45～80cm・底部径は90～151cmであり、上縁径より底部径が大きいのが特徴である。

〔埋土・出土物・その他〕 大半は自然堆積の状況を示している。第一群と同様に黒褐色土・暗褐色土が埋積している。下部壁面の崩落土は第一群に比して多い。埋積土の下層程軟らかく、暗褐色ないし褐色土に地山質が混在する。出土物は第一群同様埋積土中のみからで、胎土に繊維を含んだ痕跡の残存する少量の縄文土器片である。従ってこの群の遺物の時期及び埋積時期も縄文時代早期後半以降となる。これらの遺構の内2基は、前述もしたが、下半部埋没後の窪みを火を使用する為に利用している。

第1表	1-1	1-2	1-3	1-4	1-5	1-6	1-7	1-8	1-9	2-1	2-2	2-3	2-4	2-5	2-6	2-7	2-8
図番号	10-1	-2	-3	-4	-5	-6	-7	-8	-9	-10	-11	-12	-13	-14	-15	-16	-17
写真番号	7-2	4-2	-	5-3	5-2	6-1	-	5-1	7-1	4-1	5-4	6-2	6-3	6-4	4-3	7-4	7-3
遺構名	B i 03	B j 06	B j 68	C a 03	C b 09	C d 09	C d 71	C g 27	C h 03	A f 06	C e 59	C e 53	C f 53	C f 59	C i 21	D a 18	D a 12
上端径 cm	156	150	92	104	130	139	74	112	126	97	120	119	133	105	80	127	123
下端径 cm	87	70	58	73	95	100	68	68	92	108	115	160	151	115	90	120	123
深さ cm	79	80	85	55	96	98	42	106	81	51	87	90	80	86	45	46	64
遺物の有無	3片			4片	1片			2片	12片	多数				1片	多数		

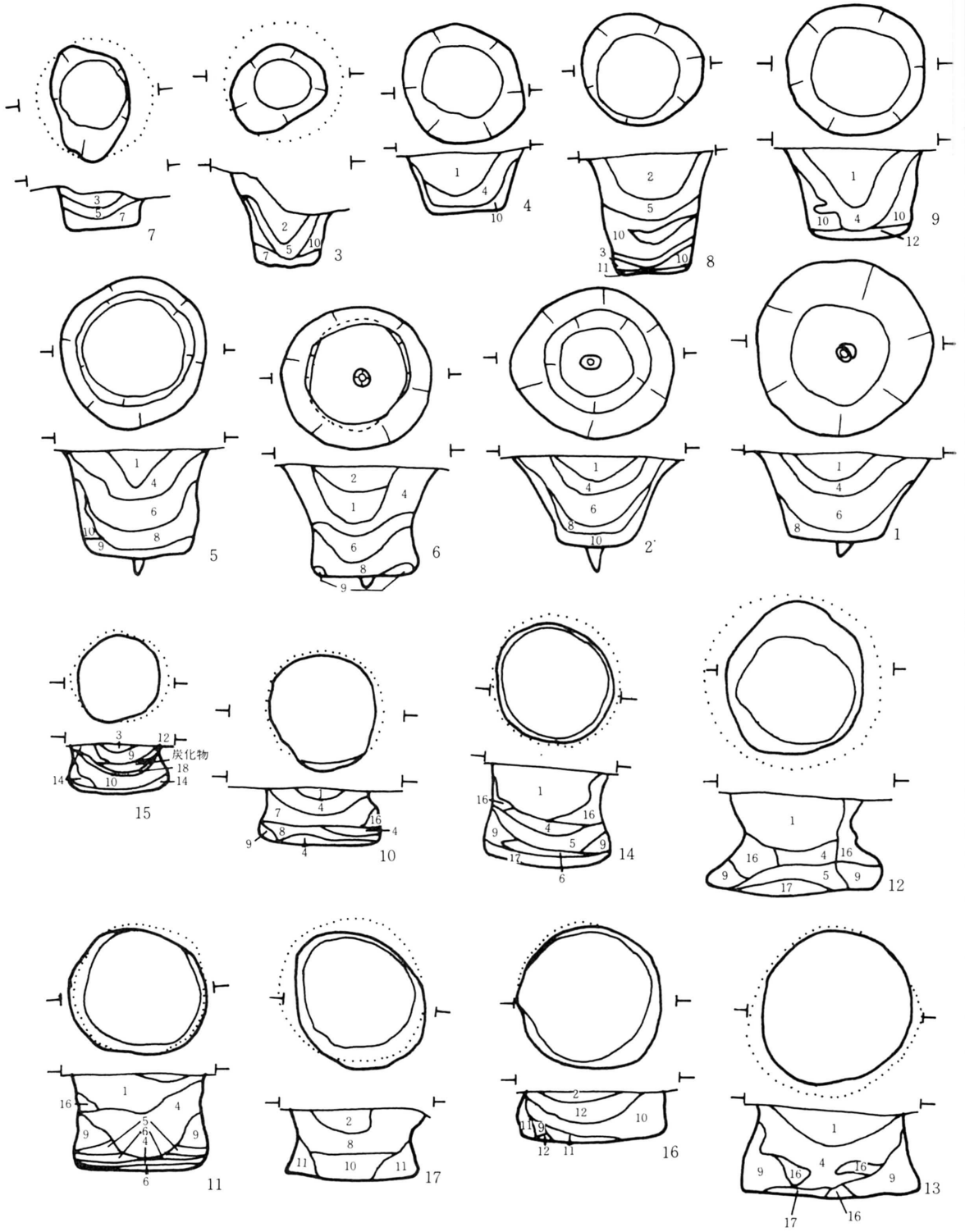
●第一群土壌 土層註記

1. 黒色 (Hue10YR%) 腐植土—おずかに焼土を含む
2. 黒褐色 (" " %) " —焼土炭化物微量
3. " (" " %) " —若干褐色土を含む
4. " (" " %) " —地山質土幾分多く含む
5. 暗褐色 (" " %) シルト質土—腐植質土幾分多く含む
6. 黒褐色 (" " %) 土 —腐植質土が多く含まれる
7. 暗褐色 (" " %) 土 —粘性あり、若干地山質土含む
8. 黒褐色 (Hue 7.5YR%) 土 —腐植質土が多く含まれる
9. " (" ") " —8に炭化物が加わる
10. 暗褐色 (" 10YR%) " —地山質土
11. 鈍黄褐色 (" " %) " —腐植土若干混在
12. 褐色 (" 7.5YR%) " —腐植土を幾分多く含む
13. " (" 10YR%) " —

●第二群土壌 土層註記

1. 黒色 (Hue10YR%) 腐植土—炭化物・砂礫を微量含む

2. 暗褐色 (Hue10YR%) 腐植土—地山質と腐植質半々混在
3. 褐色 (" 7.5YR%) 土 —草根・炭化物混入
4. 黒褐色 (" 10YR%) 腐植土—焼土を若干含む
5. " (" " %) 腐植土—シルト質・炭化物少量混入
6. " (" " %) " —5に褐色土が加わる
7. " (" " %) " —遺物・焼土・炭化物を含む
8. " (" " %) " —シルト質 (30%) 礫含む
9. 褐色 (" " %) " —シルト質 (70%) 腐植質 (30%) 崩落土
10. 暗褐色 (" " %) 土 —焼土・炭化物若干含む
11. 褐色 (" " %) " —崩落土
12. 暗褐色 (" " %) " —焼土・炭化物若干含む
13. " (" " %) " —腐植質が12より多い
14. 褐色 (" 7.5YR%) " —焼土混在
15. 黄褐色 (" 10YR%) " —壁崩落土
16. 暗褐色 (" " %) " —
17. " (" " %) " —「霜降り状混在」
18. 明褐色 (" 7.5YR%) " —焼土・炭化物混入



第10图 土壤图

S = 1 / 60

4 溝状土壌 (陥し穴状遺構) (第11~15図、写真8~13図、第2表)

前述した土壌の第一群所属のものも用途として同じ陥し穴が考えられたが、形態的にまとまった本群を独立して扱った。後述のごとく、まとまっているとはいえ、規模よりA・Bの二群に細分も出来そうだが一括して記述する。総検出数は50基である。

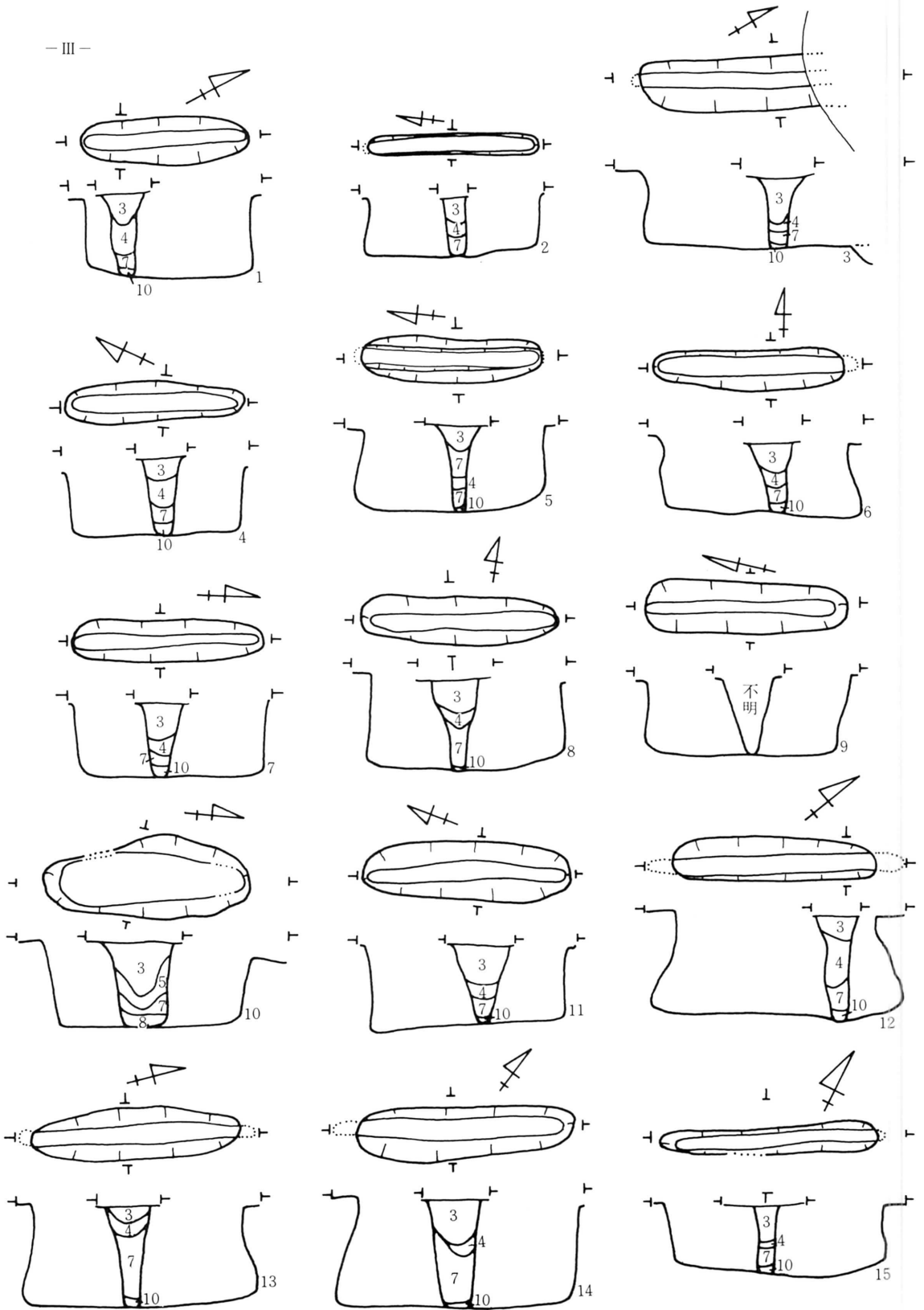
〔分布・方位等〕全体として東に緩く傾斜する調査地の、西半部に多く、長軸が等高線に沿うような方向に配置してあるものが多い。点在する物の他に3基・5基・7基等並列してまとまった形で検出されたものもある。

〔平面形・規模等〕検出面形は超長円形又は両端の閉じた溝状で、後者より名称は付されたが、上端長軸長は156~400cm、短軸長は21~72cm、深さは55~120cmの値を示す。断面の検出形は短軸方向において撥形又はV字状・U字状で、これらが名称として付された経過もある。埋土等の観察の結果からは長軸方向は横長の長方形・短軸方向は縦長の長方形に掘り込まれたものと思われる。規模の傾向としては長軸長に二群のまとまり(156~246cmと286~400cm)が見られるが、短軸長・深さの関係を合せ考えた場合形態的特質と見る事は難かしい。

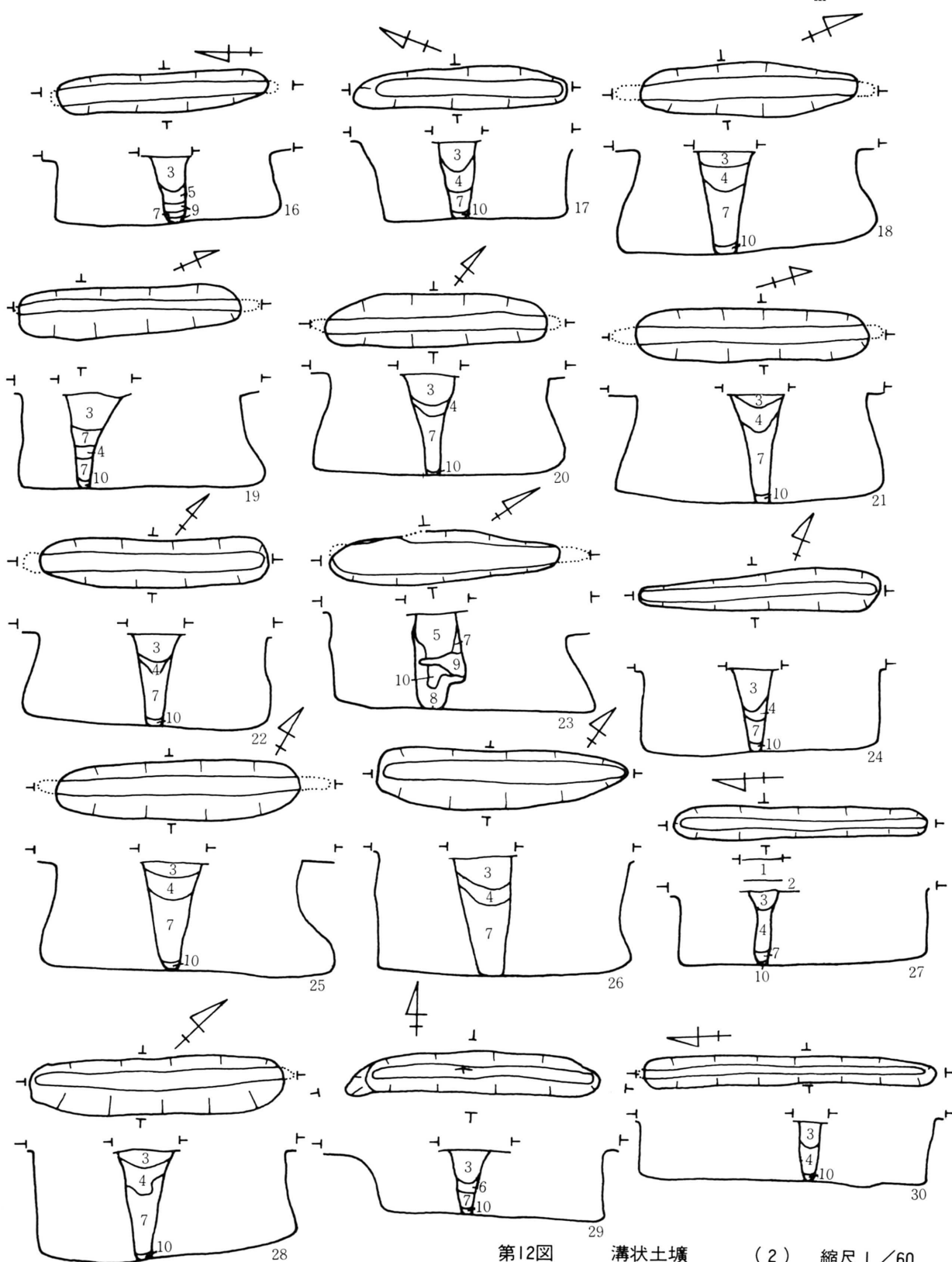
〔埋土・出土物・その他〕自然堆積を示す埋積土の最下層は黒褐色腐植土の薄層で、壁部崩落土の厚層・旧表土の黒色腐植土の最上層へと続いている。出土遺物は最上層に含まれる少量の縄文土器の細片である。これら遺物には、繊維土器と呼ばれるもの、網目状撚糸文の施文されているものがあり、時期としては縄文時代早期後半以降を示すものである。各遺構のそれぞれについて構築時期を明確にする事は現在出来ないが、並列配置をした同規模の物は同時期と推定できる。

第2表	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
図番号	11-3	14-46	12-27	13-40	13-37	11-15	13-32	4-43	14-50	13-39	14-44	13-35	13-36	13-31	14-47	11-1
写真番号	8-1	8-2	8-3	8-4	8-5	8-6	8-7	8-8	8-9	9-1	9-2	9-3	9-4	9-5	9-6	9-7
遺構名	A h 68	B a 12	B a 50	B a 68(西)	B a 68(東)	B a 74	B b 53	B b 71	B c 18	B c 59	B c 65	B d 18	B d 03	B d 71	B e 50	B e 53
開口部cm	(160)×52	377×48	243×29	346×41	338×72	205×23	308×52	362×33	400×49	344×37	366×40	330×48	336×50	297×38	382×53	156×46
底部cm	(182)×13	372×12	240×9	389×12	346×21	193×12	302×19	355×17	381×14	332×11	361×18	302×12	335×16	315×12	314×10	151×15
長さcm	68	120	72	87	92	62	73	88	104	86	78	89	100	79	107	77
長軸方向	N30°E	N12°W	N2°E	N24°E	N1°W	N63°E	N10°E	N26°W	N10°E	N17°W	N7°W	N36°W	N29°W	N5°E	N27°E	N27°E
その他						埋土層厚未3尺										
17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
13-34	14-42	11-11	11-9	13-38	12-29	11-4	12-17	12-16	11-2	11-7	14-49	14-41	12-30	12-24	11-5	14-48
9-8	10-1	10-2	10-3	10-4	10-5	10-6	10-7	10-8	11-1	11-2	11-3	11-4	11-5	11-6	11-7	11-8
B f 18	B f 09	B f 06	B f 03	B f 56	B f 83	B g 12	B g 09	B g 107	B h 18	B h 12	B h 59	B j 15	C a 95	C c 21	C c 65	C d 65
328×55	359×44	192×54	189×47	340×64	246×40	166×36	206×39	205×36	159×21	179×39	395×40	352×50	286×27	233×36	170×42	386×54
310×14	348×11	185×15	178×10	325×9	214×11	155×15	182×16	219×17	159×13	174×11	383×12	366×15	277×7	231×11	172×13	402×13
97	71	75	72	76	62	71	76	66	55	68	83	96	59	78	82	91
N 2°W	N53°E	N22°W	N14°W	N20°E	N90°E	N27°W	N21°W	N 4°W	N 7°W	N 2°W	N 4°E	N78°E	N 2°E	N67°E	N 8°W	N73°E
34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
11-12	13-14	12-26	12-18	11-13	12-21	12-20	12-25	12-22	12-28	12-19	11-10	12-23	14-45	11-8	13-33	11-6
11-9	12-1	12-2	12-3	12-4	12-5	12-6	12-7	12-8	13-1	13-2	13-3	13-4	13-5	13-6	13-7	13-8
C e 18	C e 15(西)	C e 15(東)	C f 24	C f 24(東)	C f 21	C f 15	C f 12-1	C f 12-2	C g 09	C g 56	C g 62	C g 65	C i 62	D a 68	D b 68	D b 71
129×40	204×49	243×56	212×54	195×48	223×50	215×50	235×57	223×45	246×54	214×46	190×67	225×49	374×41	182×46	310×48	178×37
238×18	215×20	236×20	248×21	218×18	261×16	243×16	281×17	233×15	250×17	236×11	171×48	251×30	402×10	173×13	291×10	186×17
99	100	117	102	94	106	100	102	90	106	91	80	92	110	85	80	65
N38°E	N53°E	N51°E	N23°E	N15°E	N17°E	N53°E	N58°E	N52°E	N43°E	N24°W	N 5°W	N25°E	N22°W	N80°E	N37°W	N88°E
石器1点		縄文土器2片			梨木相式					梨木相式	縄文土器2片		縄文片4	縄文片1	縄文片1	剃片1

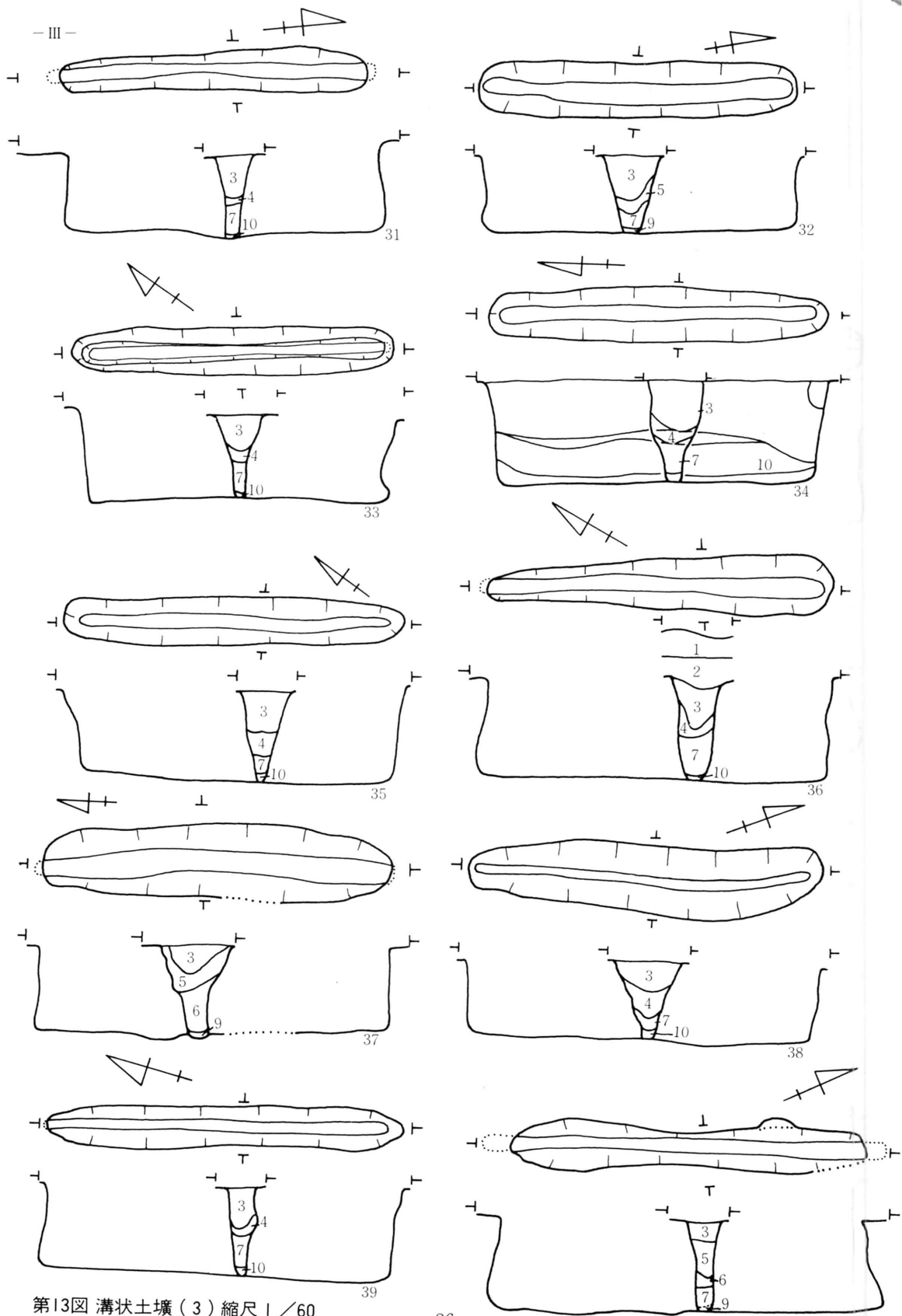
- 溝状土壌(土層註記)
1. 黒褐色(Hue10YR%) 腐植土—表土
 2. 黒色(Hue10YR%) " —旧表土
 3. " (" " %) " —1と2の混土炭化物含む
 4. 黒褐色(" " %) シルト質土—シルト質地山崩落土
 5. " (" " %) " —明黄褐色土塊含む
 6. 黒褐色(Hue10YR%) シルト質土—明黄褐色土塊多く含む
 7. 暗褐色(" " %) " —地山崩落土
 8. 褐色(" " %) 粘土質土—黒褐色土少量含む
 9. 黒褐色(" " %) 腐植土—褐色土露降り状混在
 10. 黒色(" " %) " "



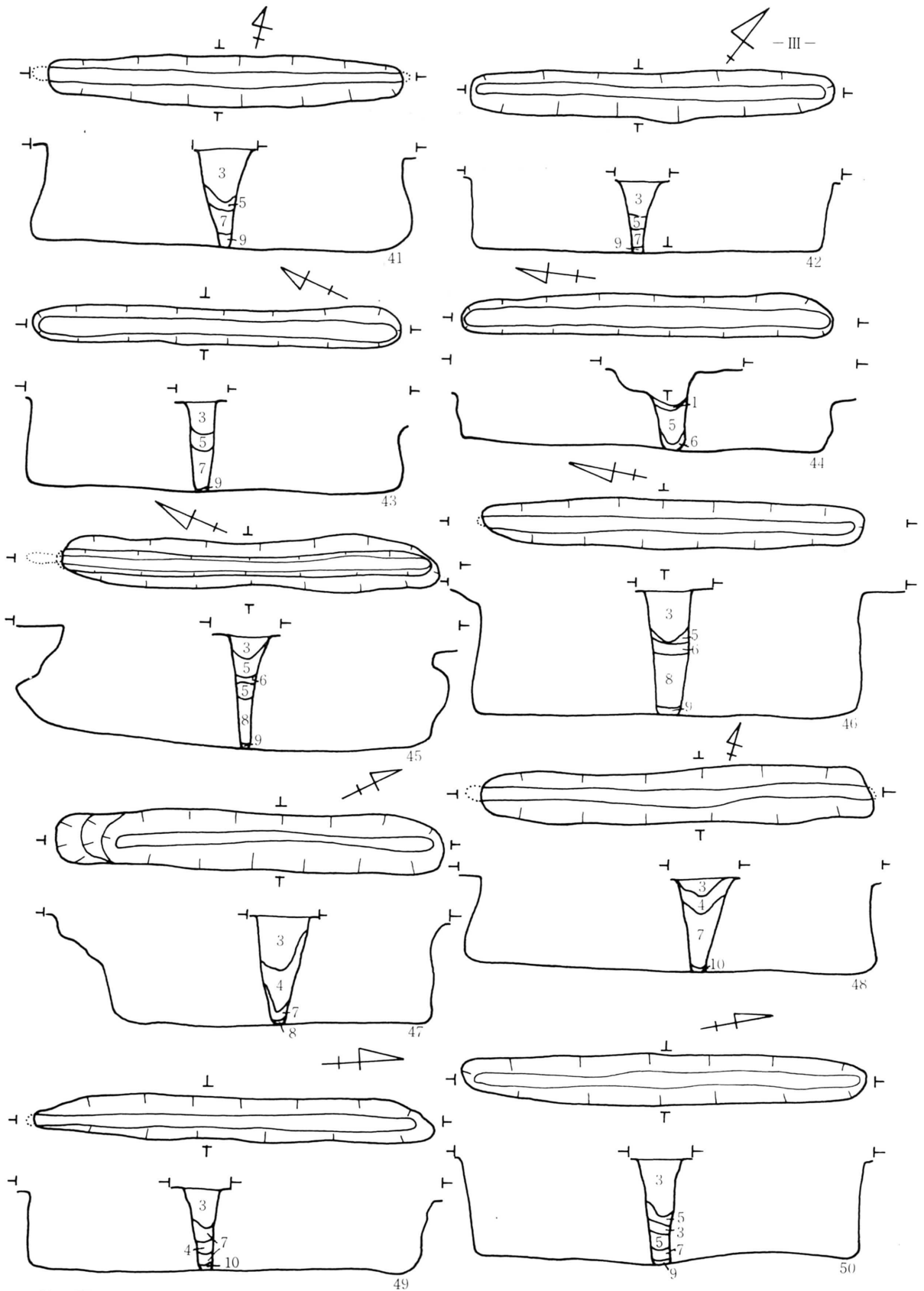
第11圖 溝状土壤 (1) 縮尺 1/60



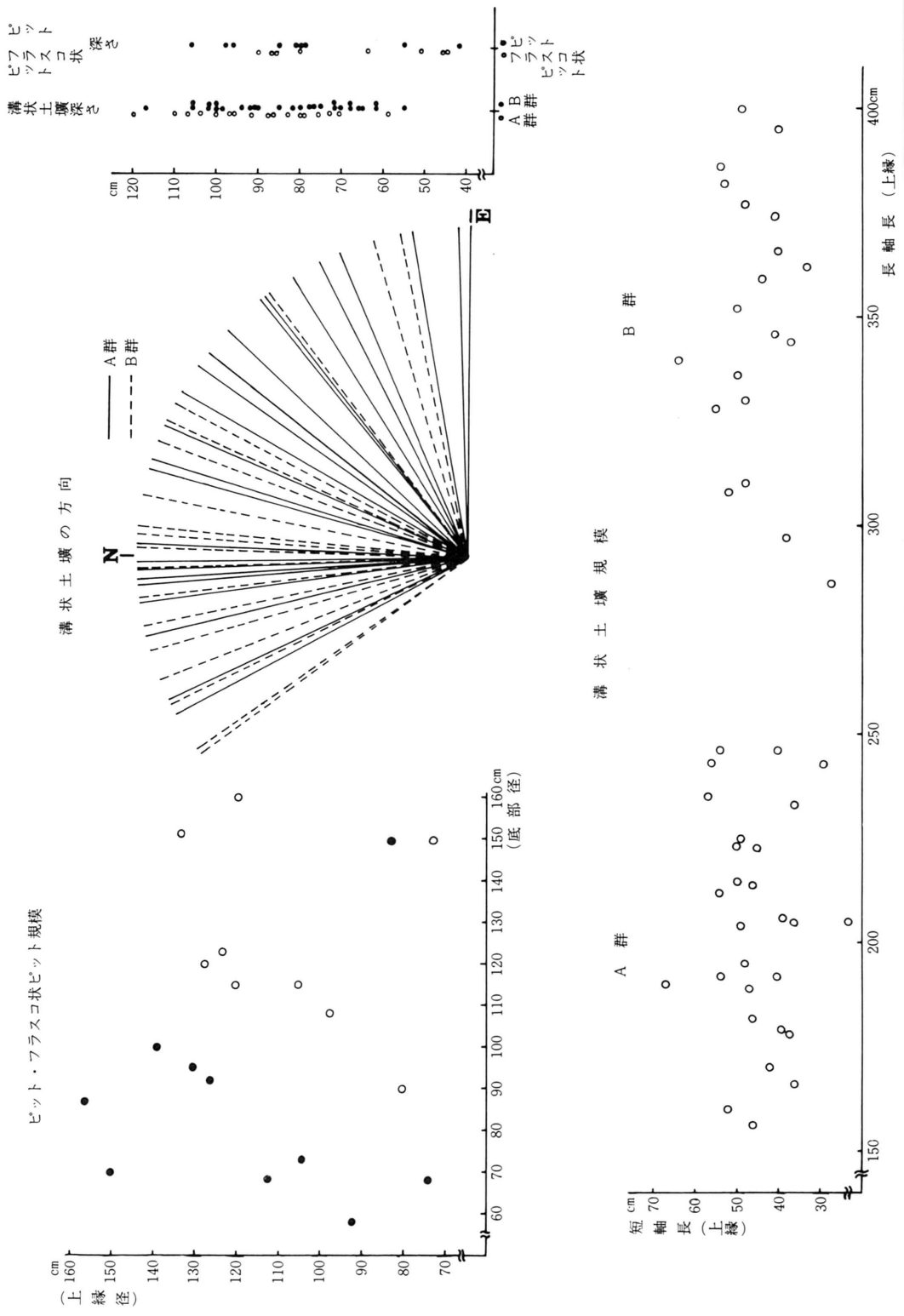
第12圖 溝状土壤 (2) 縮尺 1/60



第13図 溝状土坑 (3) 縮尺 1/60



第14図 溝状土坑 (4) 縮尺 1/60



第15図 土壌諸元統計表

5 縄文時代の遺物

この時代に属する出土物は少量の石器と土器片計 762 点である。その内遺構に関連あるものはすでに記述したものもあるが以下にまとめておく。

a 石器 (第16図、第3表、写真第14図)

この種類は少量で、石鏃 2 点、石匙 5 点、石筥状石器 2 点、その他石錐等の使用形態の考えられる剥片あり、計 33 点は写真図版に掲載してある。

1) は 1 側辺が欠けてはいるがほぼ完形の石鏃である。2) は先端及び基部を欠くが石鏃と思われる。薄身で、茎部の巾は大きいと推定出来る。3) は細長い石匙であるが調整は粗である。4)・5) は先端残存片である。6) も先端残存片で、調整は両面に施されている。7) は未製品で下端は厚く平行な鋭い稜を持ち、裏面程鋭角である。8) は左側下端にかけて欠損している。

9) は先端残存片で、各稜は直線的で周辺部は鋭角である。10) はほぼ全周が鋭い剥片で使用痕が認められる。11) は 10) に類似の形態を有する。右側端は欠損している。13) は下端及び左側に使用痕の認められる石錐である。16) は (Ce15) 溝状土壙出土の小振りな石筥である。調整は両面に施されているが断面形は非対称である。石匙に近い形態及び使用痕を有する。

17) は 16) 以上に断面形及び平面形は非対称であるが石筥に属させた。18)・19) は調整のあまり施されていないもので、材質の色調は前者が青灰色～褐色、後者が暗赤色と特異である。20) は下端に 3 箇所抉り込み様の剥離痕を有する。21) は右側上辺が鋭く使用痕も認められる。

22)・23) には調整がほとんど施されていない。24) は左側の 2 ヲ所に調整痕が認められる。加撃による加工は長い年月を隔てた 2 時期の痕跡を窺わせる。25) は右側に調整及び使用痕が多く認められるが、抉状欠損等から先端方向を軸とした回転使用が考えられる。26) は調整のほとんど認められない剥片で、下端部等の形状より石斧としての使用が可能なおものである。29) は下側及び左側が鋭く、右側は抉り込んだ様に欠損している。30) にはほとんど調整が認められない。

b その他の石製品 凹石 (第16-33図、写真14-33図) 1 点は研磨面を有する。磨石 (第16-35図写真14-33図) 1 点は

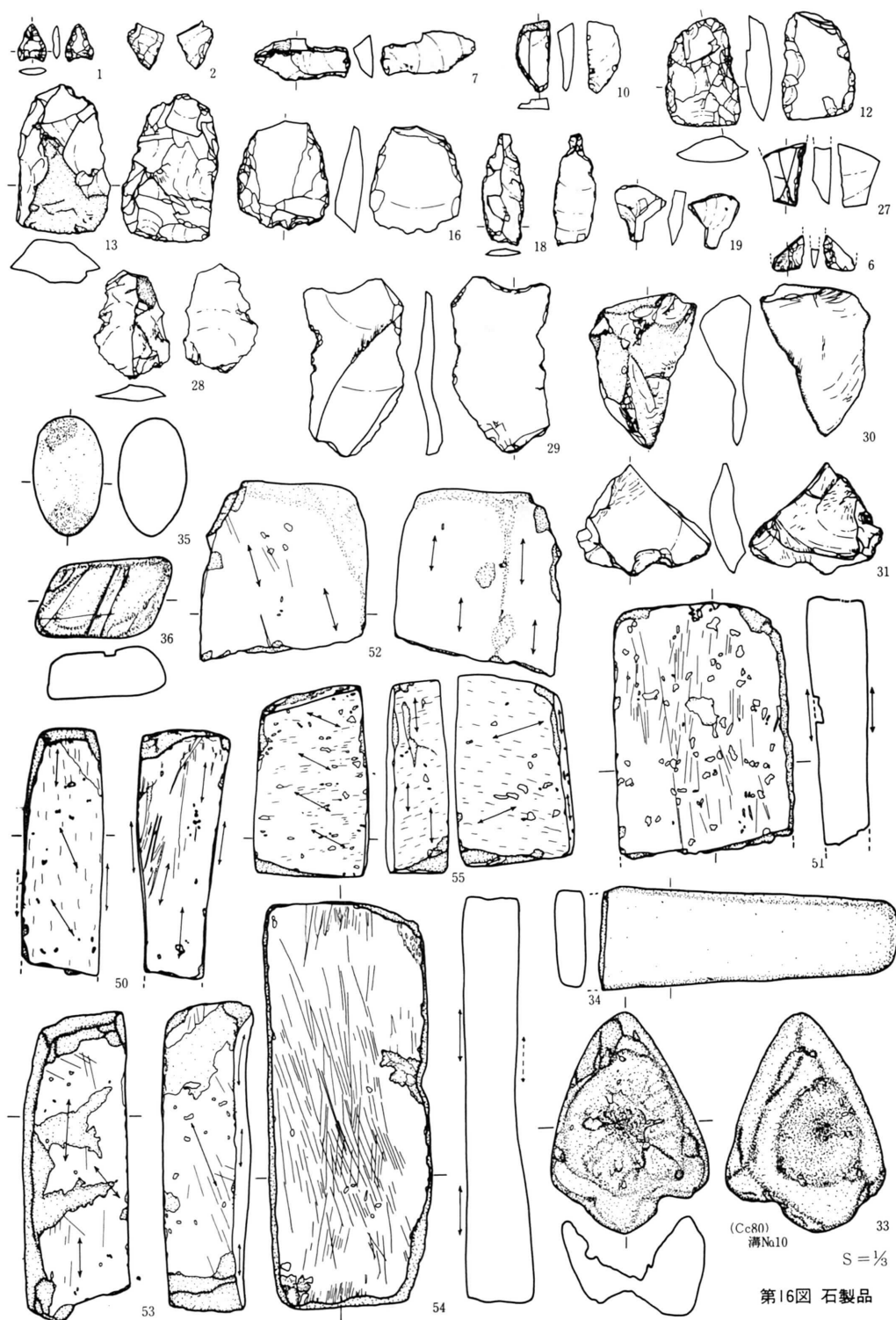
c 縄文式土器 (第17図、写真15図、第4表)

出土物は細片が大半で、部分的に接合し形をなすが完形のものはない。胎土中に繊維を混入させた痕跡の認められるもの 276 点、認められぬもの 486 点で、合計 762 点である。各遺構の床面又は埋土よりの出土物も含め一覧表にまとめて記してある。

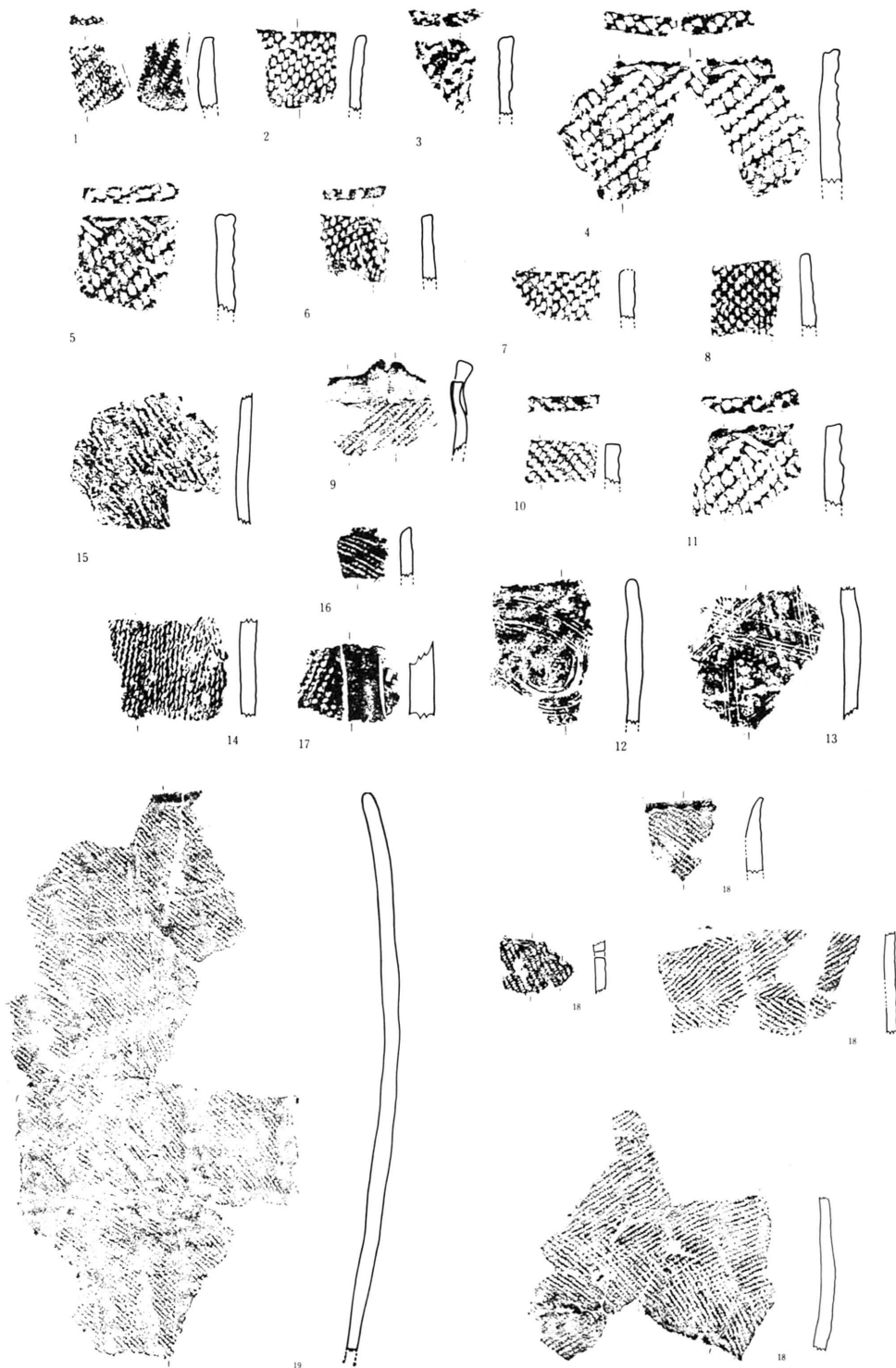
1)~10)の土器片の大半は口唇部に縄文が施文してあり、胎土に繊維の混入を示す痕跡が認められるものであるが、4)・9)・10)には口唇部への施文はない。施文に用いた縄文原体については、L-Rのものが多いのでその種類は複数と認められる。3)には口縁部内面に細長いL-Rの節をもつ原体にて施文してあるが、他の破片には同様な手法は認められず、節も大きく荒目である。11)・15)~19)は(Ci21) 炉跡に関する出土物である。18)は五十瀬神社遺跡出

第3表	登録番号	実測図番号	写真図版番号	出土地点(遺構)	層位	縦cm	横cm	厚さcm	重量g	材 質	備 考	
石鏡	1	1	16-7	14-1	Ci56	I	1.8	1.3	0.3	0.5	珪質泥岩	一側辺が欠けている
	2	2	16-2	14-2	Cf24	I	2.2	1.6	0.2	0.6	"	先端及び柄部欠く
石匙	1	3	16-18	14-18	Cg15	I	5.0	2.0	0.3	4.2	珪質細粒砂岩	両側辺に使用痕
	2	4	-	14-9	Cg50	III	3.8	2.0	0.7	4.5	砂質泥岩	右側辺に使用痕
	3	5	16-10	14-10	Cg52	I	3.2	1.6	0.7	3.7	珪質泥岩	左側多用
	4	6	16-6	-	(表採)	-	1.6	1.4	0.4	1.0	"	先端残存片
	5	7	-	14-20	Dt68	II	2.9	5.1	2.0	13.0	"	未製品
割片	1	8	-	14-24	Cf59	I	3.1	2.1	1.0	4.0	"	下端、左側辺使用
	2	9	16-27	14-27	Df68	II	2.9	2.0	0.7	4.1	硬質泥岩	先端、左側縁使用
	3	10	-	14-21	(Cg27)土塊	I	2.1	1.6	0.5	1.2	玉髓	薄手小型
	4	11	-	14-22	(Cg56)溝状土塊	3	2.1	1.4	0.3	0.6	珪質泥岩	" "
	5	12	-	14-8	(Cg27)土塊	I	3.7	1.8	0.6	2.7	"	上部側辺に使用痕
	6	13	16-19	14-19	(Ca71)溝状土塊	3	2.6	2.4	0.7	3.4	"	先端・左側使用
	7	14	16-7	14-7	Ce18	I	4.4	1.9	0.8	5.1	"	先端・右側辺使用
	8	15	-	14-11	Cj09	I	5.0	2.7	1.2	14.4	珪質緑色泥岩	右側縁多様
石甕	1	16	16-12	14-12	(Ce15)溝状土塊	3	4.9	3.4	1.2	19.0	硬質泥岩	三側辺使用
	2	17	16-13	14-13	Da18	I	6.7	4.1	2.5	68.0	珪質泥岩	上部調整不充分
撻器	1	18	-	14-14	Cf24	I	3.9	3.0	1.0	9.2	玉髓質泥岩	右側と下側使用
	2	19	-	14-15	(Cf21)溝状土塊	3	3.7	4.3	1.6	20.4	珪質泥岩	下端使用及び抉り使用
不定形	1	20	16-16	14-16	Dg50	I	5.0	4.1	1.2	27.3	珪質砂岩	両側辺及び下端使用
	2	21	-	14-17	Ce18	I	5.7	4.8	1.7	49.5	玉髓質泥岩	右側辺に使用痕
	3	22	16-28	14-28	Ai03	II	5.0	3.5	0.8	11.5	珪質泥岩	4周使用
石器	4	23	16-29	14-29	Ce18	I	8.1	4.3	0.8	27.6	硬砂質泥岩	"
	5	24	16-30	14-30	De62	III	7.2	5.0	2.3	51.6	珪質泥岩	右側先端使用
剥片	6	25	16-31	14-31	Dd68	III	5.1	6.1	1.3	35.0	"	右側辺多用、中央に抉り痕
	9	26	-	14-32	Ce18	I	10.0	5.3	1.4	83.5	"	下端に使用痕
	10	27	-	14-4	(Ch59)溝	底部	2.6	1.4	0.5	1.1	"	先端・左側辺使用
	11	28	-	14-6	De59	II	2.6	1.5	0.4	1.4	"	先端使用
	12	29	-	14-23	Cd56	I	3.0	2.0	0.6	3.5	"	先端・右側辺に使用痕
13	30	-	14-26	Dd68	II	2.8	1.9	0.9	3.0	細粒砂質泥岩	先端に使用痕	
凹石	1	33	16-33	14-33	(Ce80)溝No.10	-	10.1	7.2	4.5		玄武岩質溶岩	両面に使用痕・側面研磨

第4表	図版番号	写真図版番号	出土位置	器形	部位	色調	土 性	内面(調整等)	外 面 (調整・施文等)	備 考	
縄文式土器	1	15-1	Cd56	尖底?	口縁部	鈍黄橙	砂、繊維、粗	剥離	L-R(摩滅)	口唇部縄文圧痕	
	2	15-2	Cd59	"	"	鈍 褐	砂、繊維、粗	"	(摩滅)L-R	口唇部縄文(L-R)圧痕	
	3	17-1	15-3	Ci18 I	"	褐 灰	石英、繊維、粗	"	L-R(細長)	" "	
	4	17-2	15-4	Ci53 I	"	明赤褐	雲母、繊維、普	摩滅	L-R(荒目)	網目様に見える	
	5	17-3	-	Ci56 I	"	"	"	"	L-R(L・太長)摩滅	口唇部縄文(L-R)圧痕 摩滅	
	6	17-4	15-5	Ci59 I	"	"	"	"	L-R-L(荒太)摩滅	口唇部縄文(-L)圧痕 摩滅	
	7	17-5	-	Cf06 I	"	"	"	"	"	"	
	8	17-6	15-6	Ch71 地山	"	鈍赤褐	雲母 粗	炭質物附着	L-R(小粒)	口唇部縄文圧痕原体不明	
	9	17-7	-	Ci65 地山	"	明赤褐	砂、繊維、普	摩滅	L-R(荒目)摩滅	口唇部剥離	
	10	17-8	15-7	Da65 地山	"	"	"	"	"	9に類似	
	11	17-9	15-8	Cd21 地山	浅鉢	鈍 橙	石英、砂、普	磨き	2又突起口縁磨き、L-R(細目)	Ci21砂跡出土口縁に類似(後期片)	
	12	17-10	15-9	(Cf21)溝状土塊	尖底?	"	"	砂、繊維、普	摩滅	R-L(荒目)	口唇部へ縄文結節部押圧
	13	17-11	15-10	(Cg27)土塊 I	"	橙	砂、繊維、粗	"	L-R(荒太)	口唇部縄文圧痕(炭木型式-舟入島下層-早稲田部加印跡)	
	14	-	15-11	(Cg56)溝状土塊	"	鈍赤褐	"	"	"	R-L(細長)	口唇部縄文圧痕
	15	17-12	15-12	(Ci21)炉壁	深鉢	灰 褐	砂、石英、粗	"	磨掃跡、炭質物附着	口唇部磨き、曲線・交叉線、体部片橙色	
	16	17-13	15-13	(Ci21)炉埋土	体部	橙 色	"	"	"	15と同一個体	
	17	-	15-14	(Ci21)炉埋土	浅鉢	口 体	浅黄橙	"	"	L-R(荒目)摩滅	推定口径13cm 18に類似
	18	-	15-15	(Ci21)炉	台付鉢	台 "	"	"	"	磨き4個のすかし	台高4.5cm、最下段(台部)径7.5cmオオタニ-複製
	19	-	15-16	(Ci21)炉	深鉢	体 部	鈍黄橙	"	"	R-L R(細目)擦糸	硬質
	20	17-15	15-17	Cf18 I	浅鉢	"	灰黄褐	砂、石英、普	磨き、剥離	L-R(細目)擦糸	器厚5mm 頸部近く
	21	17-16	-	Cj65 地山	"	口縁部	褐 灰	細砂	普	"	器厚5mm 外傾口縁
	22	17-17	15-18	Ci171 地山	深鉢	体 部	浅黄橙	砂、細礫、普	"	磨清R-L-R	器厚1.3cm 地文を擦消
	23	-	15-19	(Cg59)住居跡	"	底 部	鈍 橙	"	"	磨き、剥離	L-R(荒目)、底近く磨き
	24	-	15-20	"	"	体 "	"	"	"	磨き	R-L(太目)炭質物附着
	25	-	15-21	(Af06)土塊	"	口-体部	"	細砂	普	"	磨清L-R(細目)帯状沈線区画
	26	17-18	15-22	Ch18	尖底?	口-体部	"	砂、繊維、粗	摩滅	R-L(細長)溝状	器厚5mm 液状口縁
	27	17-19	15-23	Cf24	深鉢	口-体部	"	砂、細礫、普	磨き	L-R(細長)磨き口縁	内外面には炭質物附着、外反口縁(胎分資料)



第16図 石製品



第17図 繩文土器

18. Ch18 I出土

1-17-S=16
18-19-S=16

第17図 繩文式土器

土のものに類似し、大木9式ないし後期初頭のものと考えられる。(岩手県文化財調査報告書第33集「東北新幹線関連I集」) 12)~14)等の土壙及び溝状土壙出土の半数は胎土に繊維を混入させた痕跡が認められる。(18例中11) 20)・21)は原体に撚糸を使用している。遺構に関して出土した撚糸の2例の内の1は網目状を呈している。22)~25)は器形としても深鉢型を呈し、胎土 施文(磨消技法を示す23)・25)等)より縄文時代の中期より後期にかけてのものである。26)は破片数も多く、胎土分析資料とした。胎土に繊維を混入させた痕跡の認められるものである。分析結果は別記の通り検出元素としてCが、他の縄文土器と異なり存在する事が特徴として上げられるが、時期・地域性等も条件に入れての比較でないので今後の課題となる。

古代以降の遺構と出土遺物

古代又は中世に属する2棟の住居跡等がある。

a・竪穴式住居跡

(Bc74) 竪穴式住居跡 (第18図、写真16図)

〔検出位置等〕 調査地北東部より中央寄りに確認された。後述する(Bc71)建物跡と重複するが、より古い遺構である。

〔平面形・規模・方位等〕 南北に幾分長い長方形で、広さは2.8 × 2.6 m²である。残存壁は床面よりほぼ直に立ち、高さは25cm位である。長軸方向はほぼ北である。北壁の西寄りに煙道様の張り出し部分があるが、カマド等の明確な施設は認められない。

〔床面・周構等〕 ほぼ平坦な床面上の全面に炭化物が散乱してる。周溝状の施設も認められる。床面下には竪穴の掘方が有り、又廃絶後は人為的に埋没されたとの調査所見がある。北壁及び南壁際に3個の柱穴(夫々掘方を有す)がある。平均直径は30cm、深さは40cm、柱あたりの直径は約15cmである。

〔出土遺物・時期等〕 直径約3cmの銅製品(かなり腐触している)1点だけの出土であるが他の状況と考え合せて、平安時代以降に属するものと思われる。

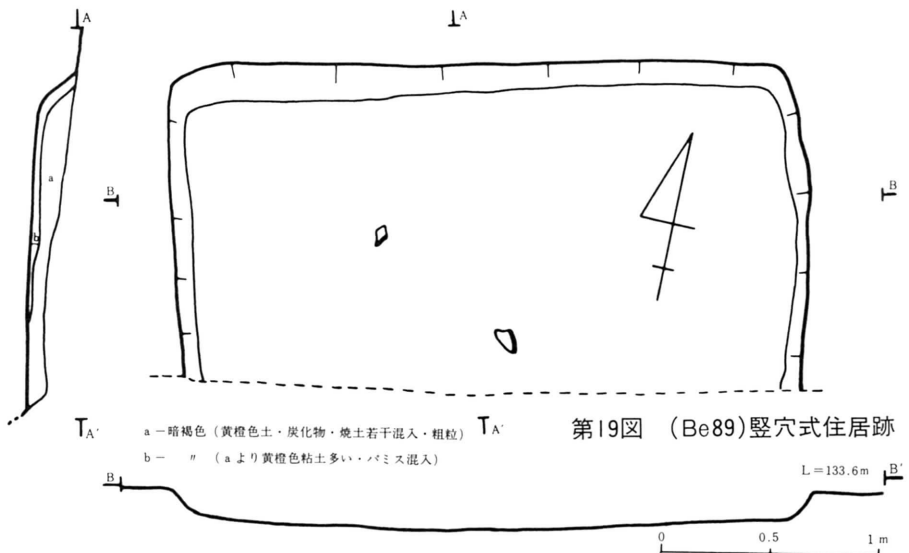
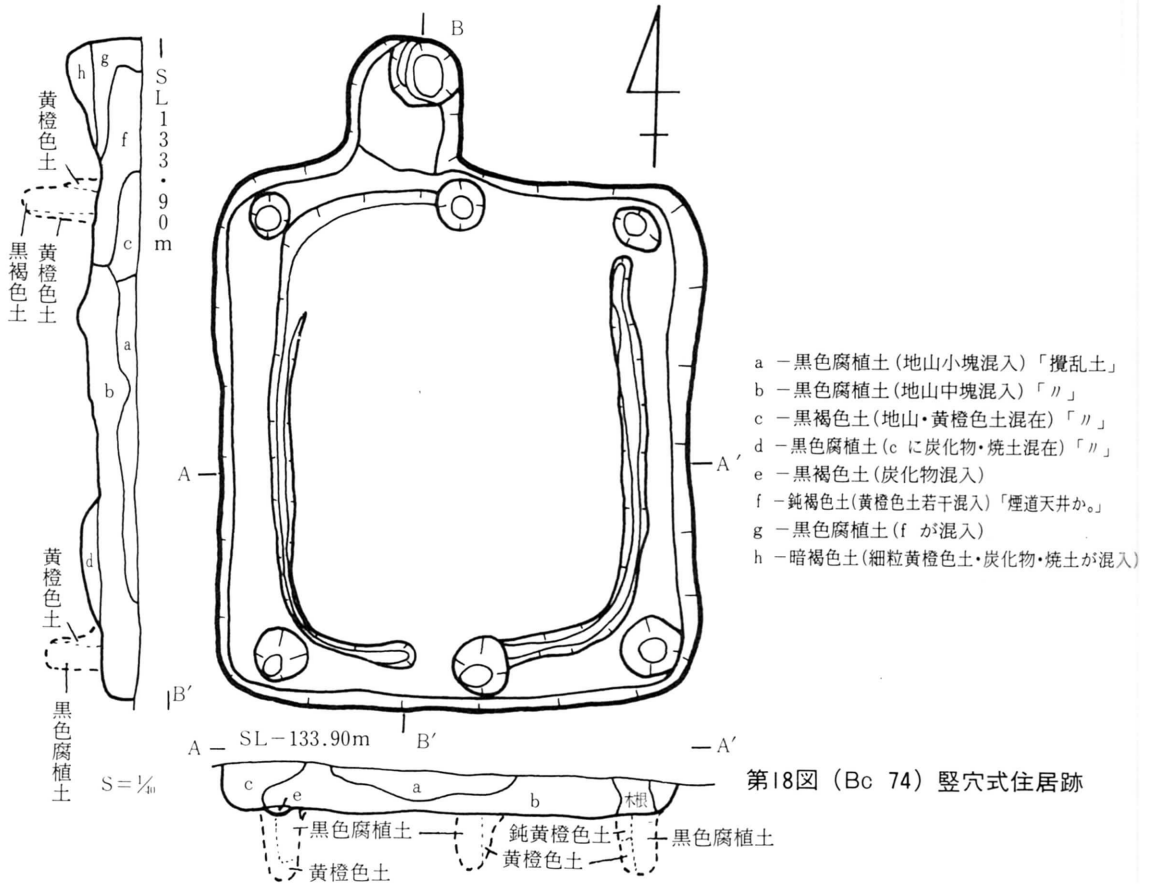
Be89 竪穴式住居跡 (第19図、写真16図)

〔位置等〕 調査地の北東部寄り、第一掘立柱建物群の南辺溝により南半を破壊されている。

〔平面形・規模・方位等〕 東西辺2.9m、南北残存辺1.5mで、原形は不明である。各辺はほぼ東西・南北方向に沿っている。傾斜している壁の残存高は約15cmである。

〔床面・その他施設・埋土〕 平坦でややしまった地山の床面に柱穴等の施設は認められない。埋土は自然堆積の様相を示し、上層に炭化物・焼土が、下層にパミスが混入している。

〔出土遺物・時期等〕 床面上よりロクロ整形の厚手赤褐色土器体部片 2 点（同一個体）が出土している。他の状況と考え合せて、平安時代以降の遺構・遺物と思われる。



b. 古代以降の出土遺物（第20図・写真16・17図・第4'表）

前述の遺構に関する以外の遺物についても第4表にまとめて記してあるが、赤褐色（軟質）土器（：赤焼き土器以外のものも含む）（合計14片）及び須恵器（合計6片）の破片である。

イ. 赤褐色（軟質）土器 「いずれもロクロ成形が行なわれている。」

杯は4種類で底部3種・体部1種で胎土等特徴は見られない。

皿は推定分も含め2種類で、内1種は部分的ながら口縁より底部まで連続したものである。燈明皿としての用途も考えられる。

甕は体部の小片で、硬質な薄手のものである。

ロ. 須恵器 「大半が調査地東半の低地の溝埋土及び底面よりの出土物である。」

甕の破片と思われる。底部片は2で他は体部片である。底部の1は高台付である。

第4表	図版番号	写真版番号	出土位置	器形	部位	色・料	土性	内面(調整等)	外面(調整・施文等)	備考(推定cm)
赤褐色 土器	1	20-1	16図 (Be89) 竪穴住	不明	体部	橙 色	細礫含む 普	ロクロ痕	ロクロ痕	2 1種 大型甕か
	2	-	17-2 (Ch53) 溝埋土	坏	底部	"	砂含む "	"	糸切痕	1片が底厚8mm
	3	20-8	17-8 (Ch83) "	"	"	浅黄橙 "	"	"	回転糸切痕	2片接合底径55mm
	4	20-3	17-3 (Da83) 方形土壇埋土	不明	口縁	橙 色	石英含む "	" 後磨き	ロクロ痕後磨き	4片1種皿か(第16図)
	5	20-4	17-1 Df77盛土	皿	口~底	"	砂 精	" "	" "	1片炭質物付着
	6	-	17-5 表採	坏	体部	"	"	ロクロ痕	ロクロ痕「モミ痕」	1片
	7	20-7	17-7 "	"	底部	"	砂質 普	不明(磨耗)	糸切痕	1片磨耗(底径7.0)
	8	-	17-6 "	不明	体部	"	石英・砂 "	不明	不明	1片磨耗
須恵 器	9	17-4	17-4 (馬小屋壁)	甕	"	灰 白	石英・砂礫 "	撫で	撫で	1片Bj104P1~107P の中間
	1	17-11	17-11 (Ce101) pit埋土	不明	明褐灰	砂礫	粗	横撫で	横撫で、付高台(ロクロ痕)	厚さ11mm 1片
	2	17-13	17-13 (Cd83) 溝N05	"	褐 灰	細礫	普	"	"、自然釉	" 13mm " 大型甕の頸部近くか
	3	17-9	17-9 (Cd83) 溝N07	"	"	"	細砂	"	ロクロ痕	" 5.5mm 1片小型甕の頸部近くか
	4	17-12	17-12 (Ch83) 溝底	"	底部	鈍黄橙	細礫	粗	"	静止糸切 " 11mm 1片推定底径(5.8cm)
	5	17-10	17-10 (Da86) "	"	体部	灰 白	普	横撫で	"	" 9mm "
6	17-14	17-14 Ci03 I	"	"	褐 灰	"	"	刷毛目(縦)	" 13mm " 2)Bh104pit 4	

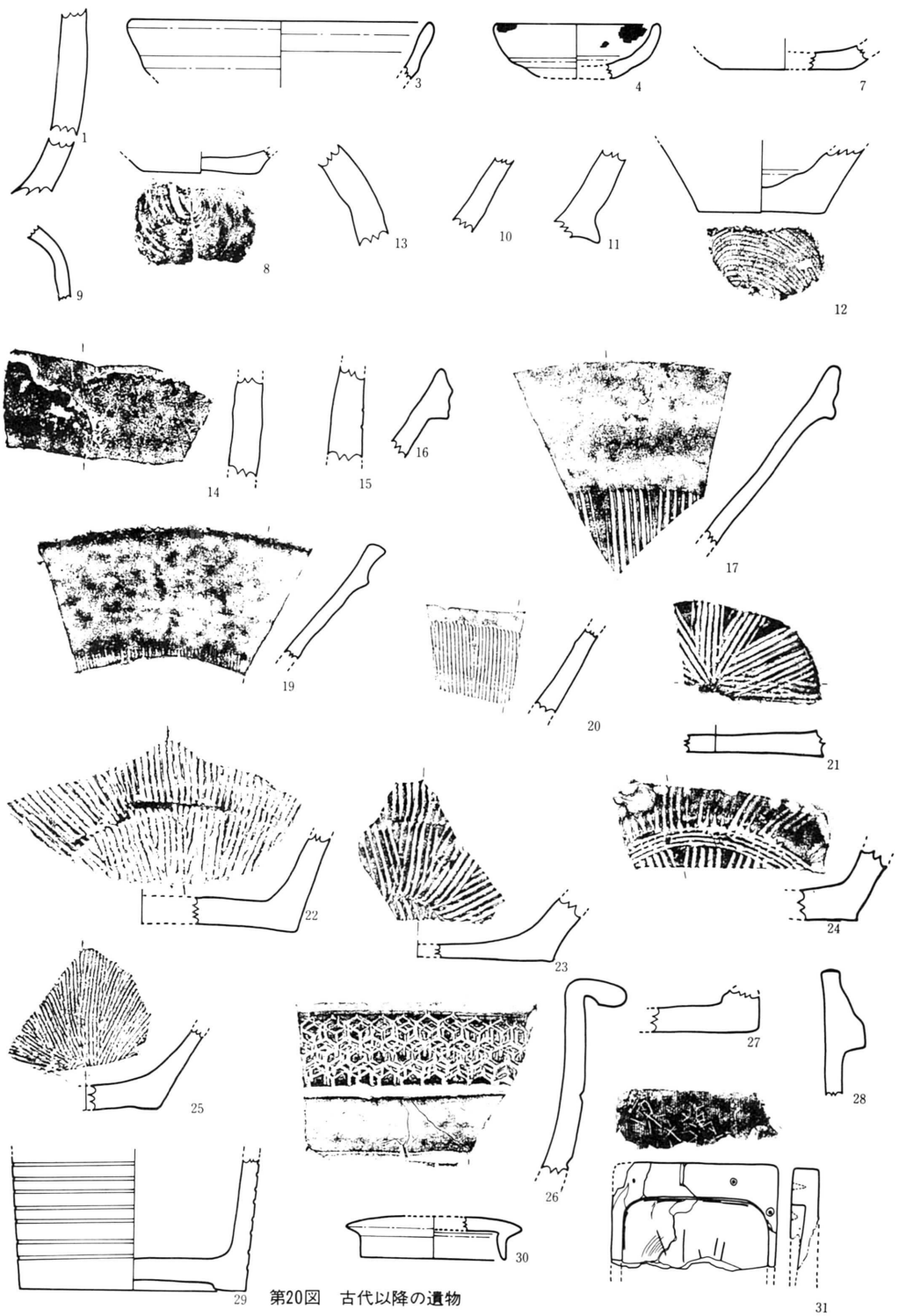
VII 近世以降の遺構と出土遺物

この時期の遺構としては、掘立柱建物群・溝・水場跡・墓壇群等である。これらと関連する遺物は、陶磁器・石器・柱痕・杭・金属製品（鉄器・古銭等）等である。

1. 掘立柱建物群

調査地東半の、溝に区画された地域に検出された掘立柱建物跡は3群に分けられる。

調査地北東部のB地区のものは、西辺と南辺に溝・北は土塁状の高まりに続く段丘崖に囲まれた第一群建物跡である。C地区で西辺に溝と水場を有し、北・南辺に溝と南辺溝付近には墓地を有するものは、第二群建物跡である。第三群建物跡はD地区にあり、東西・北辺に溝がある。これらの建物群中の建物間及び群間・溝は夫々特別な関係を有していたと思われるが、現時点にては個々の状況を述べるにとどめる。



第20図 古代以降の遺物

第一群掘立柱建物跡（範囲中の柱穴総数 251個）（第22図）

この群には4棟の建物跡が確認された。これらの個々については、増改築・その他の建物との切り合い重複の可能性について、再検討の余地を残す。

イ. 第1号 (Aj 65) 建物（第21図、写真19図、第5表）

梁列方位は北より73°東へ偏っている。広さは、梁行7.0×桁行12.0m²（梁行3間×桁行4間）である。西と南側に長さ約1mの廂様構造を有する。柱穴の平均的状況は、掘方直径約50cm、深さ約55cm内外、柱あたり直径約14cmであるが、個々については表及び断面図にて示してある。

この建物の南北の桁柱列は対称形をなすが、東西の梁列は両側と中央が対応するのみである。西側の桁間隔はD₂-D₃とD₄-D₆が3.8mと等しく、D₃-D₄は約2mと短くなっており、廂もそれぞれに対応している。

周囲の柱穴との関係で、東側の南寄りにも廂存在の可能性を示すと思われるものがあるが、この建物図には示さなかった。図示した北側のA₁-A₂・D₁-D₂の関係を見た場合、B₁-（B₂）を考えたい柱穴があるが、この場合も廂として認めなかった。E₁-E₂間が、もう少し短く、前述の柱穴列が平行ならば廂と考えられるものである。

A₃掘方埋土より第20表の2とした寛永通宝が、又建物北方外側のAi62pitにも1とした寛永通宝が出土している。

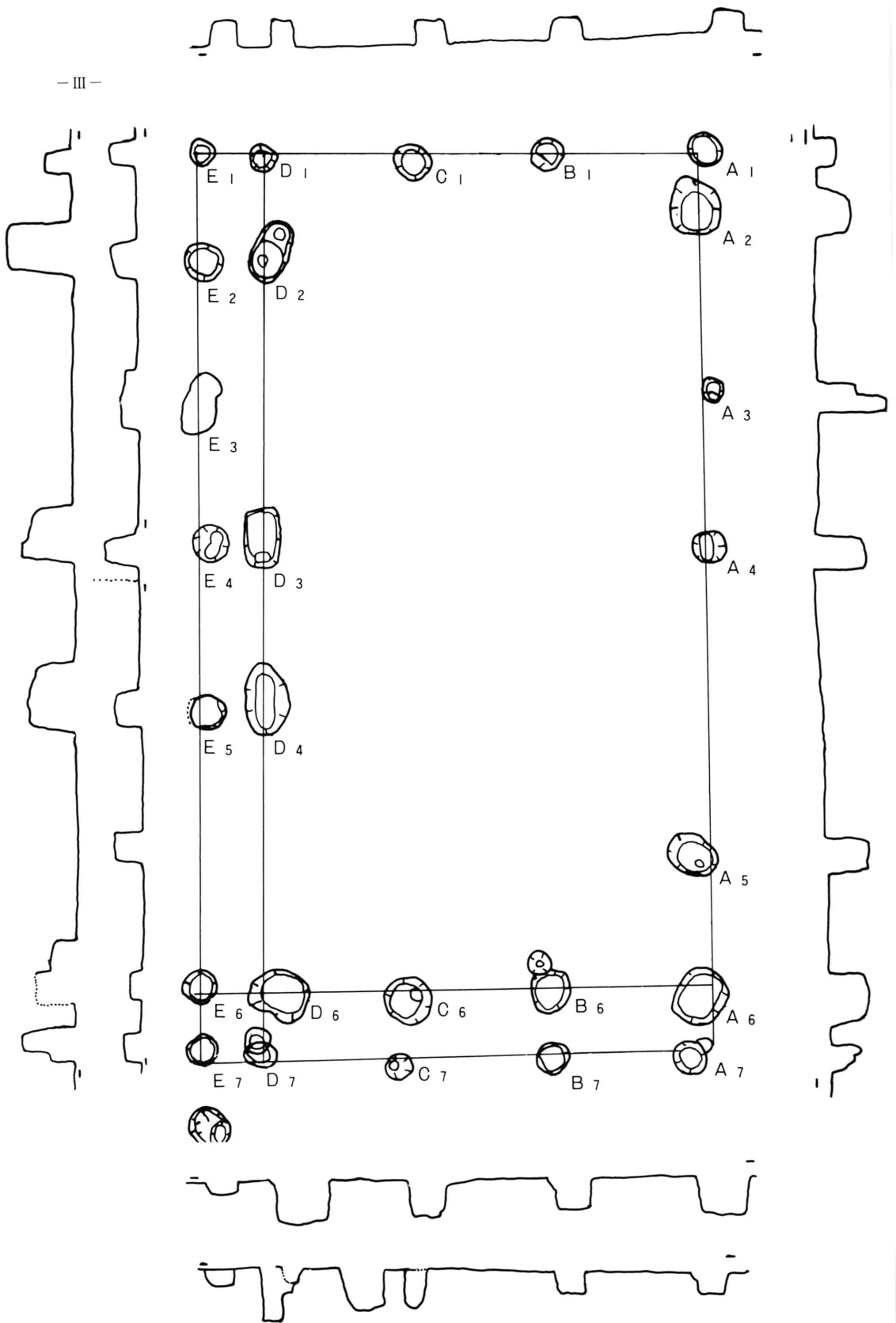
ロ. 第2号 (Aj 74) 建物（第23図、写真19図、第6表）

梁列方位は北より38°西へ偏っている。広さは4.4×8.0m²（梁行2間×桁行3間）である。東側に長さ約80cmの廂様の構造をもつ。柱穴の平均的状況は、掘方直径約40cm、深さ約70cm前後である。この建物の梁列は南北対称であるが、東側及び西側のそれぞれの中間部の柱穴が不明である。西側の梁列線上にはこの建物以外の柱穴と見なしたものが多く存在する。B₂-B₃間の柱穴についても関連付は難しい。

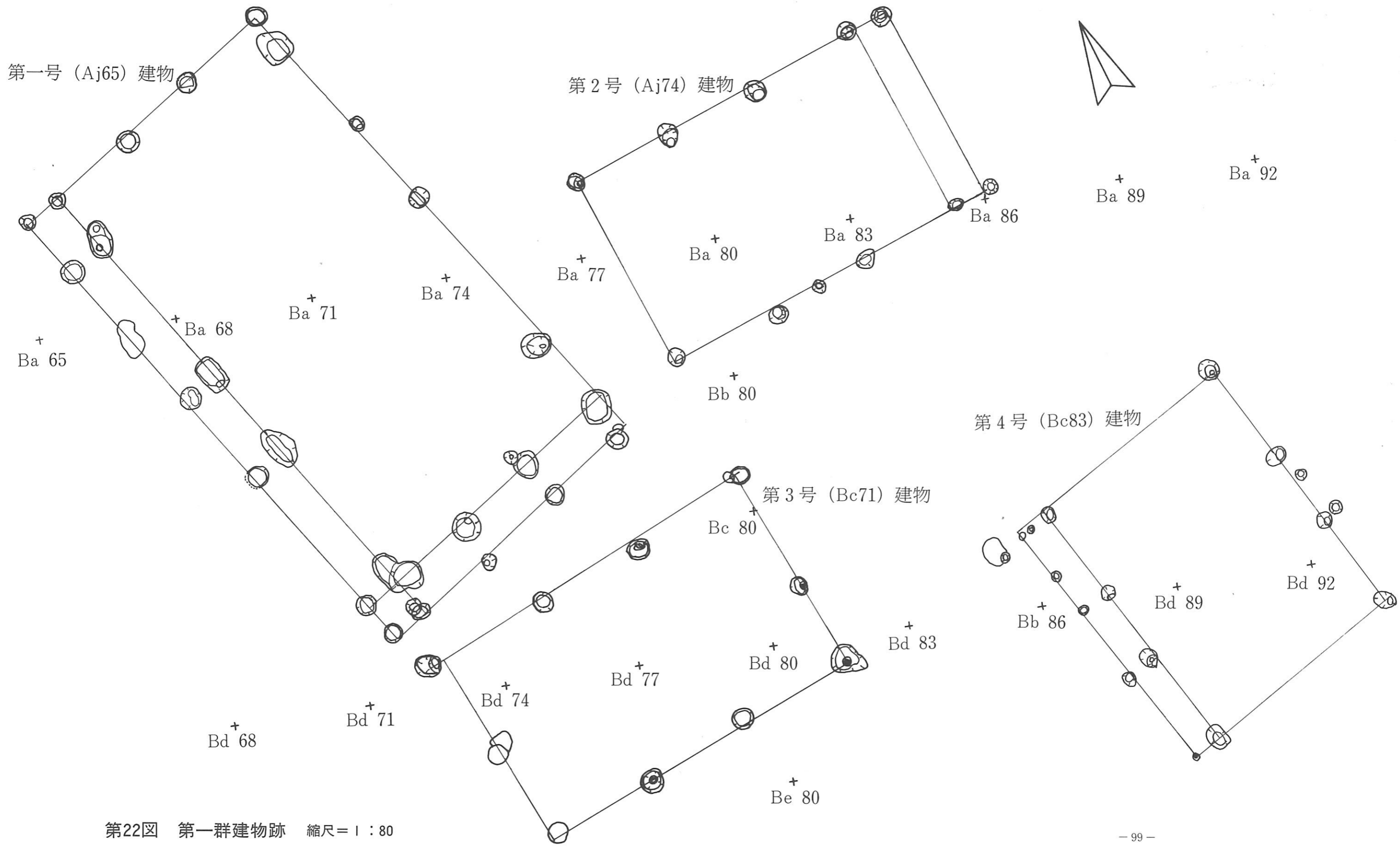
建物東方外側にも柱穴群が認められるが、独立した建物とする事は出来なかった。

ハ. 第3号 (Bc71) 建物（第24図、写真19図、第9表）

梁列方位は北より43°西へ偏っている。広さは4.4×8.0m²（梁行2間×桁行3間）であるが幾分北西隅の柱穴が突出した形の配列である。廂は認められない。柱穴の平均的状況は、掘方の直径約50cm、深さ約55cm、柱あたり直径約18cmである。北側の桁列において、A₂・A₃は南側に偏しているが、平行である。西側の梁列においてA₁は前述のごとく突出しているが、周囲

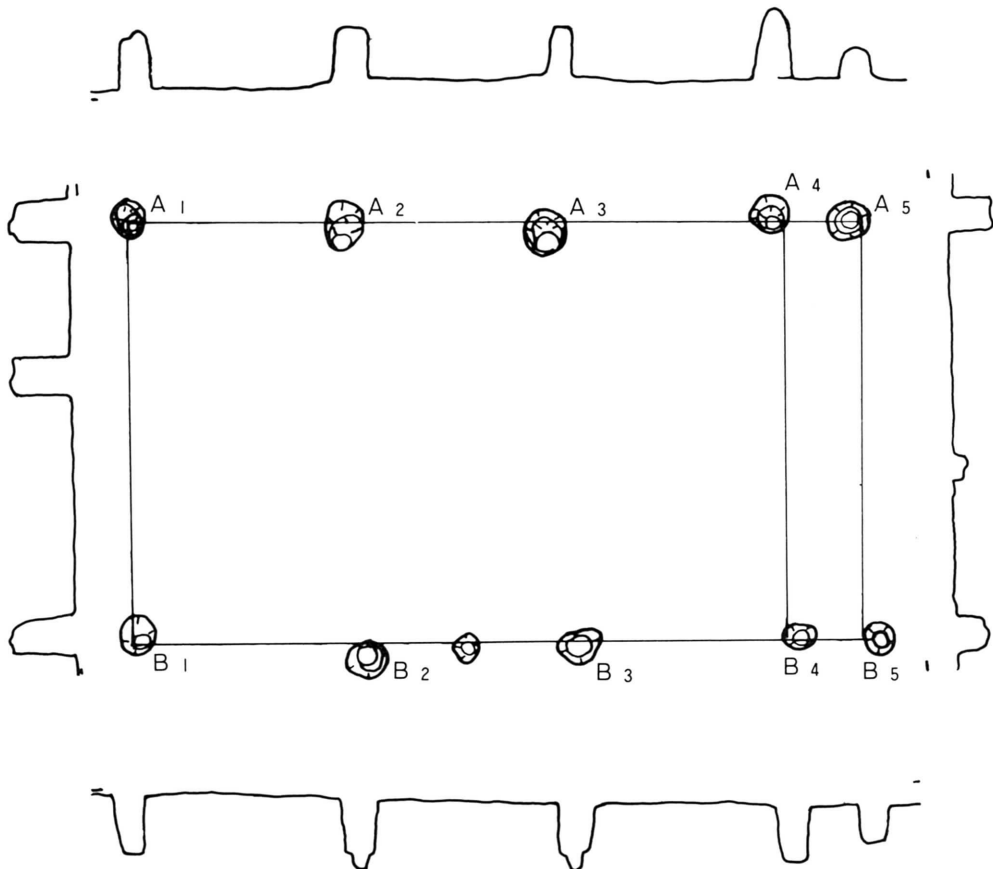


第21図 第1号(Aj65)建物跡 縮尺：1/80



第 5 表	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	A ₅	A ₆	A ₇	B ₁	B ₂	C ₁	C ₂	C ₃	D ₁
上端径 cm	40	67	41	46	51	71	39	58	40	41	52	58	32
下端径 cm	35	44	19	40	38	60	13	44	35	40	38	42	26
深さ cm	28	45	88	65	58	51	39	43	28	35	51	56	36
標高(下端m)	133.42	133.27	132.84	133.20	133.24	133.29	133.40	133.45	133.55	133.53	133.44	133.37	133.54
	D ₂	D ₃	D ₄	D ₅	D ₆	D ₇	E ₁	E ₂	E ₃	E ₄	E ₅	E ₆	E ₇
上端径 cm	71	79	95	50	48	36	53	79	47	51	43	41	42
下端径 cm	61	21	62	43	26	25	31	50	25	42	37	36	39
深さ cm	86	67	61	51	72	34	36	24	48	31	37	15	22
標高(下端m)	133.04	133.24	133.30	133.43	133.23	133.53	133.55	133.66	133.32	133.60	133.59	133.79	133.71

第 6 表	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	A ₅	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄	B ₅			
上端径 cm	33	38	27	41	35	34	39	42	35	32			
下端径 cm	15	32	20	22	22	21	14	15	26	25			
深さ cm	60	56	50	74	30	62	74	72	59	41			
標高 m	133.10	133.02	133.00	132.78	133.16	133.12	132.94	132.88	132.96	133.15			



第23図 第2号(Aj74)建物 縮尺：1/80

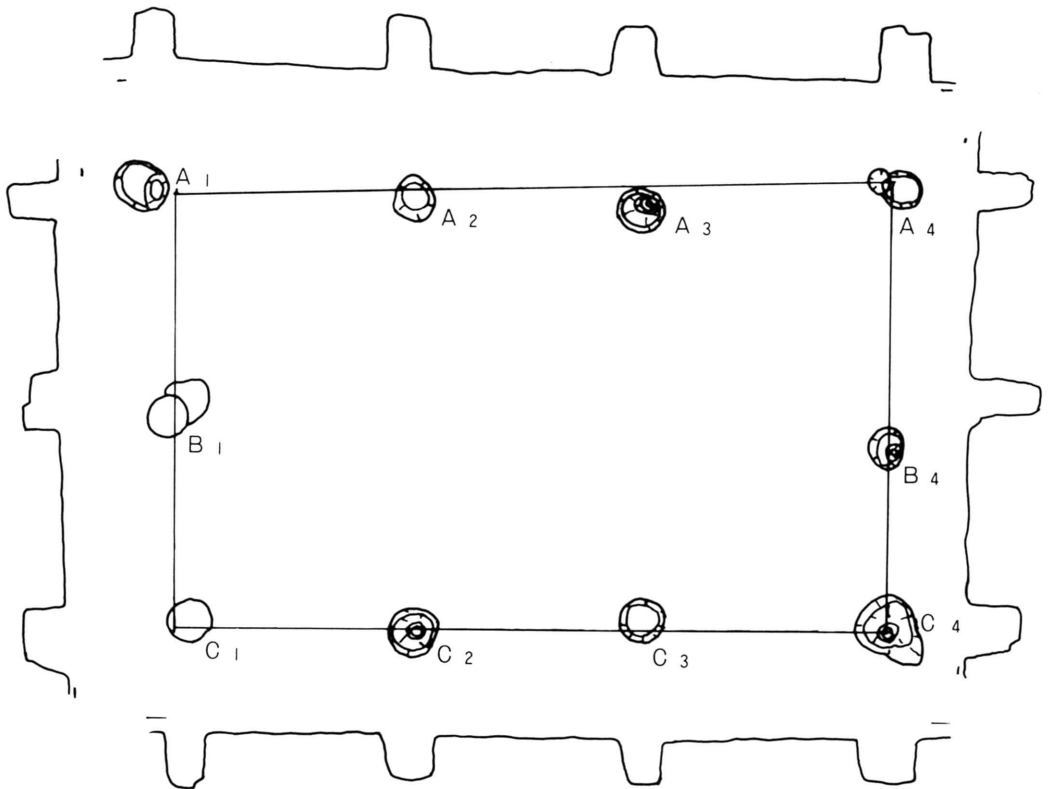
にはこれ以外に適当なものが認められない。梁の中間にあたる桁列のB₁とB₄が対称の位置にないが、(Bc80)第1柱穴がB₁と対応の位置関係にあるのでこの点再考の余地を残す。(断面にはこの(Bc80)第1柱穴を示してある。但し柱穴列はこの場合C₁~C₄の桁列に対し鈍角の配列となりA₁~A₄間がC₁~C₄間より長くなる。

この建物内には、方形配列を取る数個の柱穴や切合関係を有する柱穴が見られ、増改築の存在が考えられるが、現在は不明である。

二. 第4号(Bc83)建物 (第25図、写真19図、第8表)

梁列方位は北より77°東へ偏っている。広さは5.5×6.3m²(梁行1間×桁行3間)であるが、幾分北東隅と南東隅が突出した配列をしている。西側には長さ0.7mの廂様構造が認められる。

第7表	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	B ₁	B ₂	C ₁	C ₂	C ₃	C ₄			
上端径 cm	55	53	48	45	51	64	43	58	49	64			
下端径 cm	28	36	39	39	30	30	31	43	36	54			
深さ cm	57	58	55	51	71	37	56	47	46	43			
標高(下端m)	133.34	133.38	133.29	133.24	133.19	133.34	133.30	133.37	133.31	133.30			

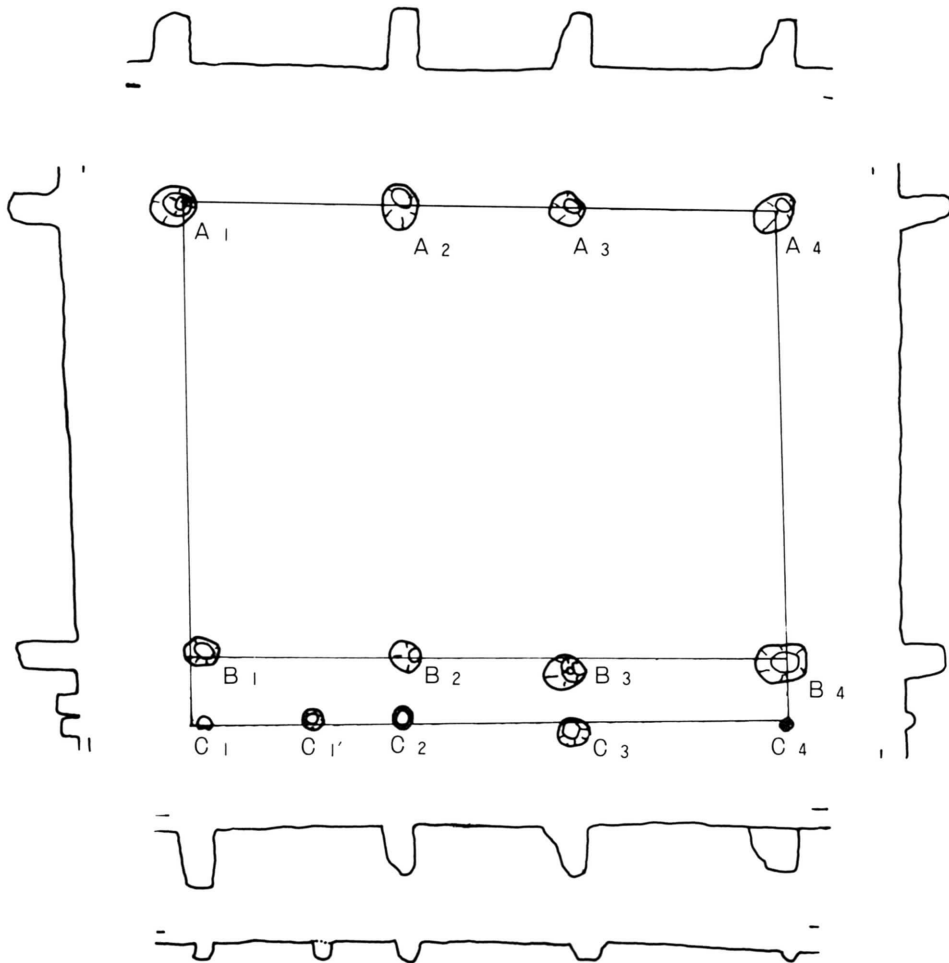


第24図 第3号(Bc71)建物 縮尺：1/80

この西側の配列は直線性を持たない。特に廂のC₃は外側にはみだし、かつ他より大きい。柱穴の平均的状況は、掘方直径40cm、深さ65cm内外である。柱間隔は桁行においてA₁~A₂とA₃~A₄は2.2mとほぼ等しく、A₂~A₃は約40cm程それらより短い。A₁~A₄とB₁~B₄は並列関係にある。梁行は4.8mと長く、間柱の存在した可能性も考えられる。

この建物は、第一建物群の南端に位置し、後述する溝は南側を東西方向に延び画している。

第 7 表	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄	C ₁	C ₂	C ₃	C ₄	C ₅
上端径 cm	40	33	49	54	42	34	42	40	18	20	23	33	14
下端径 cm	27	15	20	35	31	28	24	20	16	13	15	25	8
深さ cm	61	52	54	46	51	64	57	50	19	19	20	18	9
標高 m	133.05	133.15	133.08	133.10	133.05	132.95	132.96	132.99	133.50	133.50	133.47	133.46	133.45



第25図 第4号(Bc83)建物 縮尺：1/80

第二群掘立柱建物跡（範囲中の柱穴総数300個）（第27図、写真19図）

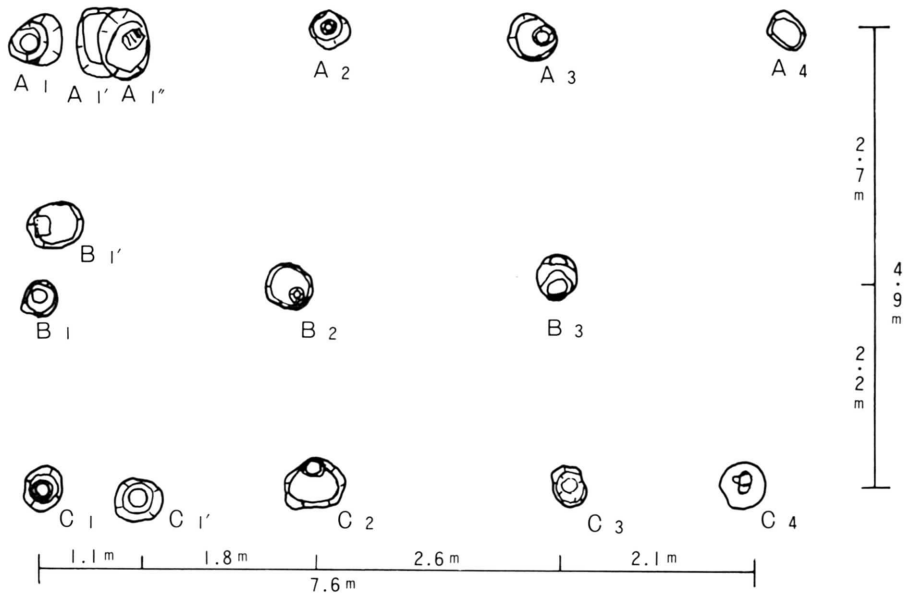
本調査地の東半部中央にあり、南北・西側の三方を溝に囲まれた部分の北寄りに位置する。
現在考えられる建物は、直ご屋が2棟、曲り屋が3棟である。

イ. 第1号 (Da89) 建物「直ご屋」（第26図、第8表）

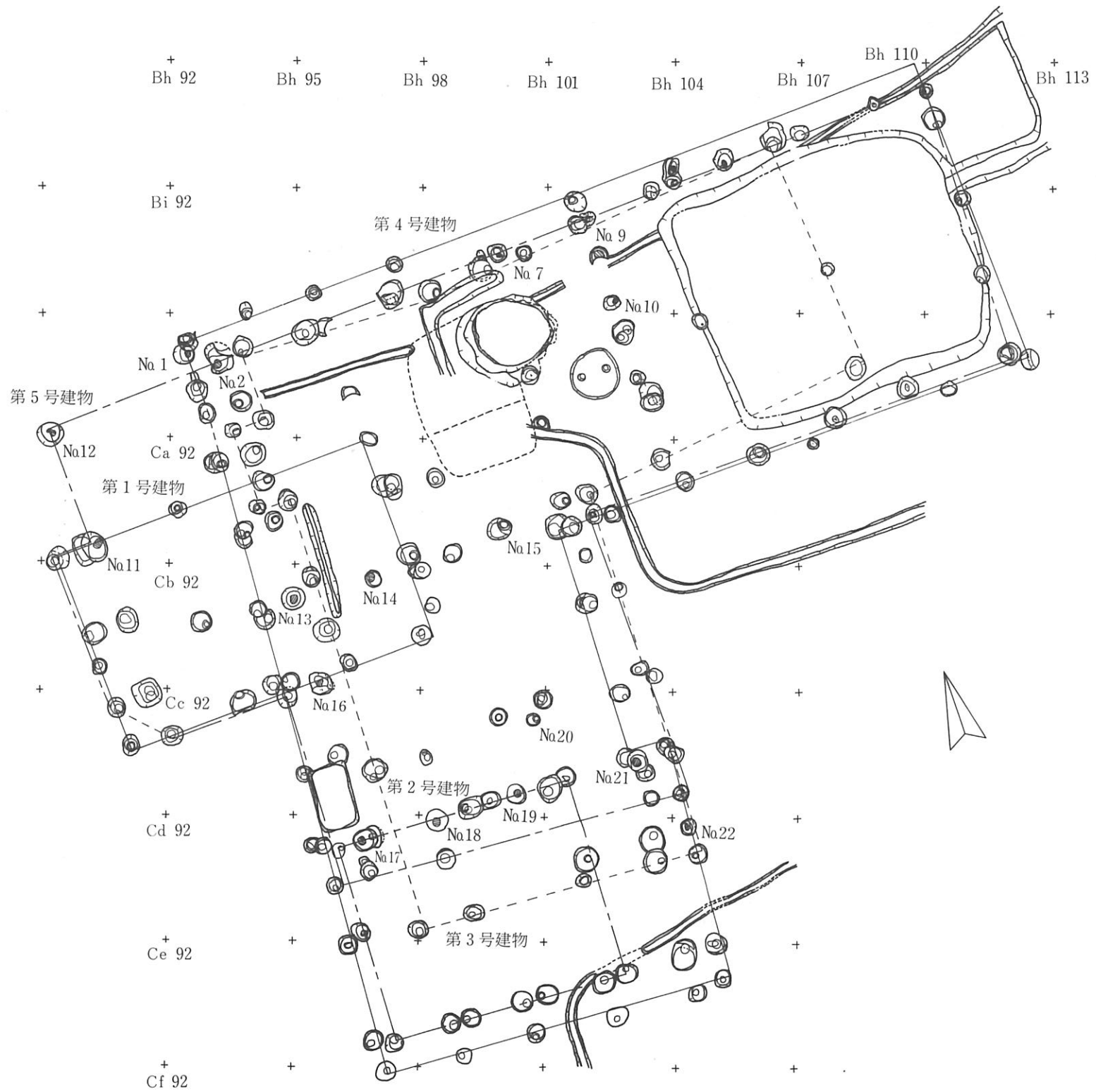
梁列方位はほぼ北方向を向いている。 広さは4.9×7.6m²（梁行2間、桁行3間）である。
西側に1.1m長の廂様の構造も考えられるが、C₁'は他と重複して属するものである。柱穴の平均的状況は、掘方直径約42cm、深さ約27cmである。柱穴の配列は、梁列A₁-B₁-C₁・A₂-B₂-C₂の2列がそれぞれ直線上にあり、南側の桁C列に対して直角であるが、他は鋭角又は鈍角をなす。 柱穴のB₁・B₁'は標高が他より高い。

梁列A₅-C₅が存在した可能性も考えられるが、この部分は皿状掘込み部にあたり不明である。 他の建物である曲り屋の西側に重複して存在する。

第8表	A ₁	A ₁ '	A ₁ ''	A ₂	A ₂ '	A ₂ ''	B ₁	B ₁ '	B ₂	B ₂ '	C ₁	C ₁ '	C ₂	C ₃	C ₄				
上端径	55	23	48	41	51	30	32	50	47	43	37	42	54	35	49				
下端径	20	22	35	31	16	25	29	25	11	28	20	30	40	32	31				
深さ	20	32	45	25	38	20	8	18	26	51	46	26	8	15	20				
標高	133.25	133.08	132.98	133.09	132.95	133.10	133.41	133.31	133.15	132.83	133.01	133.21	133.23	133.19	133.08				



第26図 第二群 第1号(Ca89)建物 縮尺=1:80



第27図 第二建物群 柱穴及び柱痕(No. 1 ~No.22) 縮尺= 1 : 160

ロ. 第2号 (Cd95) 建物「直ご屋」 (第28図、第9表)

梁列方位は北より3°西に偏っている。 広さは4.8×6.0m² (梁行2間、桁行3間)である。 柱穴の平均的状況は、掘方直径約48cm、深さ約33cmである。 北側の桁行よりA₂に相当する柱穴を欠き、B列ではB₂・B₃部分の柱穴が不明である。 A₄は同群第5号建物のC₈として重複して属している。 全体的には整った柱穴配列をしている。

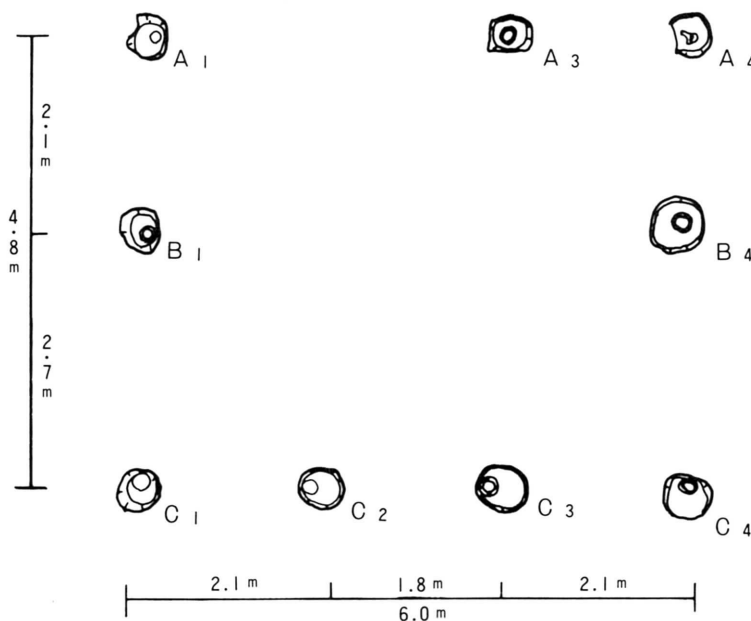
ハ. 第3号 (Bj92) 建物「曲り屋」 (第29図、第10表)

本屋の梁列は北より89°東に偏っている。 既の梁列は北より5°西に偏っており、本屋と直角関係になく、北東方向へ開いている。

本屋の広さは6.9×14.4m²、既の広さは5.7×6.9m²である。 柱穴の平均的状況は、掘方直径約43cm、深さは34cm、柱あたりは18~20cm位のものが多い。

本屋東半部には厩様構造を有する。 南側A₇-E₇の梁列はA₆-E₆列と4.2mも離れているが、桁列及び梁列の柱穴配置が整っているため此様な曲り屋としての構造を考えた。(A₁-H₁列~A₅

第9表	A ₁	A ₂	A ₃	B ₁	B ₂	C ₁	C ₂	C ₃	C ₄										
上端径	43	40	47	-	58	42	48	56	47										
下端径	31	15	46	-	52	24	41	48	17										
深さ	34	36	29	-	31	30	33	32	42										
標高	133.03	132.88	132.93	-	132.90	123.02	132.96	132.89	132.78										



第28図 第二群 第2号(Cd95)建物 縮尺=1:80

-D₅列の廂様構造をもつ直ご家の可能性も考慮する必要はある。)

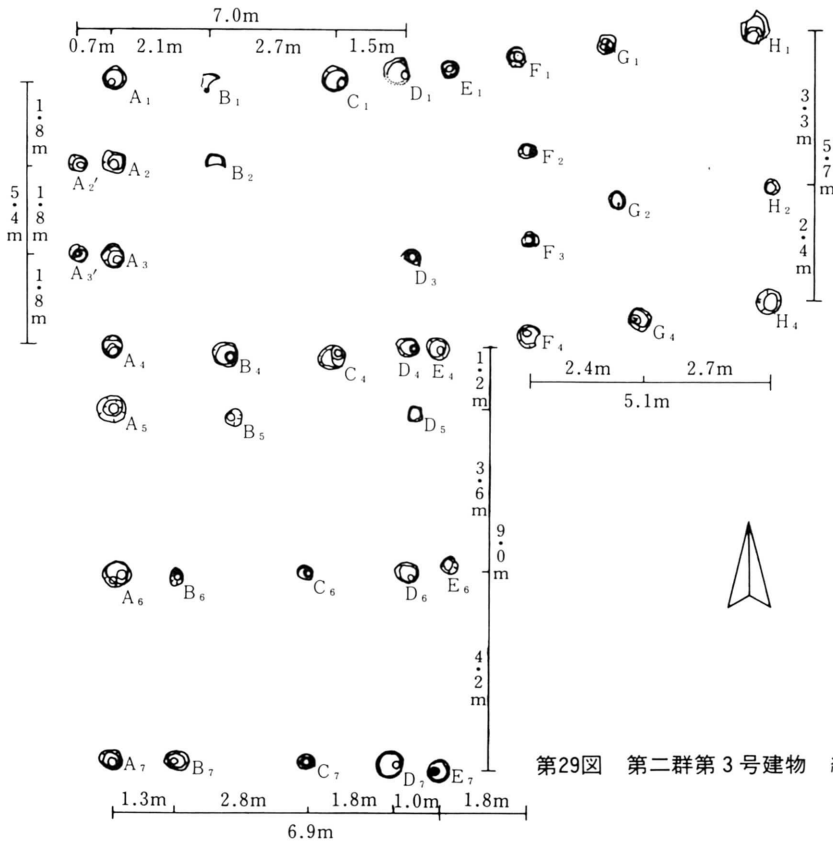
間取り・排水溝・井戸等詳細については現時点において不明である。

二. 第4号 (Bj92) 建物「曲り屋」 (第30図、第11表)

本屋の梁列は北より90°東へ偏っている。厩は同群第3号と同様本屋と直角でなく、北東方向へ開いているが、方位上はほぼ直角に近い。

本屋の広さは8.4×19m²、厩の広さは7.5×11.4m²であり、曲り屋3棟中最大である。 柱穴

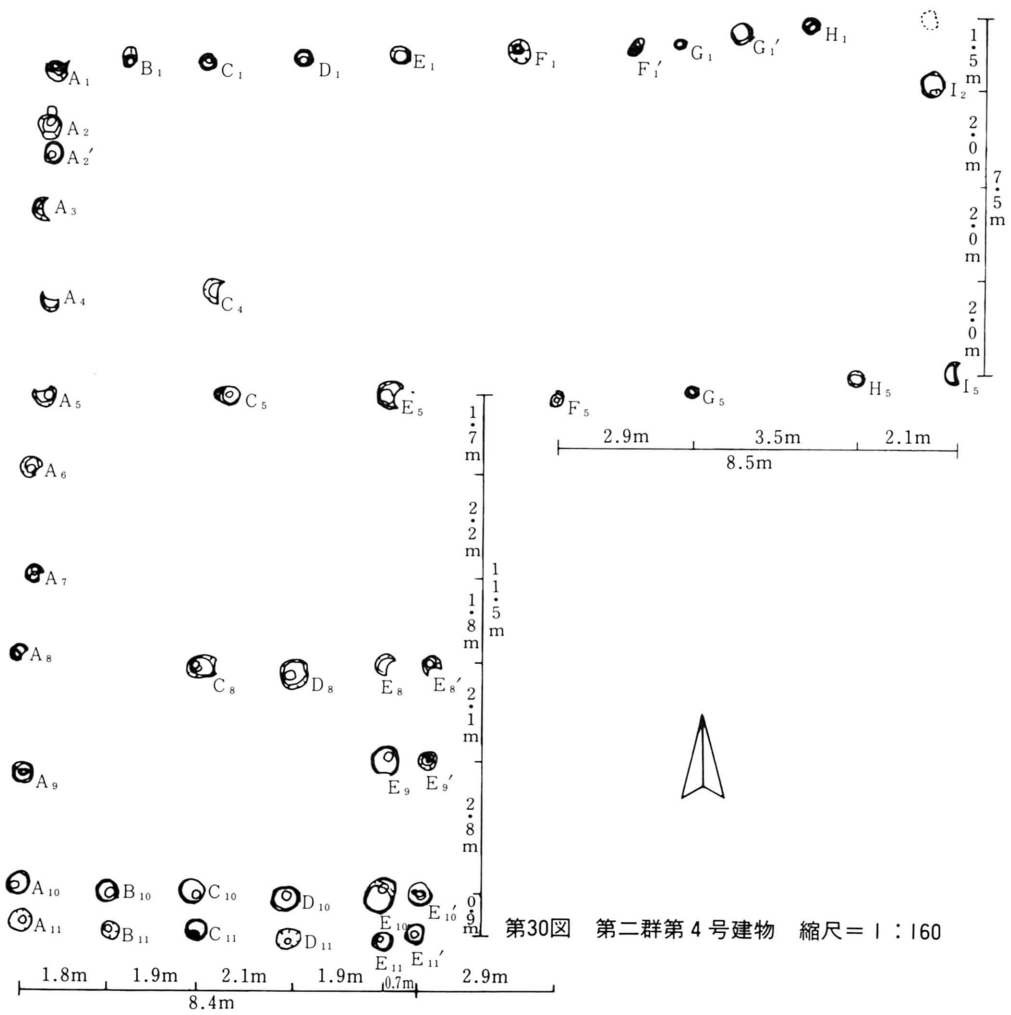
第10表	A ₁	A ₂	A ₂ '	A ₃	A ₃ '	A ₄	A ₅	A ₆	A ₇	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄	B ₅	C ₁	C ₂	C ₃	C ₄	C ₅	C ₆	C ₇	D ₁
上端径	40	40	38	22	37	43	55	56	49	14	12	50	35	-	54	56	60	33	29	66		
下端径	34	33	16	13	18	28	30	49	36	16	13	18	17	-	31	21	19	17	19	45		
深さ	53	38	33	41	46	51	40	45	35	12	36	25	10	-	24	46	39	28	25	62		
標高	132.81	132.96	133.03	132.97	132.88	132.83	132.90	132.90	132.95	133.12	132.96	133.04	133.15	-	133.02	132.82	132.90	132.88	132.95	132.68		
	D ₁	D ₁	D ₅	D ₄	D ₇	E ₁	E ₁	E ₆	E ₇	F ₁	F ₂	F ₃	F ₄	G ₁	G ₂	G ₄	H ₁	H ₂	H ₃			
上端径	51	47	-	48	57	35	46	36	50	41	38	38	44	40	36	40	55	34	54			
下端径	16	14	-	39	40	16	17	23	15	29	26	17	20	30	31	30	25	36	33			
深さ	28	35	-	34	20	22	22		22	58			31	32	34	8	41	73	23	26		
標高	132.88	132.84	-	132.80	132.95	133.06	132.97		132.95	132.67		132.84	132.80	132.70		132.34	132.27					



第29図 第二群第3号建物 縮尺=1:160

の平均的状況は、掘方直径約43cm、深さ約31cm、柱あたりは約18cmであるが、北側特に厩部は細い物が多い。 厩は現代の馬小屋の掘込み部を取りこんでいる。

第11表	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	A ₅	A ₆	A ₇	A ₈	A ₉	A ₁₀	A ₁₁	B ₁	B ₁₀	B ₁₁					
上端径	37	50	40	35	26	30	38	40	37	49	48	45	33	51	41				
下端径	17	29	22	19	25	40	22	17	28	36	45	24	25	47	26				
深さ	34	49	23	35	32	44	40	30	23	34	14	20	26	21	18				
標高	133.03	132.90	133.16	133.02	133.01	132.94	133.94	133.00	133.15	132.87	133.24	133.19	133.08	133.07	133.13				
	C ₁	C ₂	C ₃	C ₄	C ₁₀	C ₁₁	D ₁	D ₂	D ₁₀	D ₁₁	E ₁	E ₃	E ₄	E ₁₁	E ₁₂				
上端径	33	30	56	42	48	44	37	53	53	59	39	42	26	39	53				
下端径	28	22	40	22	45	17	31	53	50	48	28	43	25	22	45				
深さ	14	34	46	45	26	18	22	28	25	17	36	46	41	35	27				
標高	133.21	132.89	132.85	132.80	132.96	133.04	133.06	132.95	132.95	133.04	132.93	132.77	132.75	132.79	132.87				
	E ₇	E ₁₀	E _{10'}	E ₁₁	E ₁₁	F ₁	F _{1'}	F ₃	G ₁	G _{1'}	G ₃	H ₁	H ₃	I ₁	I ₃				
上端径	43	72	49	42	42	48	46	28	65	42		36	36	52	43				
下端径	23	54	36	22	22	23	31	15	33	31		25	31	46	16				
深さ	40	52	34	21	21	38	44	24	22	35		54	14	50	38				
標高	132.74	132.68	132.87	132.98	132.98	132.89	132.67	132.92	132.87	132.63		132.44		132.44	132.66				



第30図 第二群第4号建物 縮尺=1:160

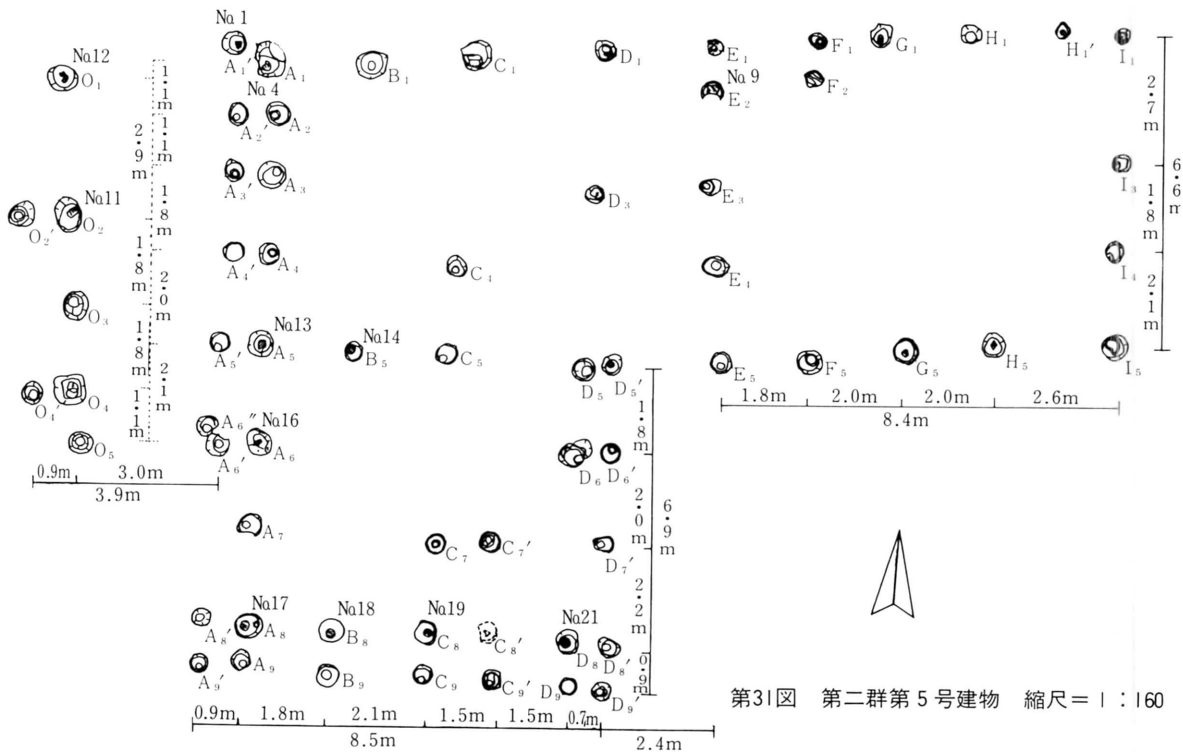
本屋東側の南寄り半分には廂様構造が考えられる。E₅-E₈は5.7mと離れ過ぎて居り、間柱の存在の可能性を考慮しなければならない。この点においては同群第3号建物と同様で、南半部と分離した直ご屋の存在とその後の増改築過程の存在をも考慮しなければならない。曲り屋として存在する場合には、同群第3・5号建物の柱穴を重複して使用する事が配列上整った形となる。

ホ. 第5号 (Bj92^o) 建物「曲り屋」 (第31図、第12表)

本屋は梁列は北より89°東へ偏っている。厩は同群第4号建物と同傾向を示す。

本屋の広さは8.5×13.5mと西側の3.9×7.7mの突出部を加えたものである。厩の広さは6.6×10.8mと同群第4号建物より少し小さくなっているが、現代の馬小屋の掘込み部は取り込まれている。西側の部分を除けば同群第4建物より縮小されたものになっている。柱穴の平均的状況は、掘方直径約44cm、深さ約33cmである。これらの柱穴中に柱痕が多く残存している。(第33図・写真22・23図・第14表) 材質はクリが大部分で1部にナラが使用されている。多角形の面取り痕、木口の鋸引き・削り調整、樹皮等が認められる。

柱穴配列は整っている。屋内には井戸・排水溝も備えていたと思われる。

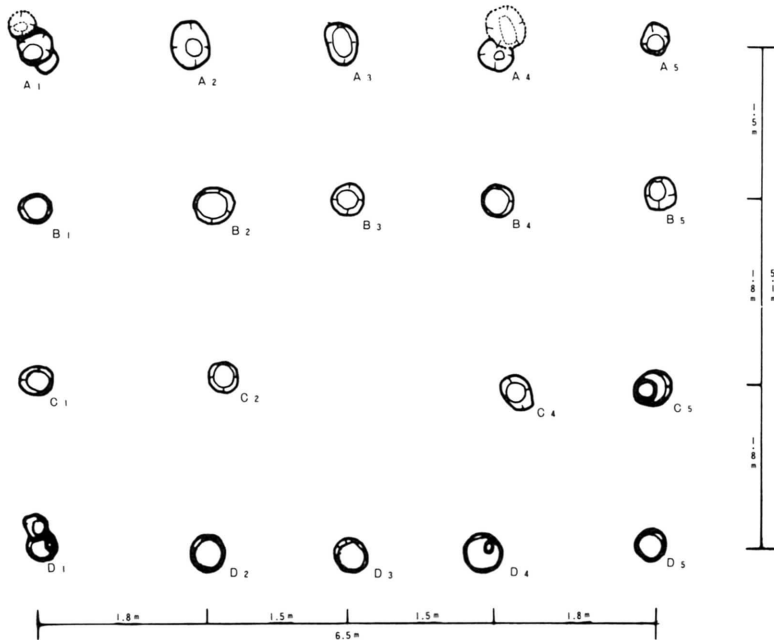


第31図 第二群第5号建物 縮尺 = 1 : 160

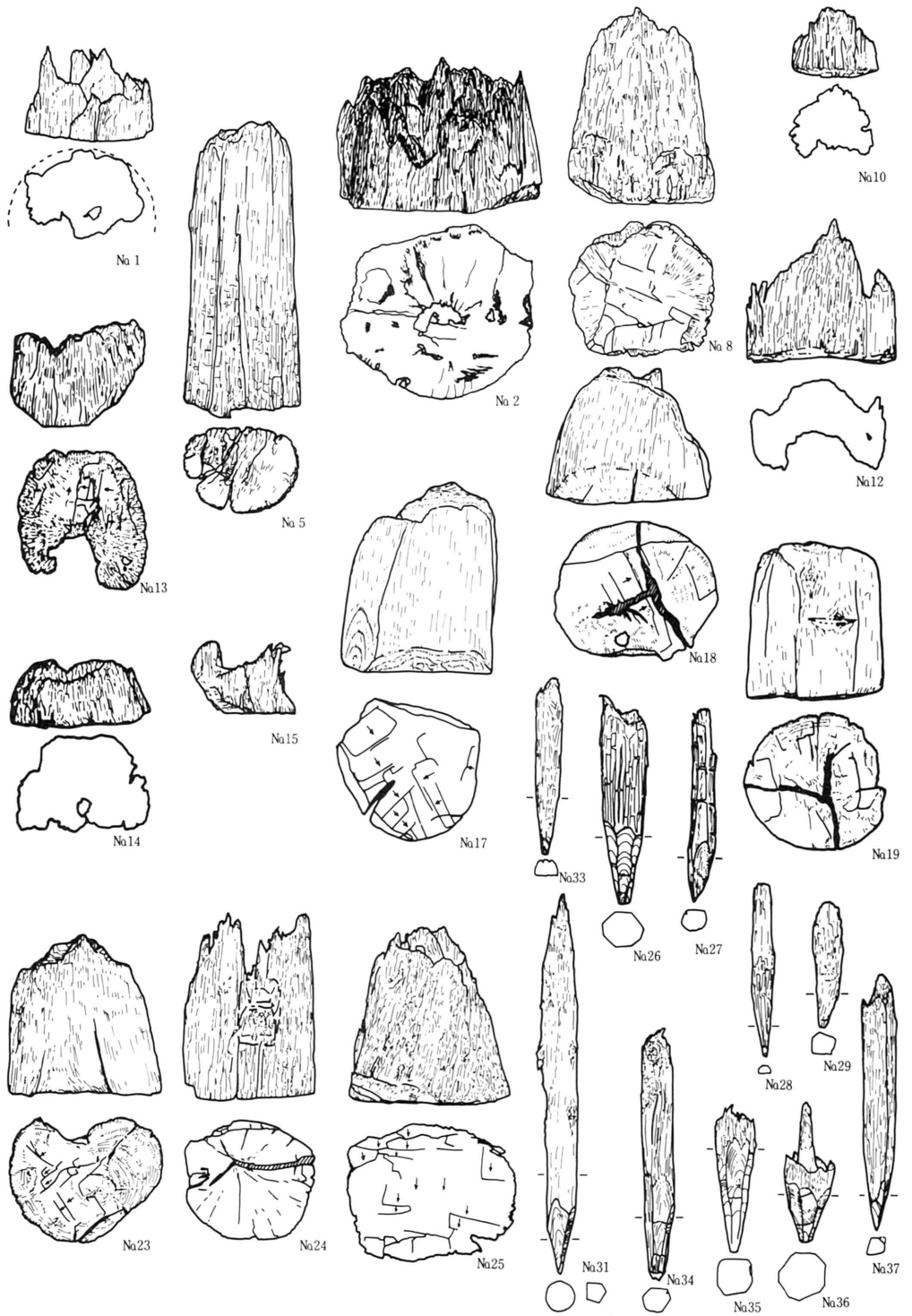
第12表	O ₁	O ₂	O ₃	O ₄	O ₅	O ₆	O ₇	O ₈	A ₁	A _{1'}	A ₂	A _{2'}	A ₃	A _{3'}	A ₄	A _{4'}	A ₅			
上端径	60	48	55	50	64	37	42	83	43	52	40	53	22	48	26	15				
下端径	34	35	20	40	39	22	30	76	10	25	22	42	12	20	25	22				
深さ	36	45	20	38	42	22	26	38	39	40	23	47	41	47	32	53				
標高	132.99	132.98	133.25	133.03	133.00	133.25	133.21	132.97	132.97	132.94	133.16	132.88	132.98	132.84	133.01	132.80				
	A ₅	A ₆	A _{6'}	A _{6''}	A ₇	A _{7'}	A _{7''}	A ₈	A _{8'}	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄	C ₁	C ₂	C ₃				
上端径	30	33	44	38	47	58	38	41	39	50	40	49	47	67	41	41				
下端径	40	40	37	22	41	52	25	33	25	13	34	54	34	54	31	34				
深さ	44	45	43	40	14	55	13	28	37	33	43	31	14	24	35	18				
標高	132.94	132.88	132.90	132.94	133.18	132.78	133.24	133.07	133.02	132.95	132.85	132.95	133.11	133.06	132.94	133.10				
	C ₄	C ₅	C ₆	C _{6'}	C _{6''}	D ₁	D _{1'}	D _{1''}	D ₂	D _{2'}	D _{2''}	D ₃	D _{3'}	D _{3''}	D ₄	D _{4'}				
上端径	45	49	70	41	42	42	44	41	43	52	42	39	48	41	33	36				
下端径	43	45	50	39	35	33	26	30	22	44	14	27	40	9	32	34				
深さ	32	26	32	15	31	45	-	40	35	30	27	25	31	19	6	14				
標高	132.82	132.91	132.83	133.10	132.90	132.84	-	132.80	132.81	132.85	132.89	132.87	132.82	132.93	133.09	132.96				
	E ₁	E ₂	E ₃	E ₄	E ₅	F ₁	F ₂	F ₃	G ₁	G ₂	H ₁	H _{1'}	H ₂	I ₁	I ₂	I ₃				
上端径	33	22	47	44	44	34	45	44	49	50	48	-	48	28	37	42	52			
下端径	29	26	25	20	20	36	23	15	34	25	21	-	31	20	35	33	36			
深さ	29	34	25	22	32	40	57	50	38	30	36	-	46	15	25	26	49			
標高	132.97	132.80	132.91	132.99	32.80	132.73	132.53	132.57	132.12	132.63	132.57	-	132.54	132.75			132.49			

以上、第二群建物5棟について記したが、直ご家がより古く、曲り屋は第3・4・5号の順で新しくなると考えられる。

第13表	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	A ₅	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄	B ₅	C ₁	C ₂	C ₃	C ₄	C ₅	D ₁	D ₂	D ₃	D ₄	D ₅
上端径 cm	36	45	38	34	32	32	41	34	34	34	33	32	35	39	32	38	36	40	33	
下端径 cm	20	18	46	10	17	26	30	22	27	20	22	22	20	23	25	30	28	35	24	
深さ cm	62	54	45	34	47	45	48	47	42	30	46	48	37	20	20	43	33	39	22	
標高 m	133.09	133.12	133.12	133.20	133.00	133.18	133.12	133.09	133.09	133.17	133.15	133.10	133.10	133.10	133.24	133.37	133.10	133.13	133.07	133.18



第32図 第三群 第1号(Da77)建物 縮尺 = 1 : 80



第33圖 第二群掘立柱建物跡關連柱痕・杭

第14表	1	2	5	8	10	12	13	14	15	17	18	19	23	24	25	26	27	28	29	31	33	34	35	36	37
種類	柱痕	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	杭	"	"	"	"	"	"	"	"	"
材質	ナラ	クリ	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	ナラ	クリ	ナラ	クリ	スギ	ナラ	スギ	ナラ	"	クリ
出土位置	Bj92	Bj92	Bi95	Bi101	Bi101	Bj89	Cb92	Cb95	Ca98	Cd95	Cd98	Cc98	Cd101	Bi110	Bh101	Bi104	Bi104	Bj104	Bj104	Bj104	Bj107	Bj110	Bh107	Bh104	Bh104
幅 cm	15.75	25.86	15.45	19.50	9.75	18.30	17.10	17.70	12.60	19.35	22.05	19.20	20.40	17.40	22.65	5.67	3.30	1.80	3.30	4.05	3.60	3.87	4.80	6.30	2.40
長さ cm	12.45	20.70	38.85	26.40	9.54	18.75	12.30	9.00	9.60	25.65	18.30	21.30	21.30	25.26	24.15	26.10	25.80	23.25	16.95	51.15	23.70	33.60	19.80	18.60	34.50
備考	第2群5号建物のA ₁	No3=クリ		No7=2-5D ₁	No11=Ca59 No9=2-5E ₂	第2群5号建物のO ₁	第2群5号建物のA ₂	第2群5号建物のB ₄	No16=2-5A ₄ ナラ	第2群5号建物A ₅	第2群5号建物B ₅														

第三群掘立柱建物跡（範囲中の柱穴総数97個）

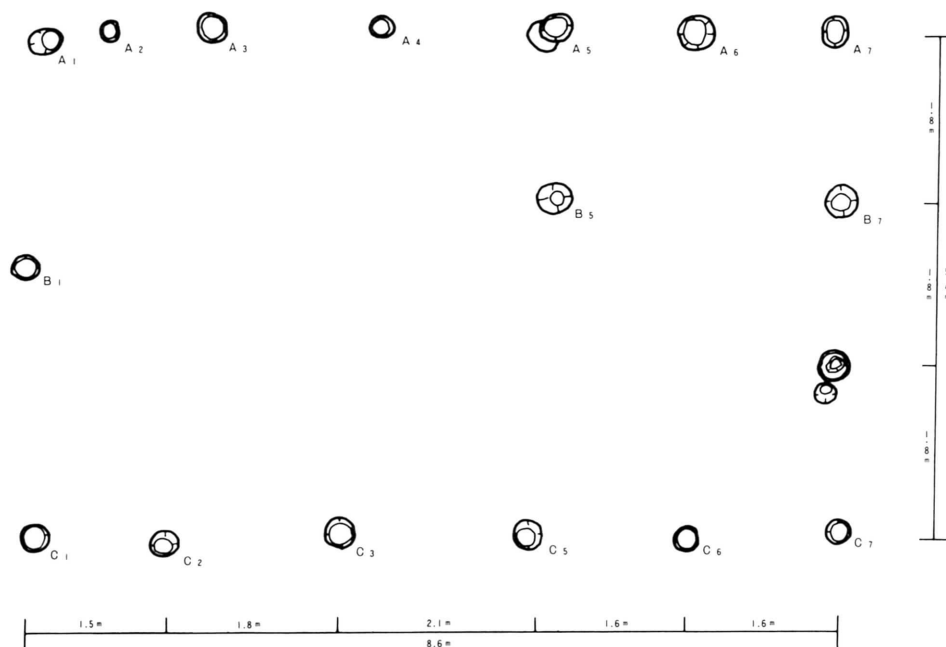
調査地の最南端に位置し、北・東西側の3方に溝が検出された狭い平場上の2棟よりなる。

イ. 第1号(Da77)建物（第32図、写真19図、第13表）

梁列方位は北より16°東へ偏っている。広さは5.1×6.6m²（梁行2間、桁行4間）で北側に長さ1.5mの廂様構造が認められる。柱穴の平均的状況は、掘方直径約35cm、深さ約45cm内外、柱あたり径15cm前後である。A₁・A₄-D₁は切合い関係を有する柱穴である。

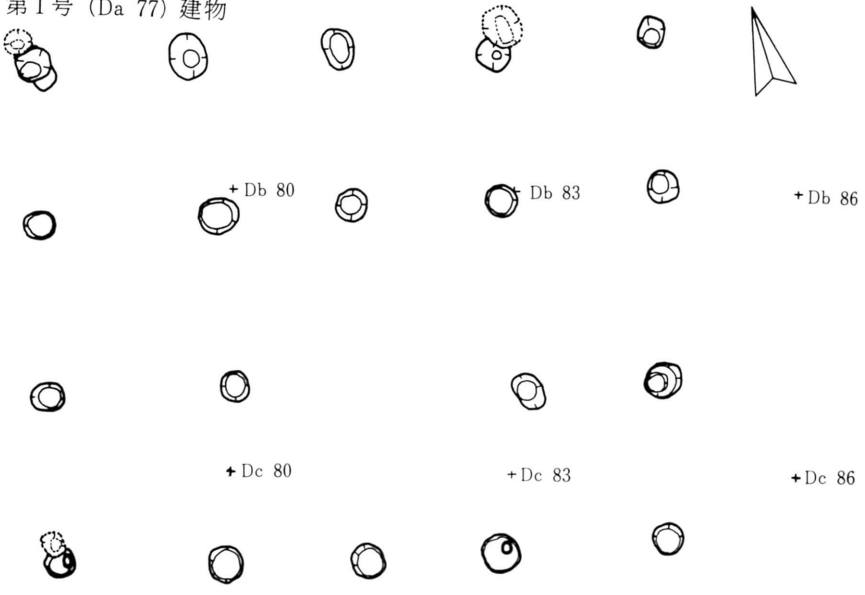
C₁~C₅に間隔のゆらぎが見られ又、C₃を欠いているが、比較的整った柱穴配列である。

第15表	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	A ₅	A ₆	A ₇	B ₁	B ₃	B ₇	C ₁	C ₂	C ₄	C ₅	C ₆	C ₇			
上端径 cm	31	20	31	24	32	37	31	31	34	34	29	27	31	30	26	25			
下端径 cm	20	15	24	17	23	25	22	20	15	19	23	17	24	20	20	19			
深さ cm	41	27	49	11	20	38	47	37	16	39	32	40	20	29	38	27			
標高 m	133.06	133.23	132.98	133.31	133.06	132.95	132.86	133.06	133.17	132.96	133.08	132.96	133.14	133.10	132.95	133.04			

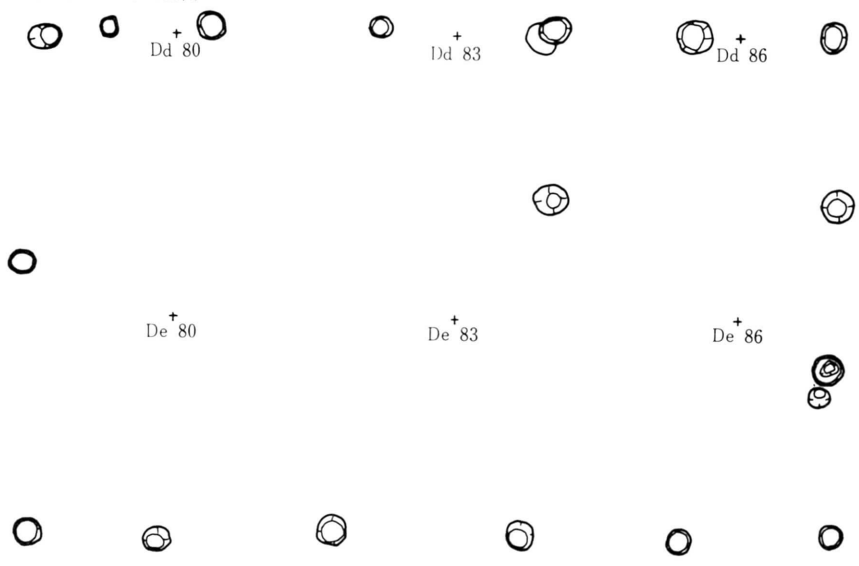


第34図 第三群 第2号(Dc77)建物 縮尺=1:80

第1号 (Da 77) 建物



第2号 (Dc 77) 建物



第35图 第三群建物跡 縮尺 = 1 : 80

ロ. 第2号(Dc77)建物 (第34図、写真19図、第15表)

梁列方向は同群第1号建物とはほぼ同じであるが、梁列は異なり、広さも5.4×8.6m²(梁行2間・「東側3間」、桁行5間)と広くなる。柱穴の平均的状況は、掘方直径約30cm、深さ約42cm前後であり、同群第1号建物のそれより幾分小さく、建物内に検出されたその他の柱穴数も少ない。それぞれの梁列は間柱が少なく南側と北側では、ずれも見られる。

同群第1号建物とは2mの距離にあり、用途上の関連性・同時期性・構造上の連続性等のかわりを考慮しなければならない。この事は同群第1号の建物のD₂・D₄それぞれの南側の柱穴及びD₃の南側(本建物北側桁列柱の中間位)柱穴の判定結果にかかわっている。

2 溝

調査地の西半部に多く、地形の東西の傾斜方向へ延びる自然の溝と、東半部に多い東西方向、南北方向に延びる人為的なものと思われる溝とがある。

自然の溝(遺構配置図参照) 主なもの4条

イ.(Bc27)溝

調査地の北西部にある。巾約75cm、深さ13cm前後、確認長は33mで未調査の西方へも延びる。東端は掘込みにより削られ不明である。旧表土II層下部が検出面である。埋積土は自然堆積の黒色腐植土のみである。出土遺物はないが、(Ba12)溝状土壌の一部を切っているので古くとも縄文時代以降のものと考えられる。

ロ.(Cg53)溝

調査地の中央部に位置する、巾約65cm、深さ10cm前後、長さは10cm前後で、両端の閉じた形状の浅く短い溝である。埋積土は暗褐色土のみの自然堆積層である。出土遺物は、胎土に繊維を混入させた痕跡の認められる縄文土器細片がある。縄文時代の(Cg53)焼土・(Cg56)住居跡と切合い関係にあり、それらより新しいが、(Cg56)溝状土壌との切合いの前後関係は明確でない。

ハ.(Da27)溝

調査地の南西部に位置する。巾1m前後、深さ約35cm、確認長は約57mで更に未調査の西部に延びていると思われる。東端は南北方向に延びる溝に切られている。IV層上部が検出面であるが、これは削平によって表土(耕作土)下がIV層になっている為である。埋積土は4層よりなり縄文土器細片を出土する。この土器片は胎土に繊維を混入させた痕跡の認められ

るものである。縄文時代の(Cg62)・(Cg65)溝状土壌・(Cg59)住居跡等と切合いの関係にあるがその新旧の判定は出来ない。

二. (Dg50) 溝

調査地の最南端に位置する。巾約48cm、深さ約8cm、長さ約25mで途中浅く切れている。埋積土は黒褐色土のみで、出土遺物もない。

人為的に作られた溝

3群の掘立柱建物跡をそれぞれ巡る多数の溝があるが、南北方向のものが複雑な形状をなす。小規模なものは各々の建物の周囲や内部に延びているものである。

イ. 第一群掘立柱建物周辺の溝

調査地中央部近く、南北に延びる4条の溝が検出された。それらの平均的状況は巾約60~100cm、深さ5~45cm、長さ約30mである。重複している部分の新旧関係については不明である。埋積状態は自然埋没を示している。南側の第二群建物跡との間に東西に延びる溝がありこれと南北溝は連続するものと思われる。

ロ. 第二群掘立柱建物周辺の溝

北部側の1条と西側の6条がこの建物群周辺の溝である。西部側の4条のうち東寄りの2条は分離して存在し、より東寄りの1条は北部側の1条とつながっている。西側の4条は並列していてその重複関係は上層部が非常に攪乱されている事もあって不明である。この4条の溝は南方に延びて、第三群建物跡の北側を巻いて更に西側を画した形をとる。

北部側の1条の溝は、東西に延び、中央付近より南北接した2条になり、更に東方で北側の1条になる。中央部北側の溝の埋没後南側の溝が設けられている。この溝の平均的状況は、巾約18cm、深さ約25cmである。埋積土は自然堆積の状況を示す。この溝は前述の通り西部で南方に転じ後述の(Cb80)水場を経て南部墓場の北側で東方に転じ南辺溝となる。この西部域での溝の平均的状況は、巾約80cm、深さ約32cmである。埋積土の上半部は人為的攪乱土で、下半は自然堆積を示す。この下半部に後述の陶磁器片を多量に伴う。

ハ. 第三群掘立柱建物周辺の溝

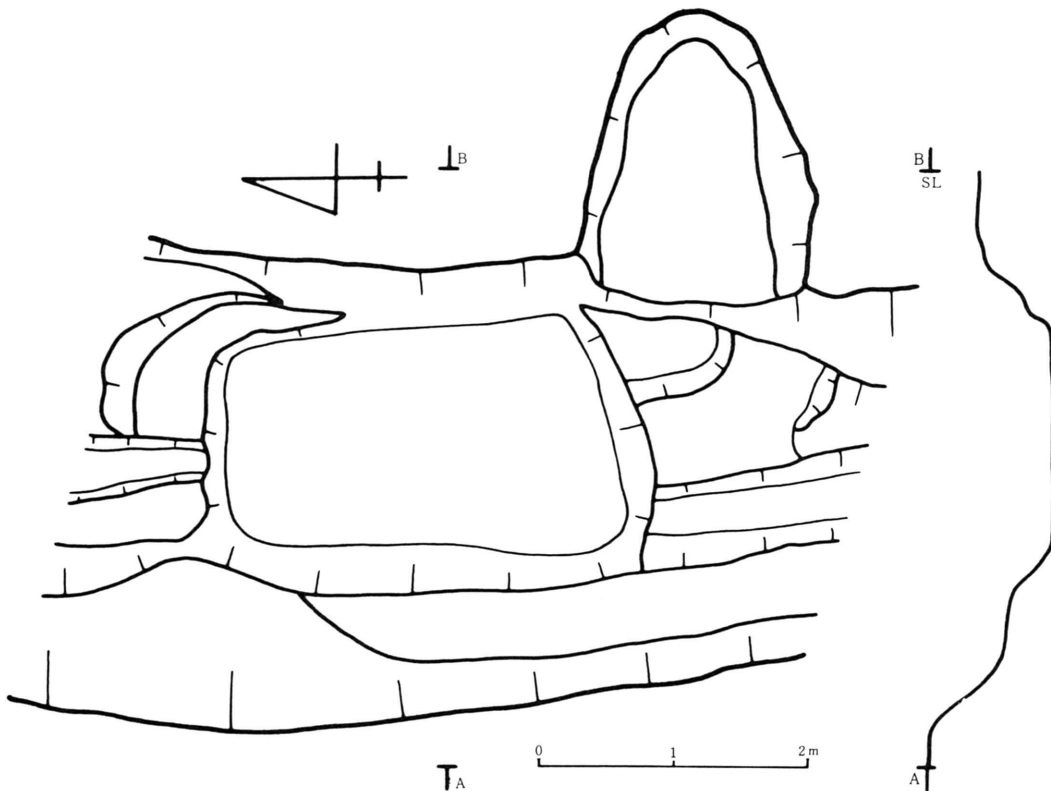
東部側の2条接続して検出された溝は、第一・二群掘立柱建物周辺溝として述べた溝の南半部である。これは東側の溝が自然埋没後に西側の溝を設け機能させているもので、平均的状況は、巾約85cm、深さ約20cmである。埋積土の上層は人為的攪乱土で下層は自然堆積である。

北半部から西部側の溝については前述の通りで、平均的状況も巾約80cm、深さ約40cmとなっている。

第一号建物の北側から西方向、弧状の溝は巾約30cm、深さ約10cmの自然埋積の状況を示し、雨落ち溝と思われる。

3. (Cb80) 水場 (第36図、写真19図)

前述の第二群掘立柱建物の西部側溝の北西隅に設けられたもので、水の溜り場は南北に長く広さ3.2 × 2.0 m²、深さ約35cmである。水辺の平場は北東隅・南東隅・西側の3ヵ所に見られる。水は湧水を用いており、調査期間中も枯れる事はなかった。この水は北側及び南側に続く溝によって排水される。埋積土は、溝のものと同様に、上層は黒褐色植土に黄褐色土団塊が多量に混在した人為的攪乱層で、下層は黒褐色土の自然堆積土である。水場の底及び接続する溝より後述の陶磁器の破片や、金属製品(寛永通宝1枚、鉄製品)、ガラスの小びん「森下謹製」等が出土している。



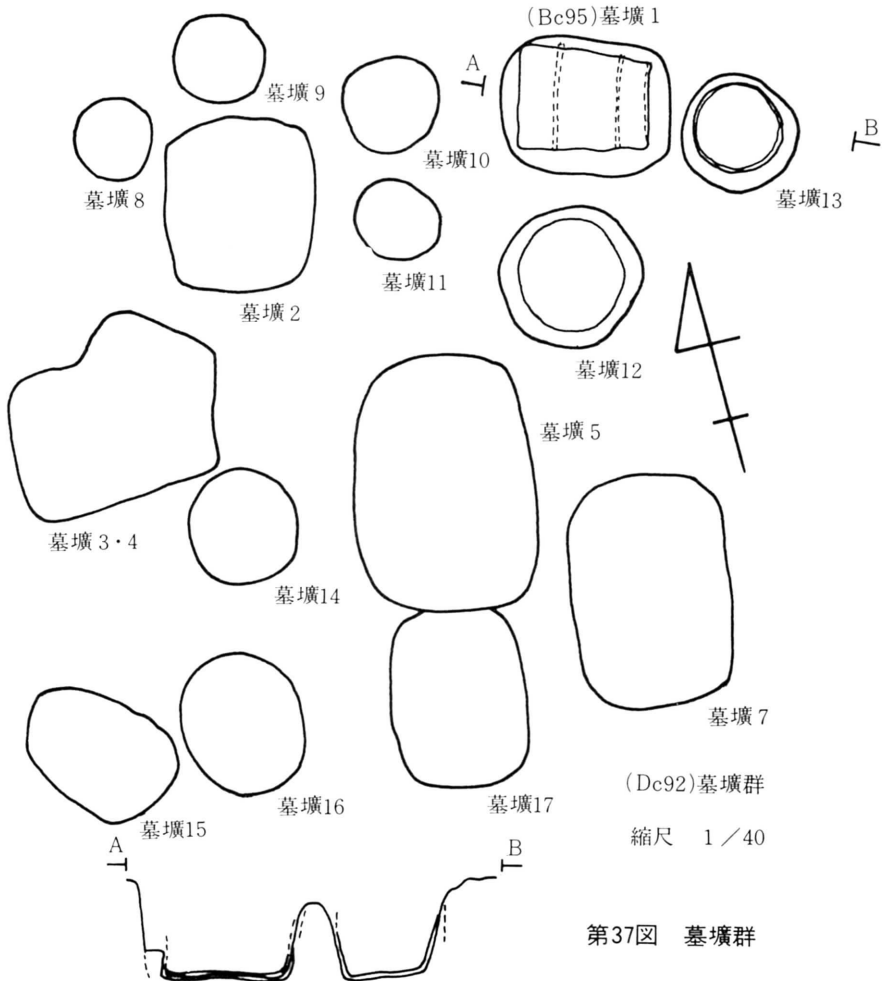
第36図 (Cb80)水場跡

3'. (Dc92) 墓壙群 (第37図、写真24図、第16、20表)

調査地南東部の前述の溝に囲まれた狭い部分に16基の墓壙がある。平面形は隅丸長方形7基、円形9基合計16基で大きさ等は第16表の通りである。

墓碑は14基であった。この自然石に刻まれた墓碑の年号は半数の7つが判読出来た。享保12年(1727年)・同18年(1733年)・天明4年(1784年)・文化6年(1809年)・文政4年(1821年)・安政元年(1854年)・同5年(1858年)等である。

墓壙より棺桶3・寛永通宝13枚・土葬骨その他が出土している。墓壙の1)は隅丸方形で、底部には横にして西方を向いた棺桶の下半部が検出された。12)・13)は円形で、底部には棺桶の底下半部が残存している。残存の具合は木質部より竹質部の方が良好である。



イ. 陶磁器

調査地東半部の第二群建物跡周辺の水場及びこれに続く溝から大半のものが出土している。
〔播鉢〕 (第20図、写真17図、第17表)

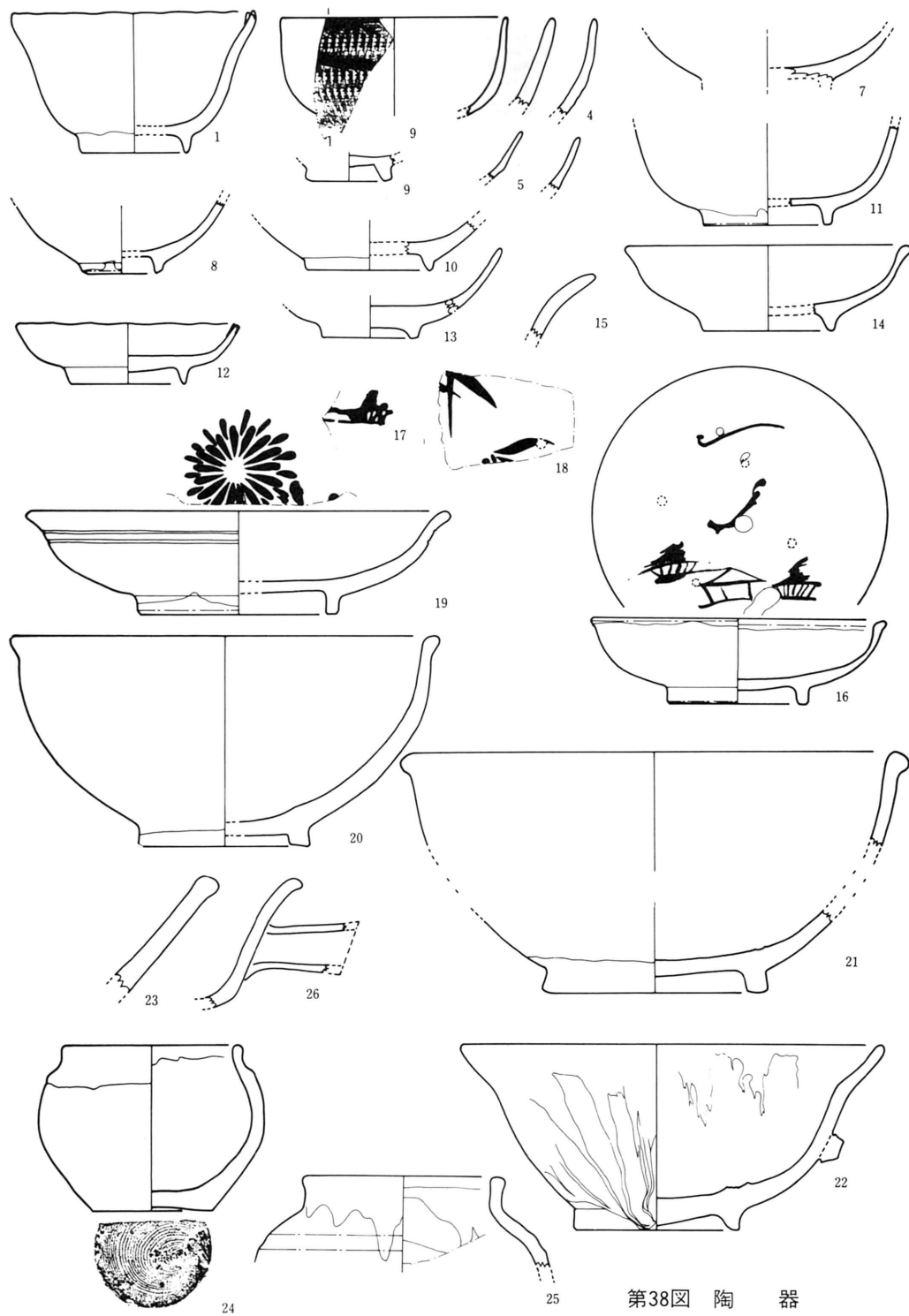
破片合計14片が出土した。推定個体数は9個体で、建物周辺の溝で検出されたものが多い。口縁片は4個体、底部片は5個体である。口縁片の2個体の内外には施釉がなされている。複合口縁部の形態は、折返し口縁様のもの・二段目の凸部が体部に下るものなどがある。「卸し目」の線状刻みは広いものが、全体の3/4と多く、その本数は破片より推定されたもので、5条から10条の間の値をとる。(5)は線状刻みが内底面の中心より放射状に付され後に内底周に円状に付されている。

〔その他の陶器〕

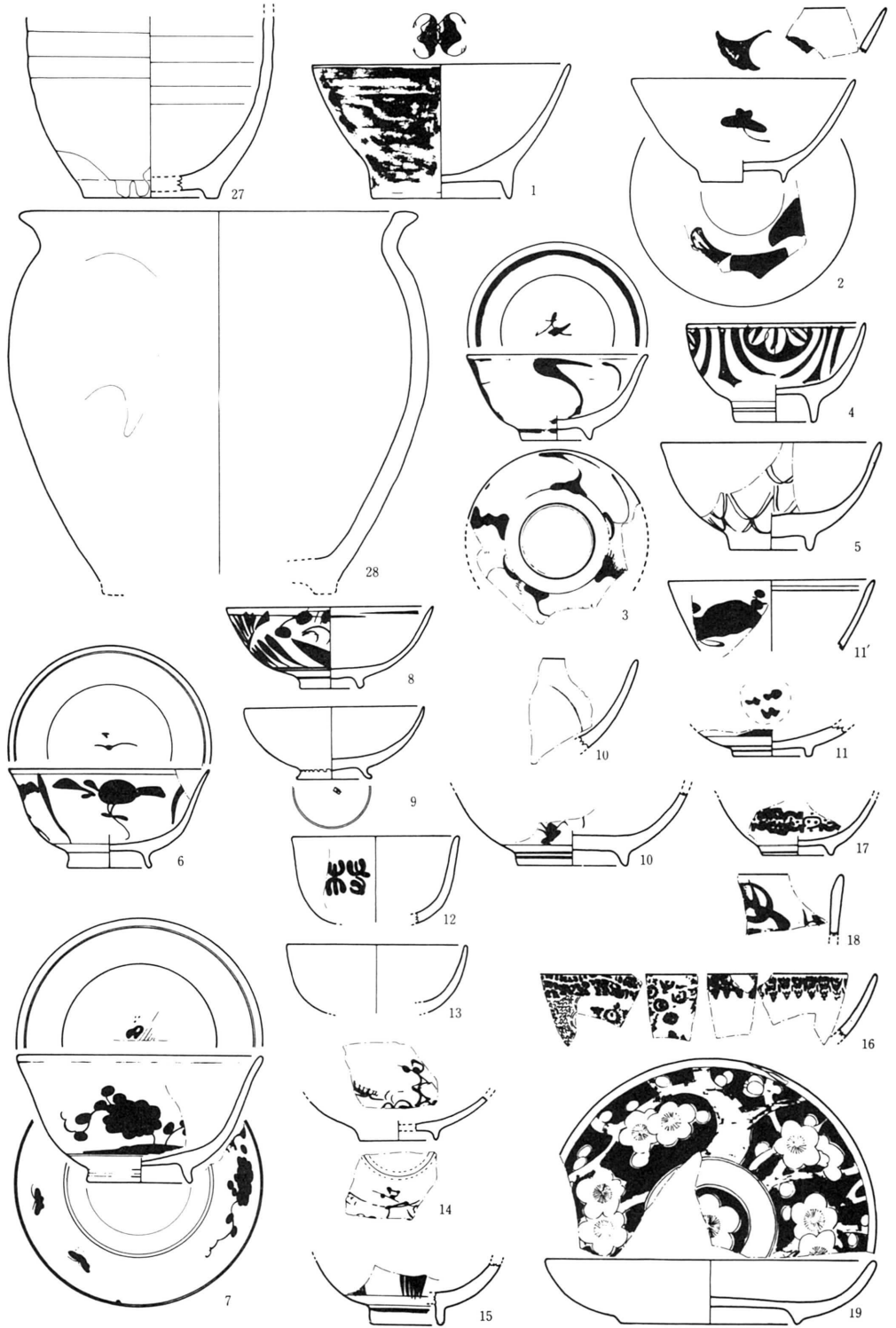
素焼の焼物 (総数6点) (第20図、写真17図・18図、第18表)

器種については破片のみで不明確であるが、角鉢型のもの・火鉢・花器のそれぞれである。一覧表に記した(33)・(35)・(36)は器表が磨き等の調整が施されている。角鉢型の胎土と様相を同じくするものが北側の栗田I遺跡にも出土している。

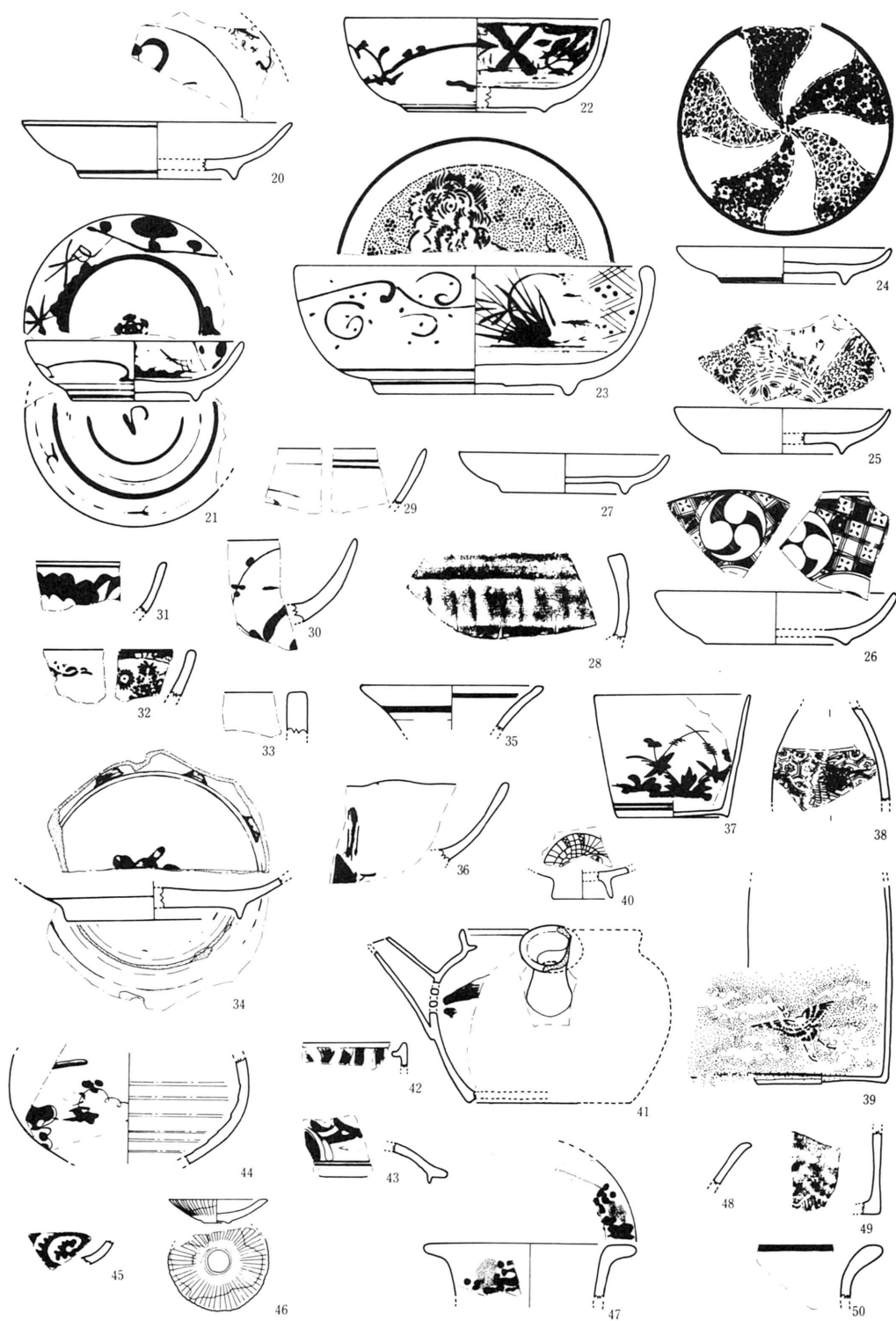
第18表	図版番号	写真番号	出土地点	器種	部位	口径	高台径	器高	釉色調	胎土色調	紋様	備考
44	39-8	27-8	(Ce83)溝No4	小鉢	口~底	9.4	2.9	3.7	灰白 N%	灰白 N%	アリ	色絵(赤青、薄黄、薄緑)、内響気味口縁
45	39-9	27-9	" "	"	"	"	"	"	"	"	"	"
46	39-10	27-10	(Ce92)pit	"	口~体底	—	5.0	—	灰白 N%	" "	"	染付、凹凸線、内響気味口縁他にもう1個体あり
47	39-11	27-11	(Cd83)溝	"	口~体底	—	3.6	—	" N%	" "	"	呉須染付、草葉の色調より口縁部と同一と見えず
48	39-12	27-12	(Be89)住	"	口縁部	(7.6)	—	—	" "	" "	"	呉須染付、内面底文様は黒褐色(10YR%)口縁は類似
49	39-13	27-13	(Ca80)溝表採	"	"	(8.2)	—	—	" "	" "	"	呉須染付、薄青色文、口唇に黄色(2.5Y%)の線、器口縁縁出土類似
50	39-14	27-14	Bi92	"	底体部	—	(3.6)	—	" "	" "	"	上記より青味なし
51	39-15	27-15	(Cc80)溝	"	"	—	(3.4)	—	" "	" "	"	幾分青味、呉須染付、濃紺色部もある
52	39-16	27-16	Ca98	"	口~底	(10.0)	(4.2)	—	" "	" N%	"	呉須染付、淡青~濃青色の絵柄(円と楕円様)
53	39-17	27-17	馬小屋壁	"	底	—	3.2	—	" "	" "	"	呉須染付、濃紺色小振り
54	39-18	27-18	表採	(透呑み)	口縁部	(7.3)	—	—	" "	" "	"	呉須染付(印版)、淡青色小振り
55	39-19	28-19	(Cb92)pit	皿	口~底	(15.0)	(8.0)	(2.9)	" "	" "	"	色絵(下絵黒色、上絵黄緑色)端は外反
56	40-20	28-20	(Ce95)方形pit	"	"	(12.4)	(7.2)	(2.6)	" "	" "	"	呉須染付、紺色部もある 梅鉢花が内面に描かれている
57	40-21	28-21	(Cc80)溝No11	"	"	(9.0)	(5.8)	(2.8)	" "	" "	"	呉須染付、淡青色の線描、釉面のよごれ目につく
58	40-22	28-22	(Ce83)溝No4	平鉢	"	(12.2)	(6.4)	(4.3)	" "	" "	"	呉須染付、淡青色の線描、整形削り感認められる
59	40-23	28-23	" "	"	"	(16.6)	(8.8)	(5.9)	" "	" "	"	呉須染付、釉薬が薄い部分は酸化色を呈する
60	40-24	28-24	(Cd83)溝No6	皿	"	(9.9)	(5.7)	(1.7)	" "	" "	"	呉須染付、淡青~紺色、外面下絵の線の汚れ目につく
61	40-25	28-25	(Cb92)pit	"	"	10.0	5.6	2.1	" "	" "	"	"、印版
62	40-26	28-26	(Cb92)pit	"	"	(11.2)	(6.6)	(2.4)	" "	" "	"	呉須染付 印版(山水風)
63	40-27	28-27	(Be89)住	"	"	(9.7)	(5.8)	(1.8)	" "	" "	"	緑釉印版(巴印)
64	40-28	28-28	(Cd83)溝No8	(小鉢)	口縁部	(8.8)	—	—	明オリゾ灰 2.5GY%	" "	"	白磁(出土位置・床直上)
65	40-29	28-29	Bi92	小鉢	"	—	—	—	灰白 N%	" "	"	青磁、印刷、口唇平坦
66	40-30	28-30	Bi101	"	"	(10.0)	—	—	" "	" "	"	呉須染付
67	40-31	28-31	(Cb92)pit	鉢	"	(14.4)	—	—	" "	" "	"	染付(呉須)、釉内に気泡
68	40-32	28-32	Df77盛土	"	"	(17.0)	—	—	" "	" "	"	染付(青色顔料)
69	40-33	28-33	(Cb92)pit	"	"	(10.0)	—	—	" "	" "	"	不明
70	40-34	28-34	(Cb92)墓場	皿	底 部	—	(7.8)	—	明緑灰 10GY%	" 2.5Y%	アリ	呉須染付、白色の斑点が認められる 胎土褐色部あり
71	40-35	28-35	Bi98	不明	口縁部	(8.4)	—	—	灰白 N%	" N%	"	赤絵付、花器様器形か
72	40-36	28-36	(Cd83)溝No8	皿	"	—	—	—	明緑灰 10GY%	" "	"	呉須染付、内外上下の流状口縁 口唇部に黄色(2.5Y%)の線
73	40-37	28-37	(Cd83)溝No8	猪口	口~底	(7.2)	(5.1)	(5.6)	灰白 10Y%	" 7.5YR%	"	呉須染付、内外に貫入入り 箸手、他に同形の個体片あり
74	40-38	28-38	表採	鏡子	頸 部	—	—	—	" N%	" N%	"	呉須染付、印版 鶴に亀甲模様
75	40-39	28-39	(Cd83)溝No9	"	底体部	—	(5.8)	—	" "	" "	"	呉須染付、印版 鶴の絵、内面に削り痕、外底は素地
76	40-40	28-40	(Aj62)建物EN3	盃	"	—	(2.8)	—	" "	" "	"	呉須染付、鶴の絵
77	40-41	28-41	(Cd83)溝No8	急須	口~底	(8.0)	(7.4)	(8.0)	" "	" "	"	呉須染付、削削で下絵の濃淡を出している 紺~青色
78	40-42	28-42	(Aj62)建物EN3	蓋物	口縁	(8.5)	—	—	" "	" "	"	呉須染付、薄青
79	40-43	28-43	Cg151	蓋	下 端	—	(12.0)	—	" "	" "	"	呉須染付、紺~薄青
80	40-44	28-44	Df77盛土	急須	体 部	—	—	—	明緑灰 7.5GY%	" 2.5Y%	"	呉須染付、紺色・紺~薄青、内面の削痕深い
81	40-45	28-45	(Cc74)溝	"	"	—	—	—	灰白 N%	" N%	"	呉須染付、薄青・溝状(房付)
82	40-46	28-46	(Cd83)No8	紅皿	口~底	4.6	1.2	1.1	明緑灰 10GY%	" "	ナシ	外面放射状刻線 一具鋭状模様
83	40-47	28-47	表採	(花器)	口縁部	(9.8)	—	—	10GY%	" "	アリ	色絵(鉄・緑色)内面に施釉なし
84	40-48	28-48	Ce89	不明	"	(6.8)	—	—	灰白 N%	" "	ナシ	灰色幾分強い 端反り
85	40-49	28-49	(Cd80)溝No14	(花器)	底 部	—	—	—	" "	" "	"	アリ
86	40-50	28-50	(Aj62)建物EN3	"	口縁部	(24.0)	—	—	白	白	ナシ	呉須染付、割印上に下絵付、角型 (陶器) 口唇部に淡青色の線



第38图 陶器



第39图



第40图

〔施釉陶器〕（総数55点）（第38・39図、写真25・26図、第18表）

器種としては碗、皿、鉢等の日用雑器で、その詳細は一覧表に記してある。器種の分類において、他報告書にて端反皿としているものも当報告書にては、鉢として区分した。これに従った器種別の個体数では、鉢が大半を占める。

これら陶器の中には重ね焼き痕が認められるものもあるが、歪んで溶融・接着した破片を付着させている物もある。

施釉は鉄釉系のものが多い。

時期及び産地については不明であるが、(13)・(16)は宮城県切込め窯出土物に類似しているとの見方もある。

〔磁器〕（総数75点）（第39・40図、写真27・28図、第18・18'表）

器種は碗・皿・鉢・急須・銚子等の日用雑器であるが、陶器と同様鉢が目立つ。絵付は染付が圧倒的に多いが、数点上絵付が認められる。染付には印版を用いたものもある。顔料として呉須と記した中にもコバルトを使用した可能性もあり今後の検証の必要性が残される。

時期及び産地は不明である。近代のある時期には瀬戸職人が季節を限って東北地方に出向き生産にあたったという事もある様で、その過程を経て製作された遺物もあると思われる。

ロ．石製品（総数8点）

硯（1点、破損品Ca98土壌検出面出土）・石版（1点、破損品Cb80溝出土）・砥石（6点、完形4点・破損品2点）がある。砥石は第二群建物跡曲り家の北側、土間と思われる部分に集中して出土する。これらの砥石はいずれもかなり使い込んだものである。

ハ．金属製品（第41図、写真29図、第20表）

古銭と鉄製品が出土している。

古銭はすべて寛永通宝である。建物跡地域より7枚、墓壙より17枚の計24枚出土したが、腐蝕して厚さ・大きさとも原形をとどめないものも多い。

第一群建物跡掘立柱掘方埋土より無背の銅銭((1)・(2))2枚が出土している。

第二群建物跡掘立柱掘方埋土よりは背に文のある銅銭((3))が、表採のものは背に波形紋が

第19表	番号	図版番号	写真番号	出土地点及び層位	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	材質	備	考
砥石	1	16-50	14-50	(B192)柱状土壌	11.3	4.1	3.6	緑色凝灰岩	磨面5(完形-右端欠?)	
	2	16-51	14-51	(B198) " "	11.5	8.1	2.7	"	" 2表裏 右端欠く	
	3	16-52	14-52	(") " "	8.3	7.5	3.9	"	" 5断面三角形、破損品	
	4	16-53	14-53	(B192) " "	14.1	4.8	3.9	"	" 3(三面剝離)面反り、破損品	
	5	16-54	14-54	(B198)方形状土壌床面	18.5	3.1	7.4	"	" 6(51類似)完形	
	6	16-55	14-55	(B1101)表採	8.8	5.3	2.8	"	" 6 完形	

ある真鍮四文銭 ((7)) と無背の銅銭 ((5)・(6)) の 2 枚で、この建物で、計 4 枚出土している。

第二群建物跡の西側の溝よりは背に足の紋がある銅銭 ((4)) が 1 枚出土した。

墓壇よりのものは古寛永 2 枚、新寛永が 15 枚 (不明等を含む) で、その内の 1 枚 ((10)) の背に文がある。(尚表記中には推定される種類を記してあるが再検討を要するものもある。)

鉄製品には、鍋の取手・注口・釣手部及び体部・底部、鋤、鈎、包丁様鉄製品があるがそれぞれは錆化が著しい。鍋は器壁外面上半に平行な浅い溝が横方向に見られ、底は短い突起を 3～4 個有する丸味を有するもので、推定される大きさとして口径 22cm、底径 14.3cm、高さ 11cm が考えられる。

VIII まとめ及び今後の課題

用地内の遺跡部分を全面発掘調査した結果、当遺跡は縄文時代より近代に至るまで (途中空白期を有するが) の長期間を有するものである事が認められた。中世の遺構として明確な証拠を残すものは認められなかったが遺物でその一時期が該当するものは認められる。

この調査地において時代と立地の関係を示す点も特徴としておく。これは西半部のやや高い部分には縄文時代の遺構や遺物が、東半部のやや低い部分には近世以降を中心とする遺構や遺物が認められるという事である。

縄文時代においては竪穴式住居跡と焼土遺構、更には貯蔵穴又は狩猟等の陥し穴として機能したと考えられる土壌との関係が考えられ、縄文時代早期より中期までの時代をあてはめる事が出来、後期のものとしては単独又は並列に配置された溝状土壌 (久慈市三崎(III)遺跡検出例では約 3000 年前の縄文時代後期末から晩期初頭の時期を示す測定値がある。) や、炭化物 (栗・胡桃) を出土した炉跡 (¹⁴C 測定結果にては約 4000 年前の値を示す。) がある。

古代以降の遺構や遺物は数少いが、調査地北東部に竪穴式住居跡・土師器及び、赤褐色軟質土器がある。

近世以降の遺構や遺物は、第一～第三群建物跡とそれに係わる遺構及び陶磁器等である。調査時の所見によれば、西側溝の造り変え等による条数の多さは、建物跡の古さを示すという関係から、第二群・第一群・第三群の順で新しくなると考えている。更にこれら建物群の時期における上限及び下限は、南東部の墓地・墓碑にある享保 12 年 (1727 年) (但し判読可のもので) を上限の古いものとし、溝の人為的埋積が行なわれた (伝聞) 大正時代を下限として考えている。以上の様な時期それぞれ、特に上限の江戸時代中期以降の遺物を陶磁器に求めた場合、どれがそれにあたるか追証する必要性が残る。この事は今後の研究結果に待たなければならない。

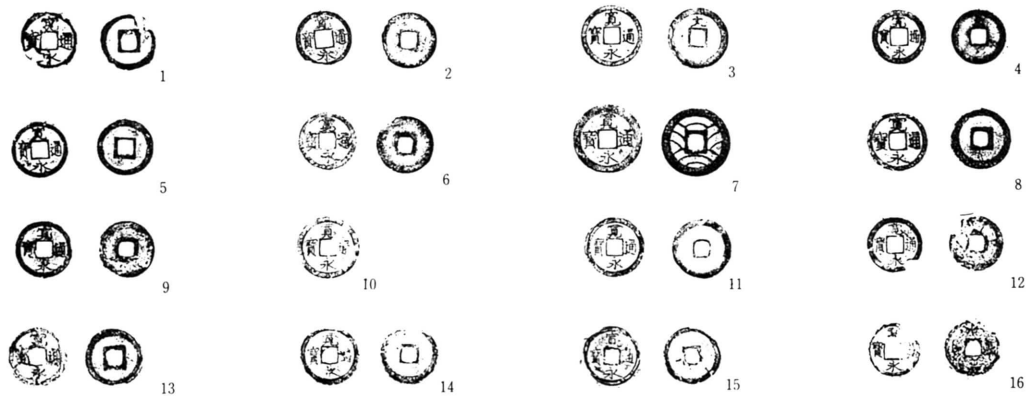
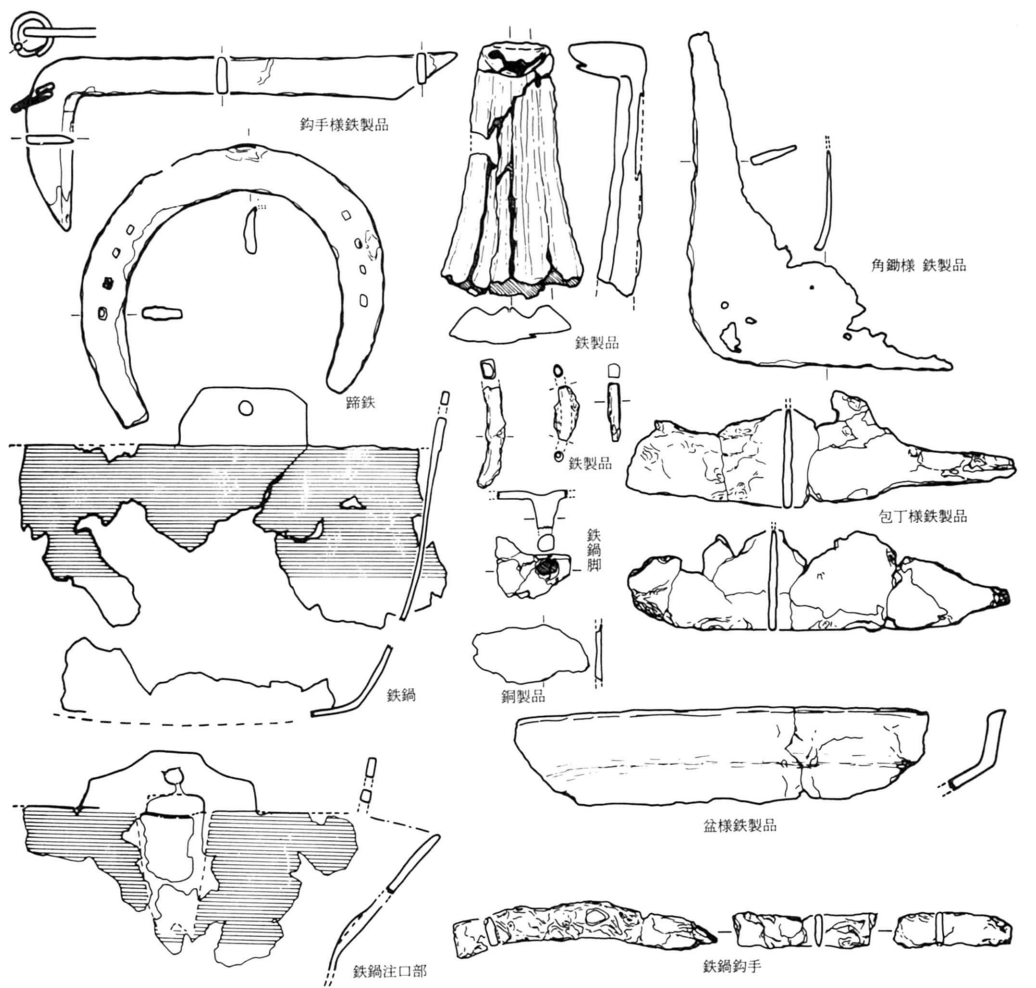
同様の課題はこれら建物跡の確定及び間取り等に於いても残る。

第20表	名称	出土位置	外縁外径	同内径	内縁外径	同内径	外縁厚	重量	備考(前欄の径・厚はmm、重量はg)	図番号	写真番号
1	寛永通宝	第一建物群Ai62p底	24.3	19.7	7.7	6.2	1.05	1.8	古寛永無背 一部欠損 全体腐蝕	41-1	29-1
2	"	第一建物群Ba74pit2	23.0	18.8	8.0	6.5	1.0	2.1	新寛永無背 外縁一部欠損	41-2	29-2
3	"	第二建物群C495p	25.0	20.5	7.5	6.2		2.3	新寛永文銭(寛文期亀戸銭)(掘り方埋土上部)	41-3	29-3
4	"	第二建物群西溝	22.2	17.0	7.6	6.25	1.25	2.3	新寛永背足(寛保期足尾銭の鋳銭?)	41-4	29-4
5	"	第II柱表採	23.0	18.6	8.0	6.0	1.05	2.8	新寛永無背	41-5	29-5
6	"	表 採	23.4	18.0	7.3	5.85	1.2	2.1	古寛永無背	41-6	29-6
7	"	"	28.1	21.1	8.2	6.5	0.9	4.3	四文銭、背十一波、明治6年銭の文政の赤銭? 南部藩銭?	41-7	29-7
8	"	南部墓穴内	24.5	20.0	7.5	6.0	1.1	3.1	古寛永、無背	41-8	29-8
9	"	"	23.0	18.3	7.2	6.15	1.1	2.7	新寛永無背(元文期亀戸銭もしくは同期仙台銭)	41-9	29-9
10	"	"	25.15	20.3	7.3	6.0	1.2	1.9	新寛永文銭(寛文期亀戸文銭)一部欠損	41-10	29-10
11	"	"	24.25	19.6	7.2	6.15	1.4	3.1	新寛永無背	41-11	29-11
12	"	"	22.3	18.0	7.1	6.15	1.15	1.2	新寛永無背(寛保期佐渡相川銭)一部欠損	41-12	29-12
13	"	"	23.6	19.4	7.5	6.05	1.0	2.9	古寛永無背	41-13	29-13
14	"	"	23.8	19.7	7.3	5.85	1.15	2.4	新寛永無背(元文期鳥羽銭もしくは藤沢銭)外縁一部欠損	41-14	29-14
15	"	"	23.7	19.5	7.0	5.5	1.15	2.5	新寛永無背 外縁一部欠損	41-15	29-15
16	"	"	21.6	18.5	8.0	6.5	1.1	0.9	新寛永無背(元文期)一部欠損	41-16	29-16
17	"	"	23.3	20.2	7.2	6.2	1.0	1.4	新寛永無背 外縁一部欠損、腐蝕甚し		
18	不明	"	-	-	-	-	1.0	-	不明 不明		
19	寛永通宝	"	-	-	-	-	-	3.5	3枚 " 欠損ひどい 釘を共伴		29-19
20	"	"	-	-	-	-	-	1.6	2枚 " "		29-20
21	"	"	約23	約19.5	約8	約6.5	-	0.9	新寛永(元文期)欠損・腐蝕ひどい		

《参考文献》

(自然科学関係)

- 中川 ほか 北上川中流沿岸の第4系及び地形(地史) 地質学雑誌第69巻 812号 1963. 5
日本地質学会第80年総会見学旅行2資料 北上川低地帯の鮮新統第四系地形 1973
- 佐藤二郎 考古学のための地質学—岩手県文化課における講演資料— 1978. 8
- 町田 洋 火山灰 岩手県(財)埋蔵文化財センター主催講演会資料 1979. 6
- 井上克弘) 東北地方における奈良~平安時代遺跡埋土中の粉状パミスについて
山田一郎) —岩手県教育委員会文化課依頼分析結果より 1981. 11. 24
考古学と自然科学 第1号~第10号
- 町田 洋ほか 日本海を渡ってきたテフラー科学vol.51 No.9 1981. 9
- 三辻利一 土器の産地 —科学朝日—6月号— 1981. 6
- 岩手県農政部 土地分類基本調査 日誌(1/5万) 国土調査 1974
北上山系開発室
- (縄文時代以降関係)
- 今村啓爾 縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較、物質文化No.27
- 宮沢、今井 縄文時代早期後半における土壌をめぐる諸問題—いわゆる落とし穴について— 1976
調査研究集録第1集 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 霧ヶ丘調査団 霧ヶ丘 1973
- 岩手県教委 岩手県文化財調査報告書 第31・32・52・53・54・57集
日本道路公団 本調査関連報告書 I・II・III・IV・V・VIII 1979~1981. 3
- 岩手県教委・国鉄 第48集東北新幹線関係報告書IV宮地遺跡 1980
- 岩手県(財)埋文センター
県土木部 岩手県(財)埋文センター報告書第13集 繫III遺跡 建設省御所ダム事務所



第41図 金属製品

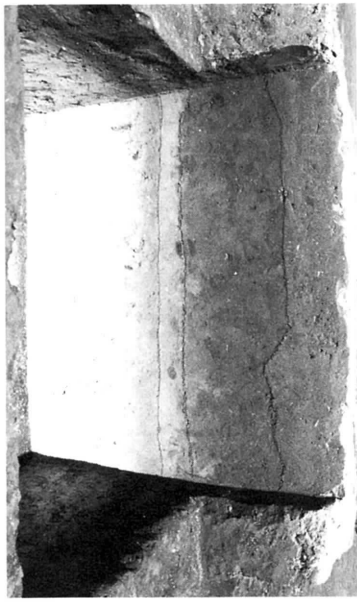
北上市史編纂委員会「北上市史 原始—古代」北上市史刊行会

青森県教委 青森県文化財調査報告書 第37集 青森市三内遺跡 1978. 3

岩手県教委 「岩手の古民家」(佐藤 巧) 1978



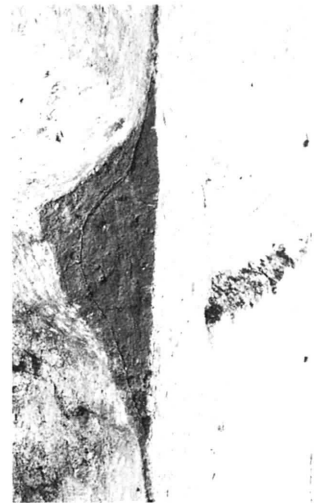
栗田川遺跡南側第三建物群上盛土状況



(Bij 50) 土層断面



第一建物群東側(土壘)



1 (B d 62) 溝



2 第一建物群南溝

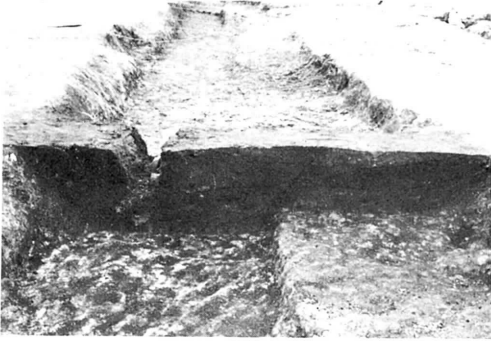


3 (Od77~Ce77)溝

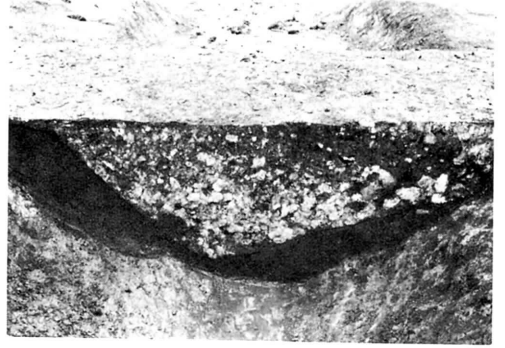


4 (Ce71~Ce74)溝

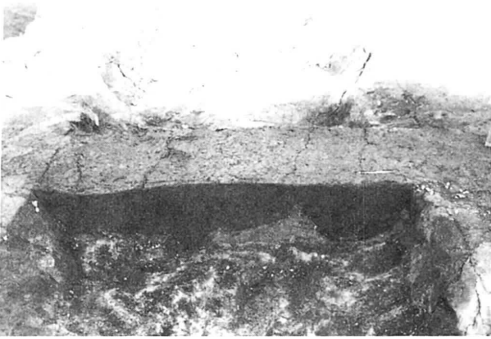
第1図



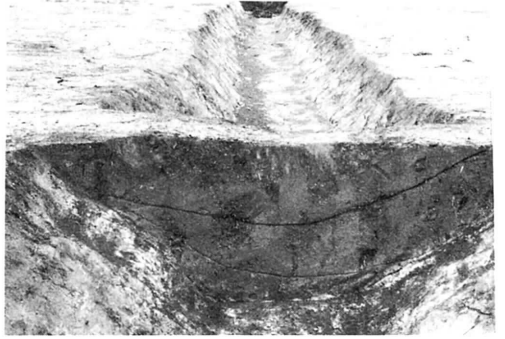
1, 第二建物北边 (Bf98) 溝



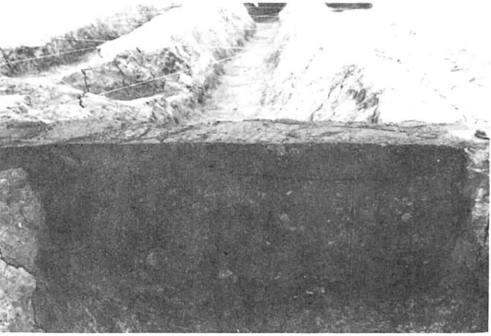
2, 第二建物西边 (Ce83) 溝



3, (Cf77) 溝



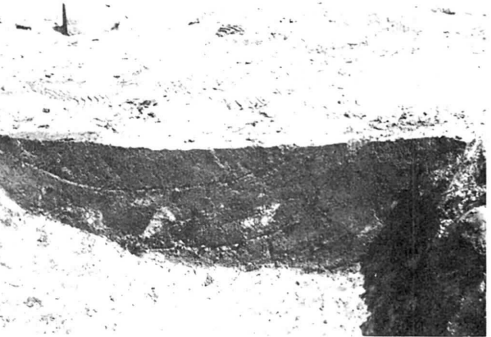
4, (Ch53) 溝



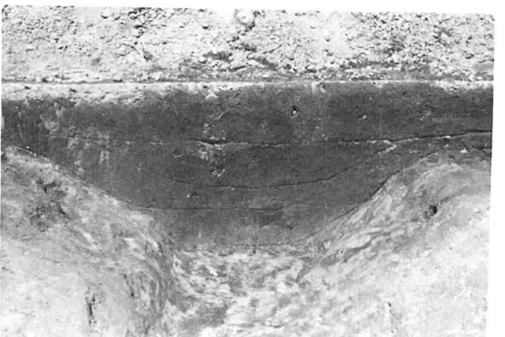
5, (Ci77) 溝



6, (Ci82) 溝



7, (Cj86) 溝



8, (Da27) 溝

第 2 图 溝土层断面



1, (Af12) 竪穴式住居跡



同左 石組炉



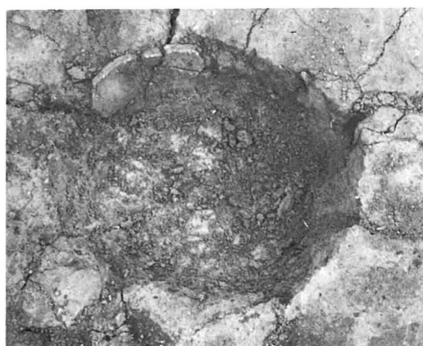
2, (Cg59) 竪穴式住居跡



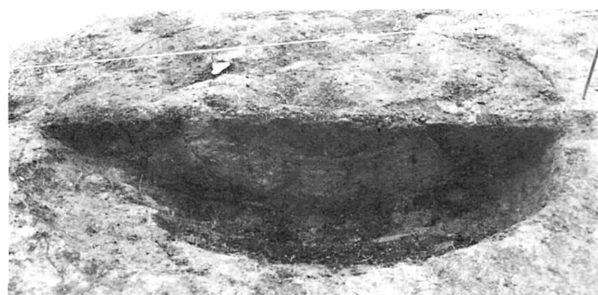
同左 埋設土器



3, (Af06) 焼土遺構



同上

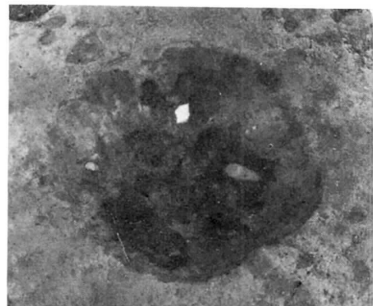
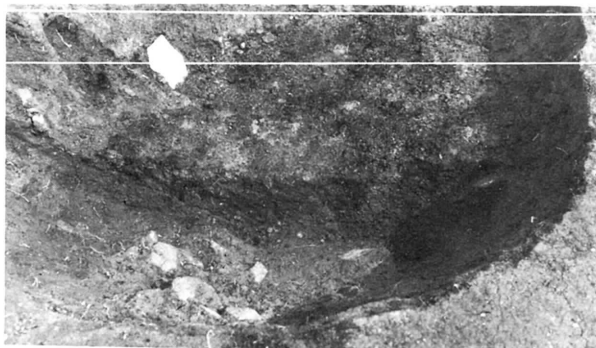


4, (C12) 焼土遺構



5, (Cf24) 埋設土器

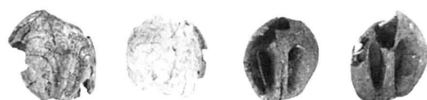
第3図 縄文時代遺構及び遺物



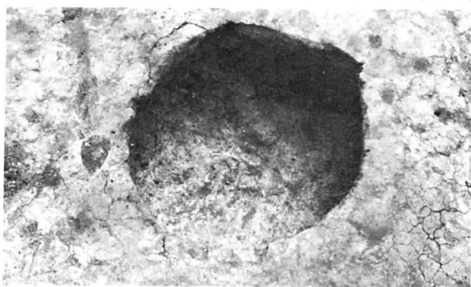
← ↑ (Ci21) 烧土遺構



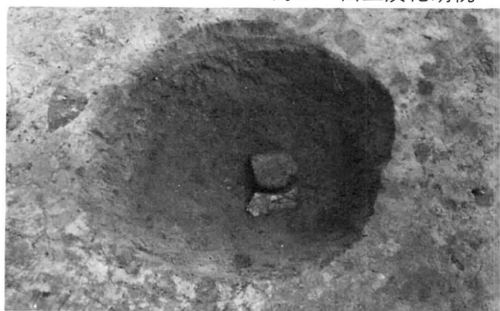
同上 出土炭化栗



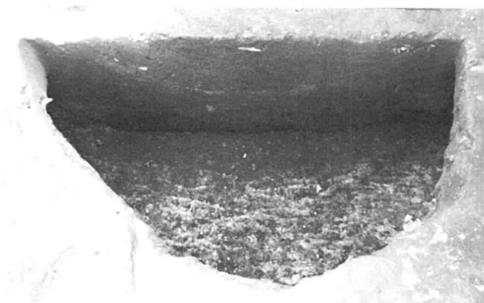
同上 出土炭化胡桃



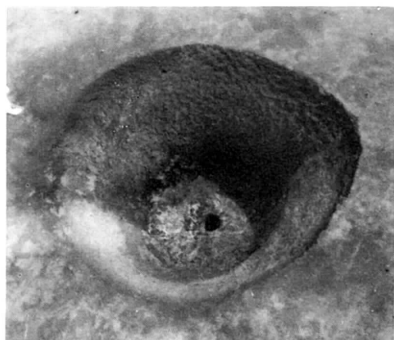
3 (Ci21) 土壙



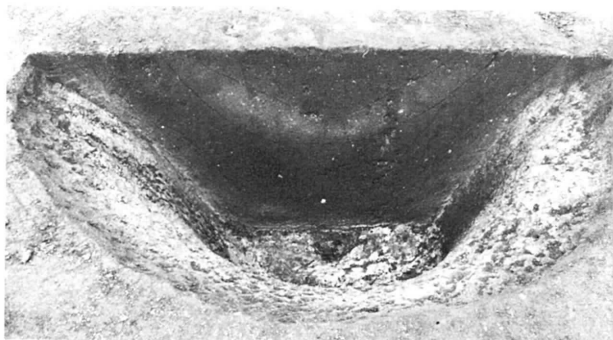
3' (Ci21) 烧土遺構



← (Af06) 土壙 ↑ 同左 土層断面



2 (Bj06) 土壙



同左 土層断面

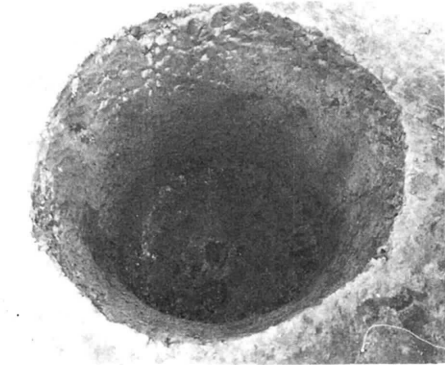
第4図



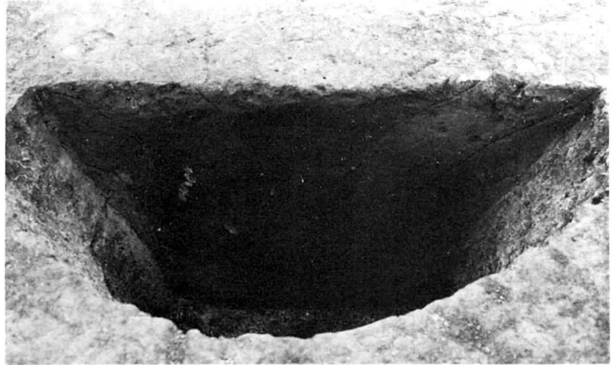
(Ce18~Cf12付近) 溝状土境



I (Cg27) 土境



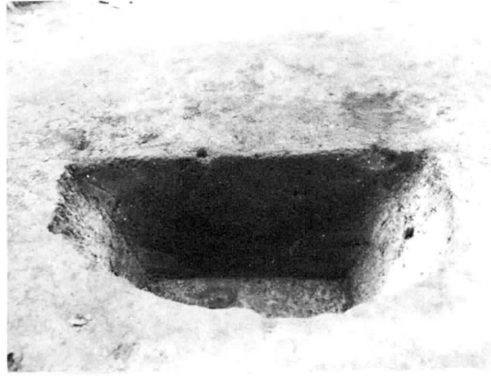
2 (Cb09) 土境



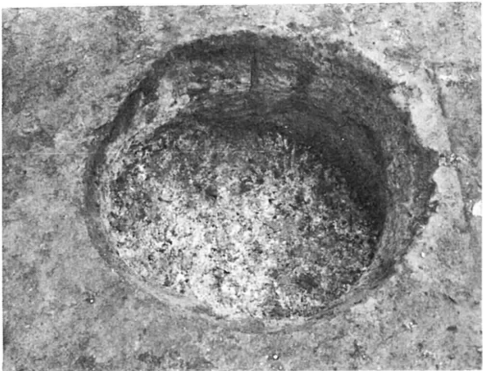
同左 土層断面



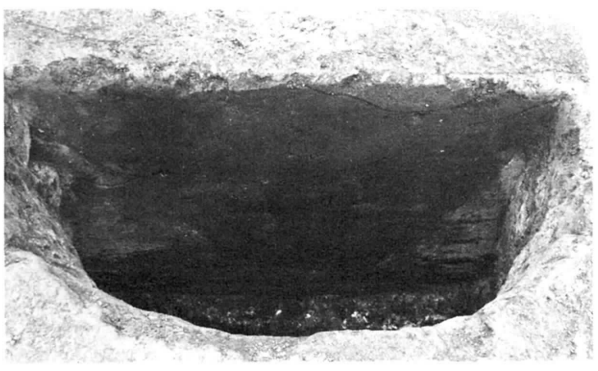
3 (Ca03) 土境



同左 土層断面

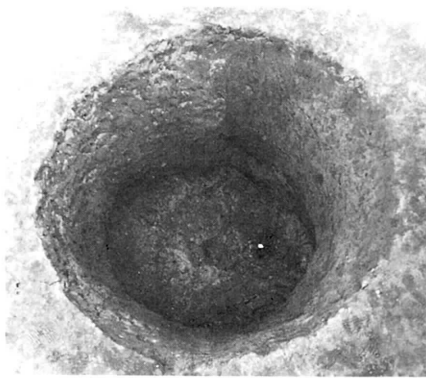


4 (Cc59) 土境



同左 土層断面

第 5 図



1 (Cd09) 土壤



同左 土層断面



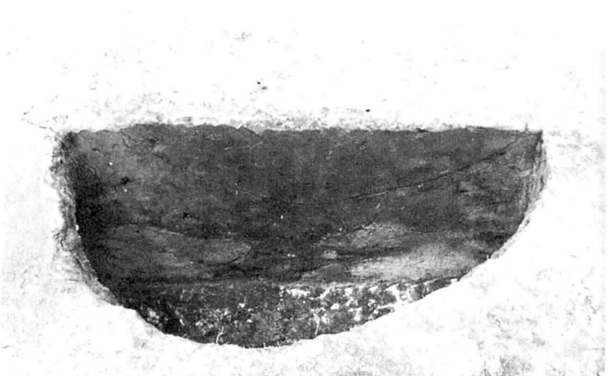
2 (Ce53) 土壤



同左 土層断面



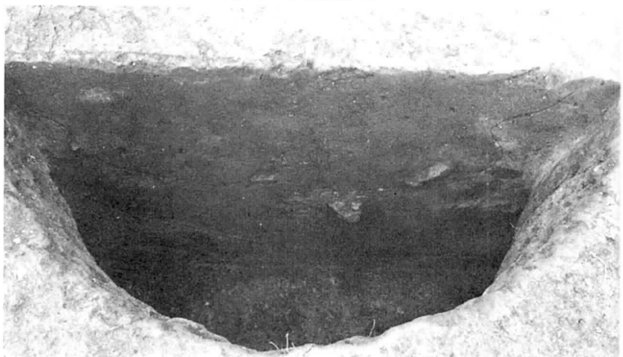
3 (Cf53) 土壤



同左 土層断面

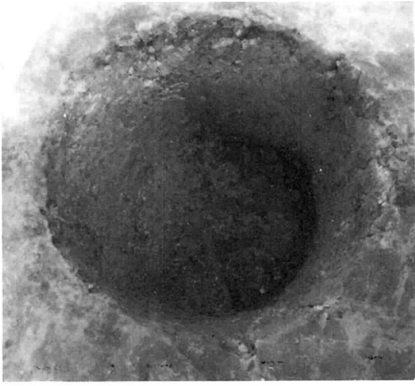


4 (Cf59) 土壤



同左 土層断面

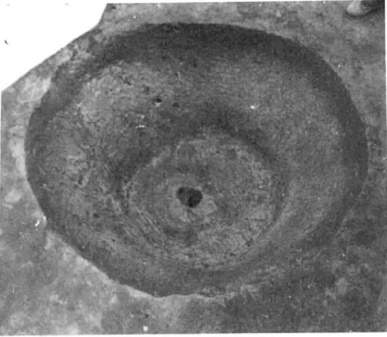
第 6 图



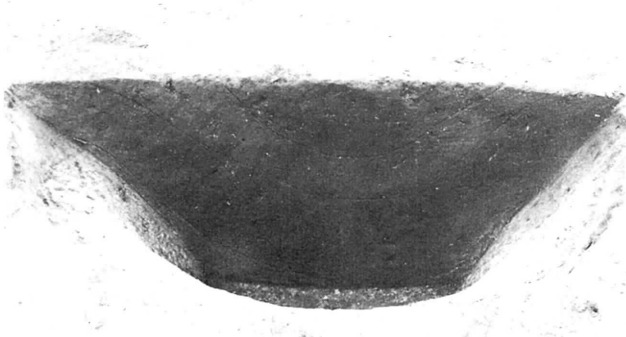
1 (Ch03) 土壙



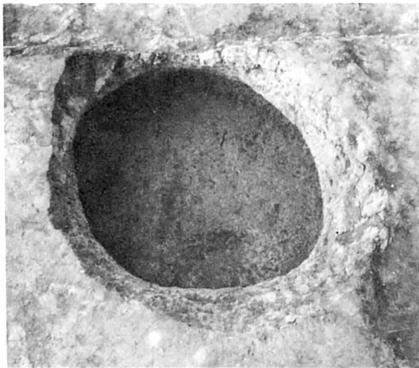
同左 土層断面



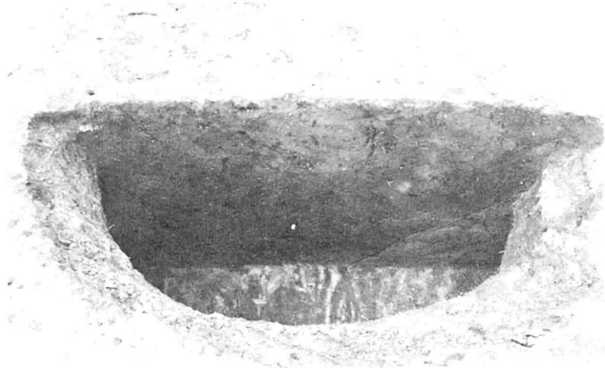
2 (Bi03) 土壙



同左 土層断面



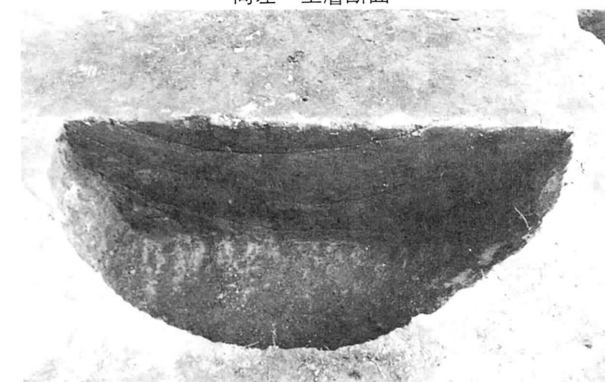
3 (Da12) 土壙



同左 土層断面

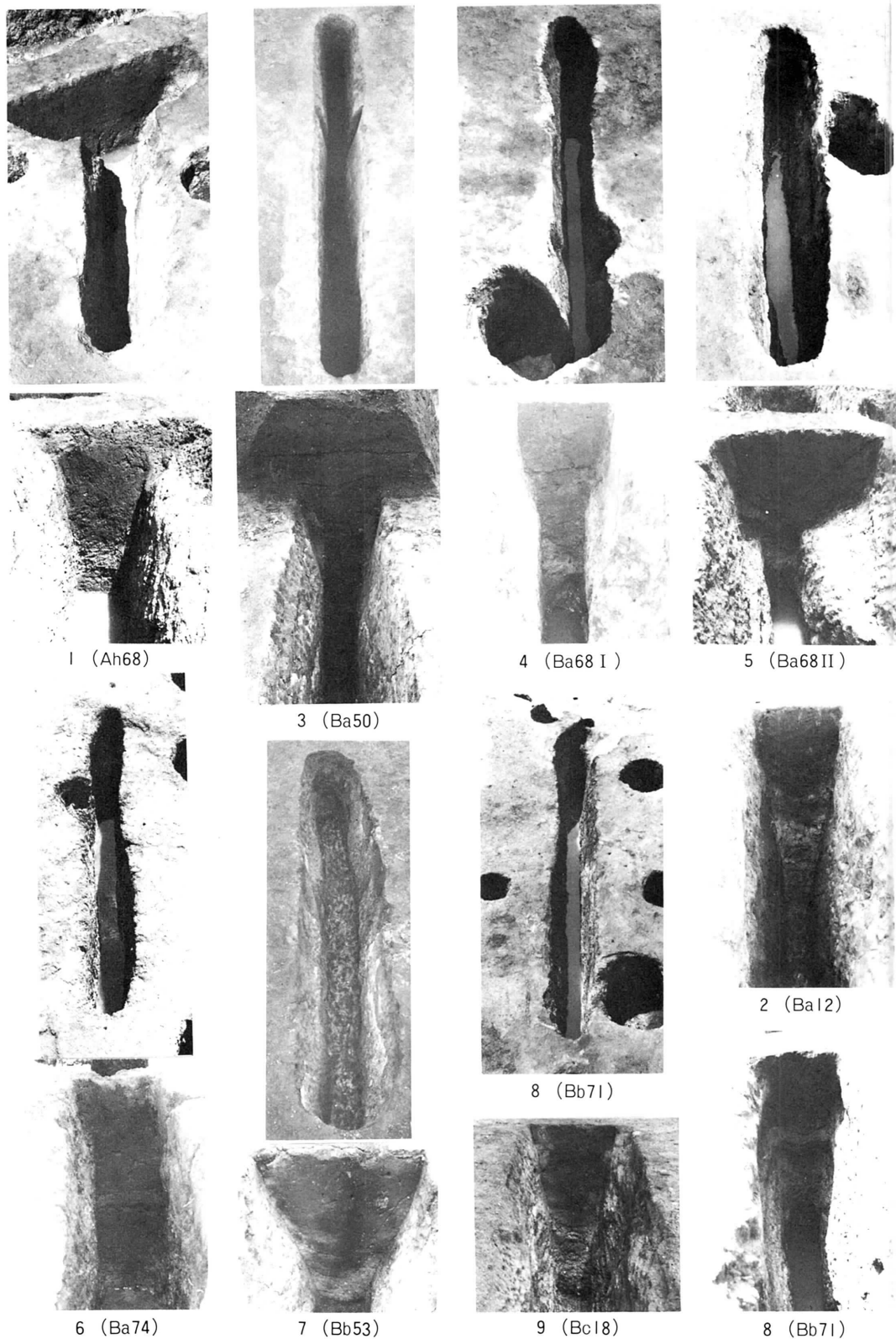


4 (Da18) 土壙



同左 土層断面

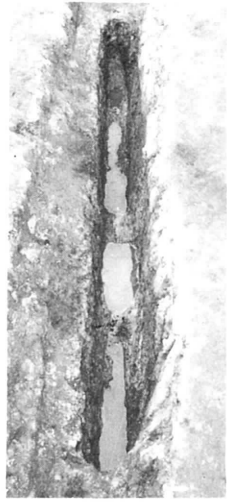
第 7 图



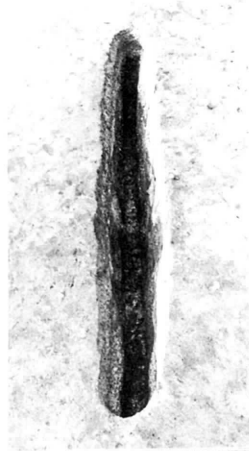
第 8 図 溝状土壌



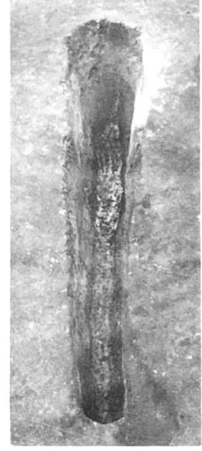
1 (Bc59)



2 (Bc65·Bd65)



3 (Bd18)



4 (Bd03)



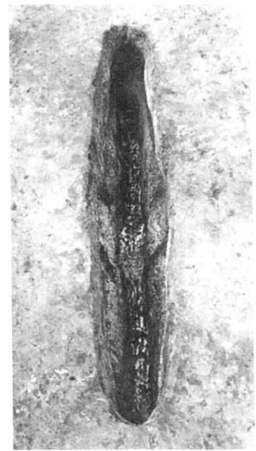
2 (Bc65)



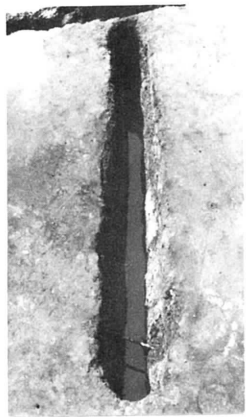
6 (Be50)



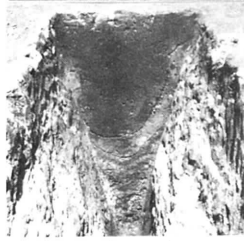
7 (Be53)



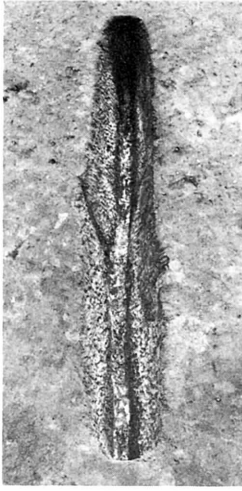
8 (Bf18)



5 (Bd71)



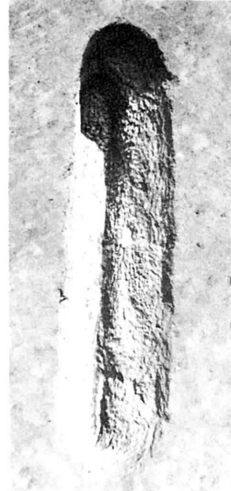
第9图 溝状土壤



1 (Bf09)



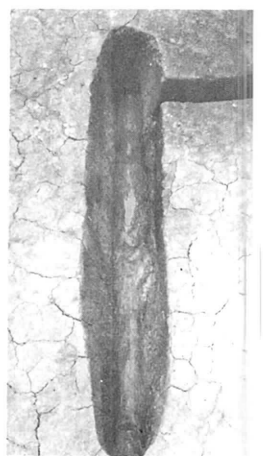
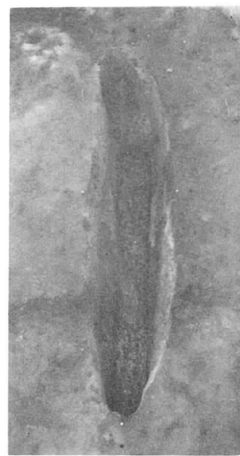
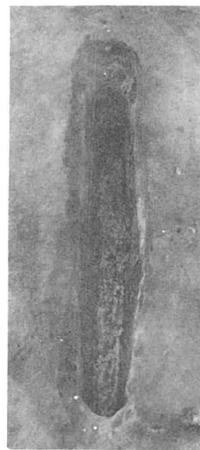
2 (Bf06)



3 (Bf03)



4 (Bf56)



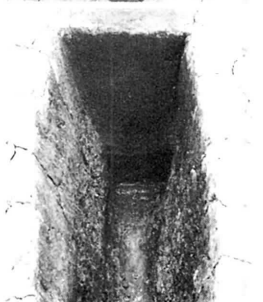
5 (Bf83)



6 (Bg12)

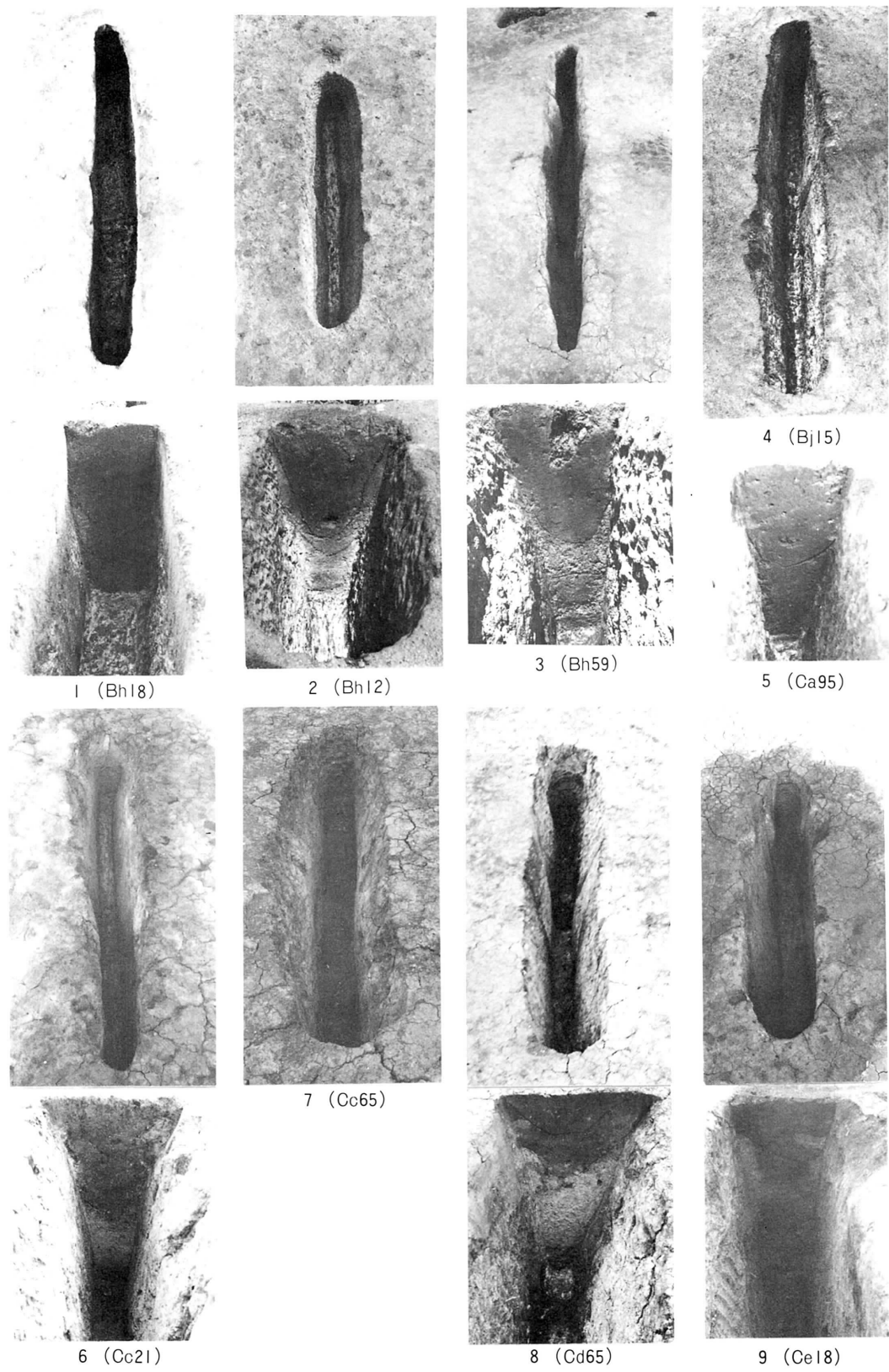


7 (Bg09)



8 (Bg107)

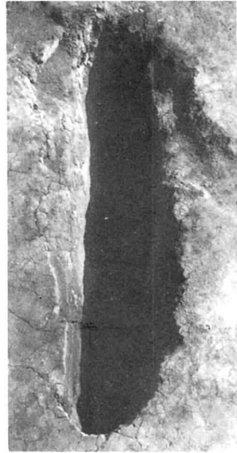
第10図 溝状土壌



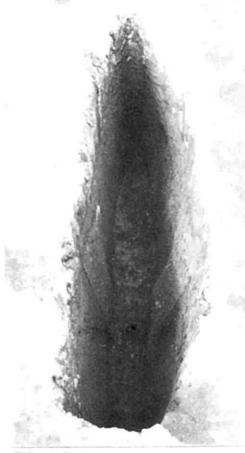
第11图 溝状土壤



7 (Cf12-1)



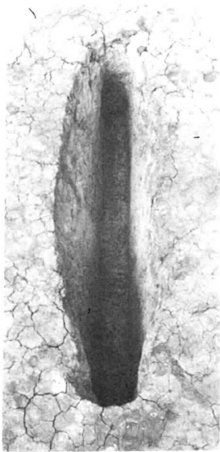
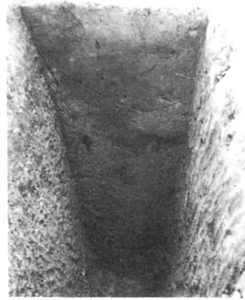
1 (Ce15西)



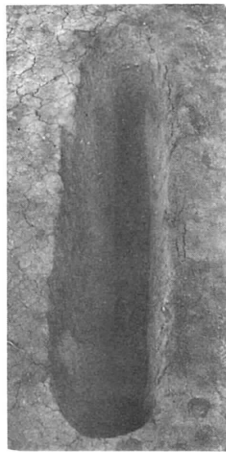
2 (Ce15東)



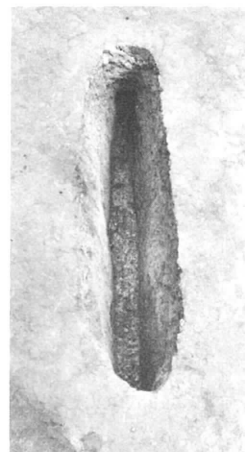
3 (Cf24)



4 (Cf24東)



5 (Cf21)



6 (Cf15)



8 (Cf12-2)



第12図 溝状土境

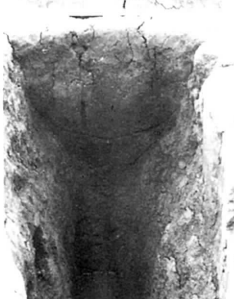
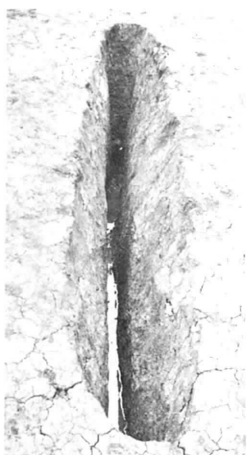
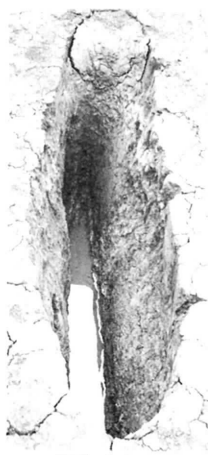


1 (Cg09)

2 (Cg56)

3 (Cg62)

4 (Cg65)



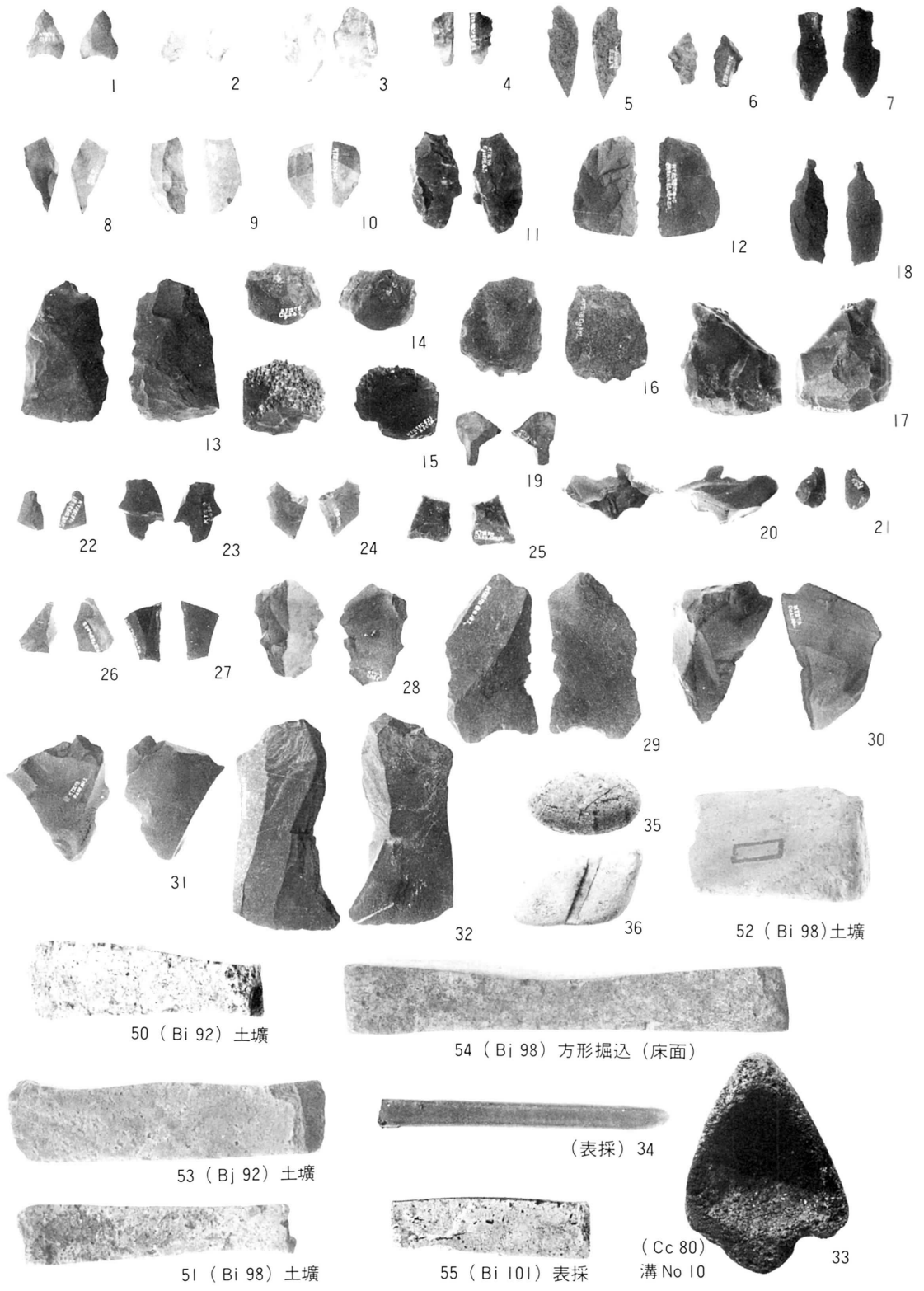
5 (Cj62)

6 (Da68)

7 (Db68)

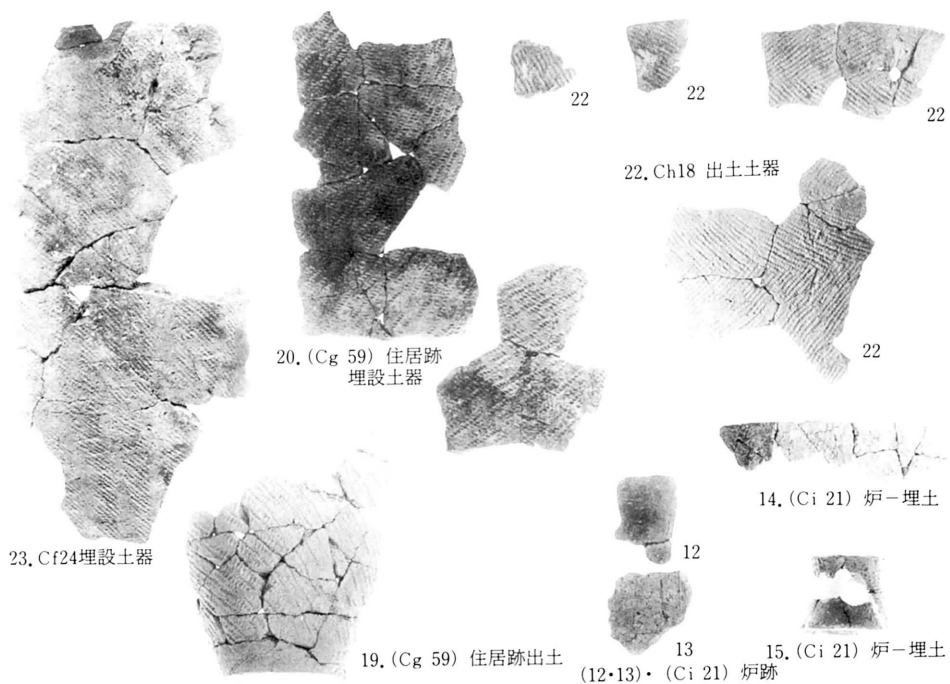
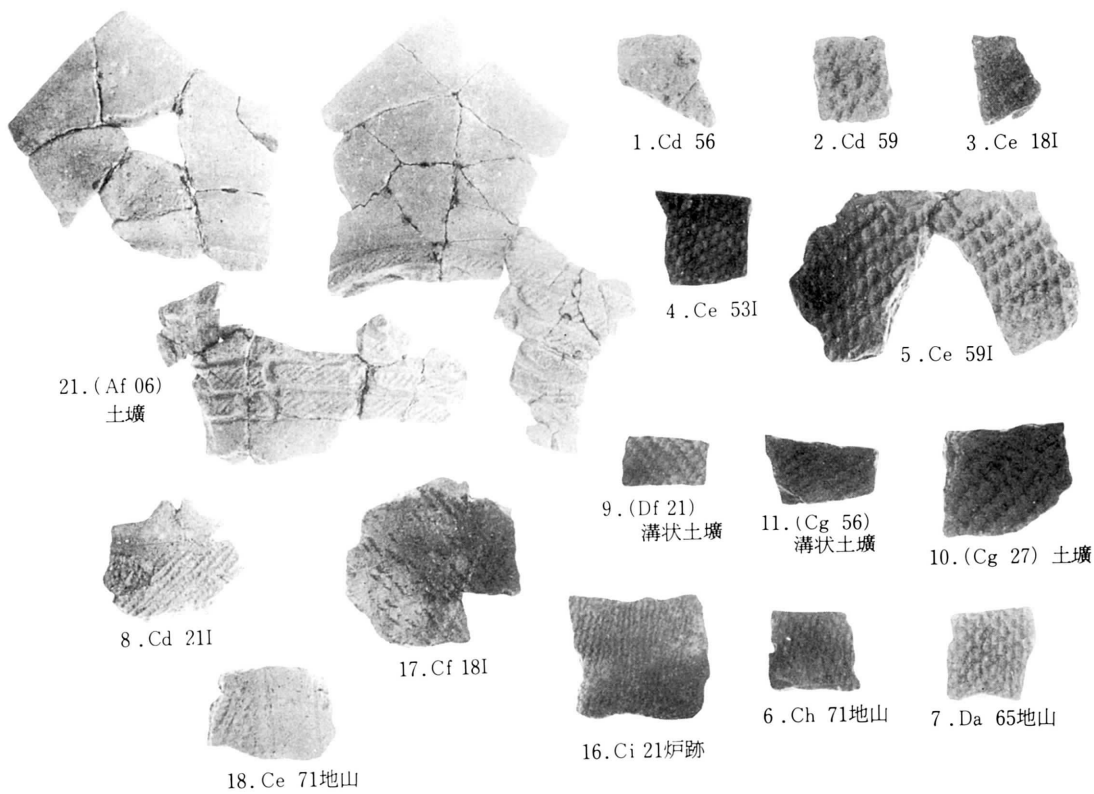
8 (Db71)

第13図 溝状土壌



1 (S = 1/2), その他 (S = 1/3)

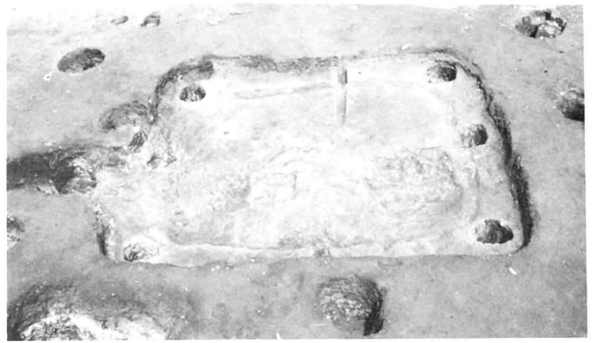
第14図 石製品



第15図 縄文式土器



(Be 89) 竪穴式住居跡



(Bc 74) 竪穴式住居跡



同上 埋土東西断面



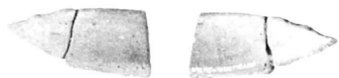
同上 埋土南北断面



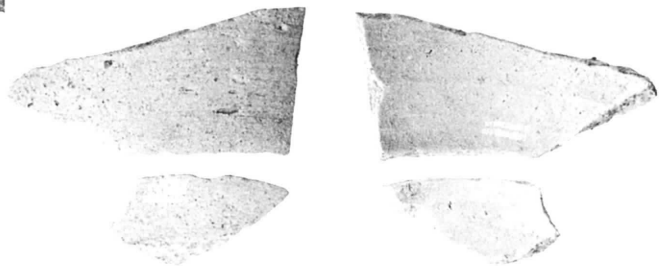
(Cc 95) 方形土壙



同左 埋土南北断面

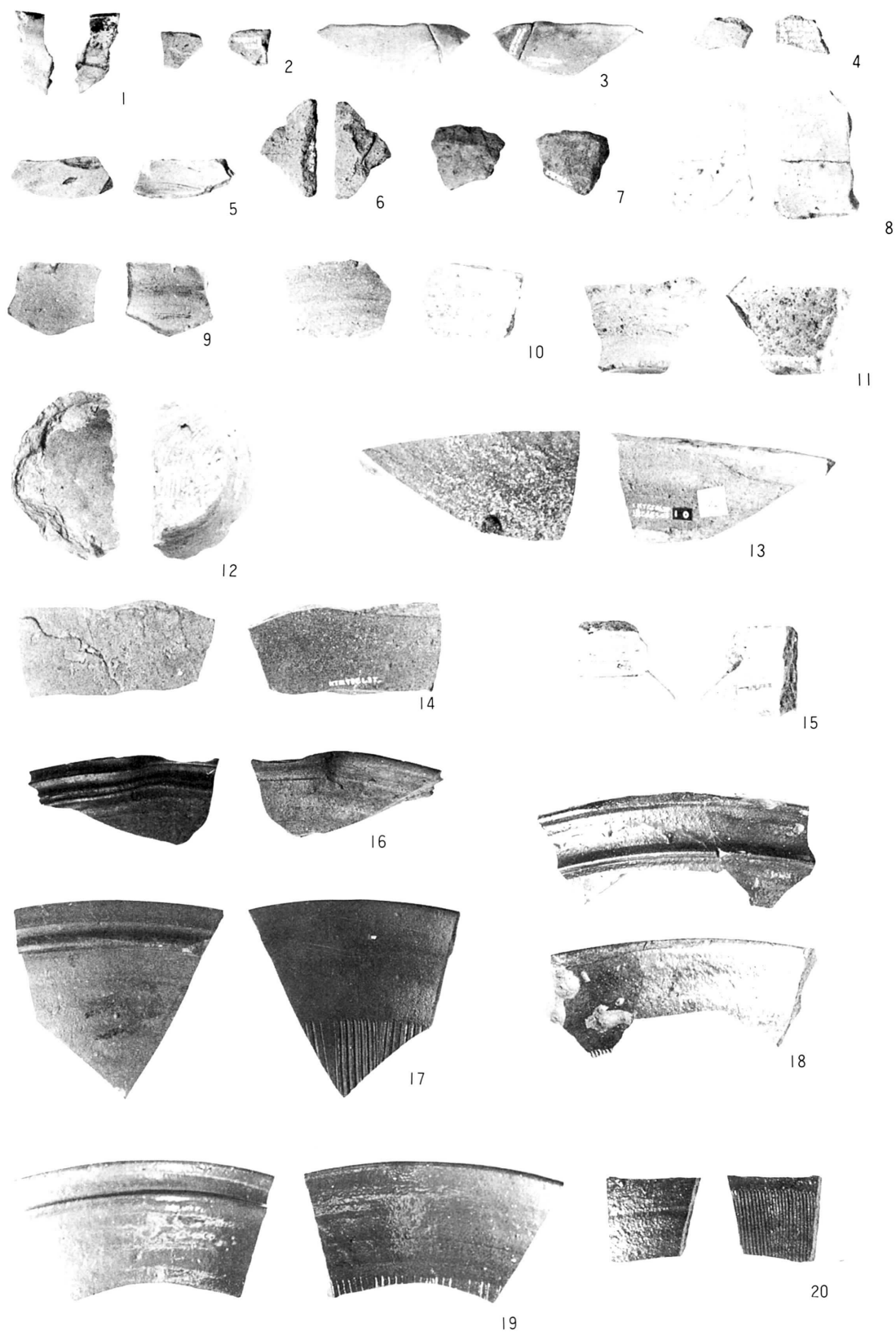


(Da 83) 方形土壙出土土師器口縁片

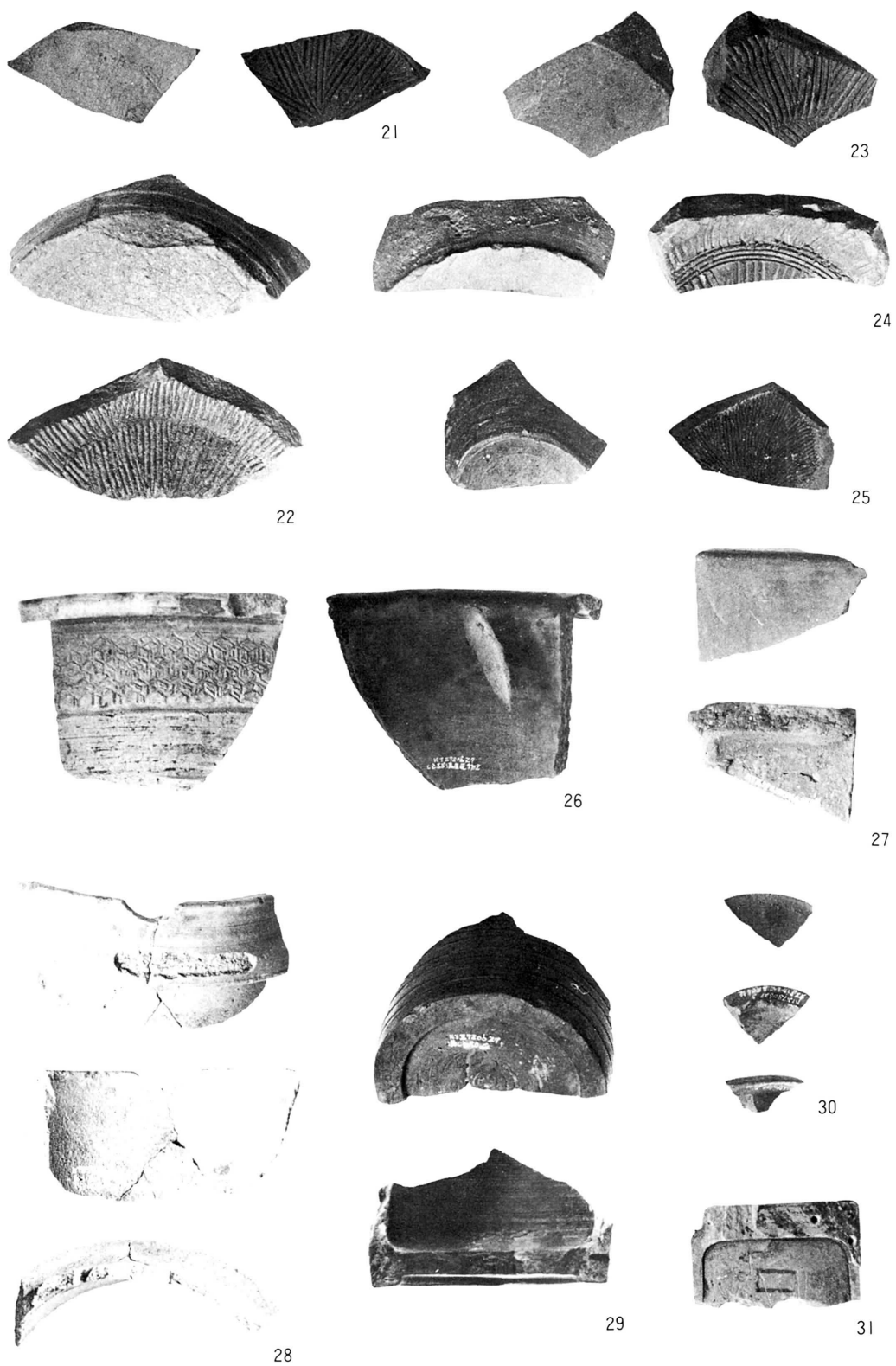


(Be 89) 竪穴式住居跡出土物

第16図 古代以降の遺構と遺物



第17図 土師質土器、須恵器、播鉢他



第18図 播鉢、土製品他



(Aj 62) 建物付近柱穴列 (南から)



(Aj 74) 建物柱穴列 (西から)



(Bc 71) 建物柱穴列 (南から)



(Bc 83) 建物柱穴列 (西から)



第二建物群柱穴列 (西から)



第二建物群馬小屋付近 (北から)

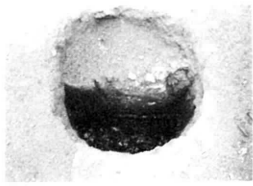


(Cb 80) 水場 (北から)

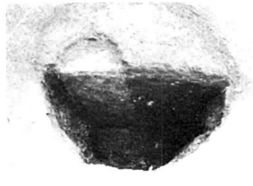


第三建物群柱穴列 (西より)

第19図



第1号建物-E₁



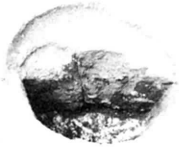
同左-C₁



同左-B₁



同左-A₁



同上-E₂



同左-D₁



同左-(B₂)



同左-A₂



同上-D₃



同左-D₂



同左-B₆



(Ai71) P₂



同上-D₄



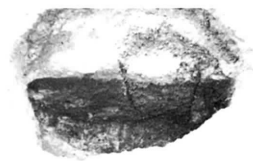
(Ba71) - P₄



同上-B₇



同左-A₄



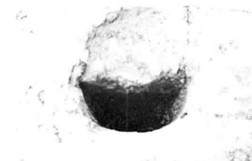
同上-E₅



同左-D₆



(Bc71) P₃



同上-C₇



同上-(E₅)



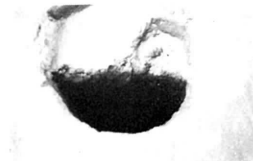
同左-D₇



(Ba71) P₅



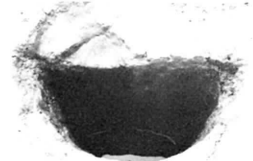
(Aj74) P₁ P₂



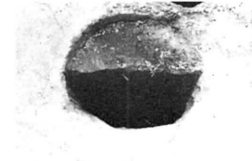
第2号建物-B₂



(Ba77) P₁



(Aj77) P₁

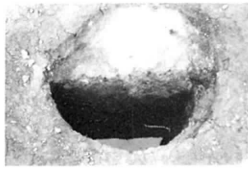


第2号建物-A₁

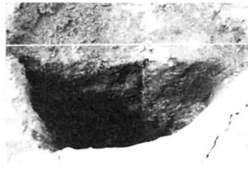
第20图 第一群建物跡、柱穴



(Ba77)P₄



第2号建物-A₄



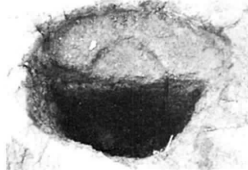
同左-B₄



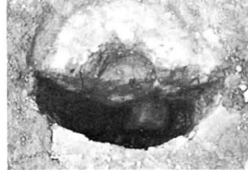
同左-A₂



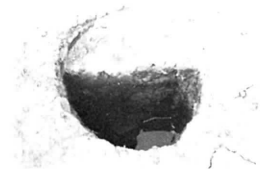
第2号建物-B₂



同左-B₃



同左-A₅



(Aj80)P₁



第3号建物-A₁



同左-A₂



同左-B₄



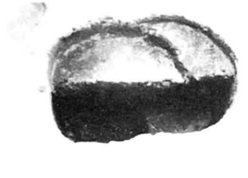
同左-A₄



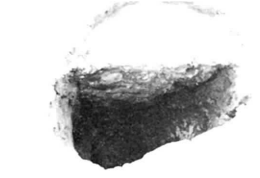
同上-C₄



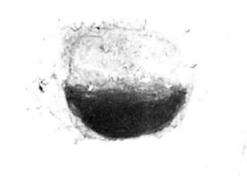
(Bd77)P₃



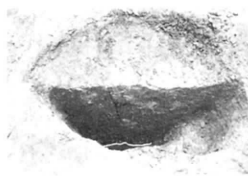
(Bc80)P₁



(Bb77)P₂



(Aj83)P₂



(Bd74)P₄



(Bc74)P₁



(Bc74)P₃



1 第1号建物-A₁



2 同左-B₃



3 同左-B₄



4 同左-D₃



5 同上-A₃



(Bj68)溝中土壌

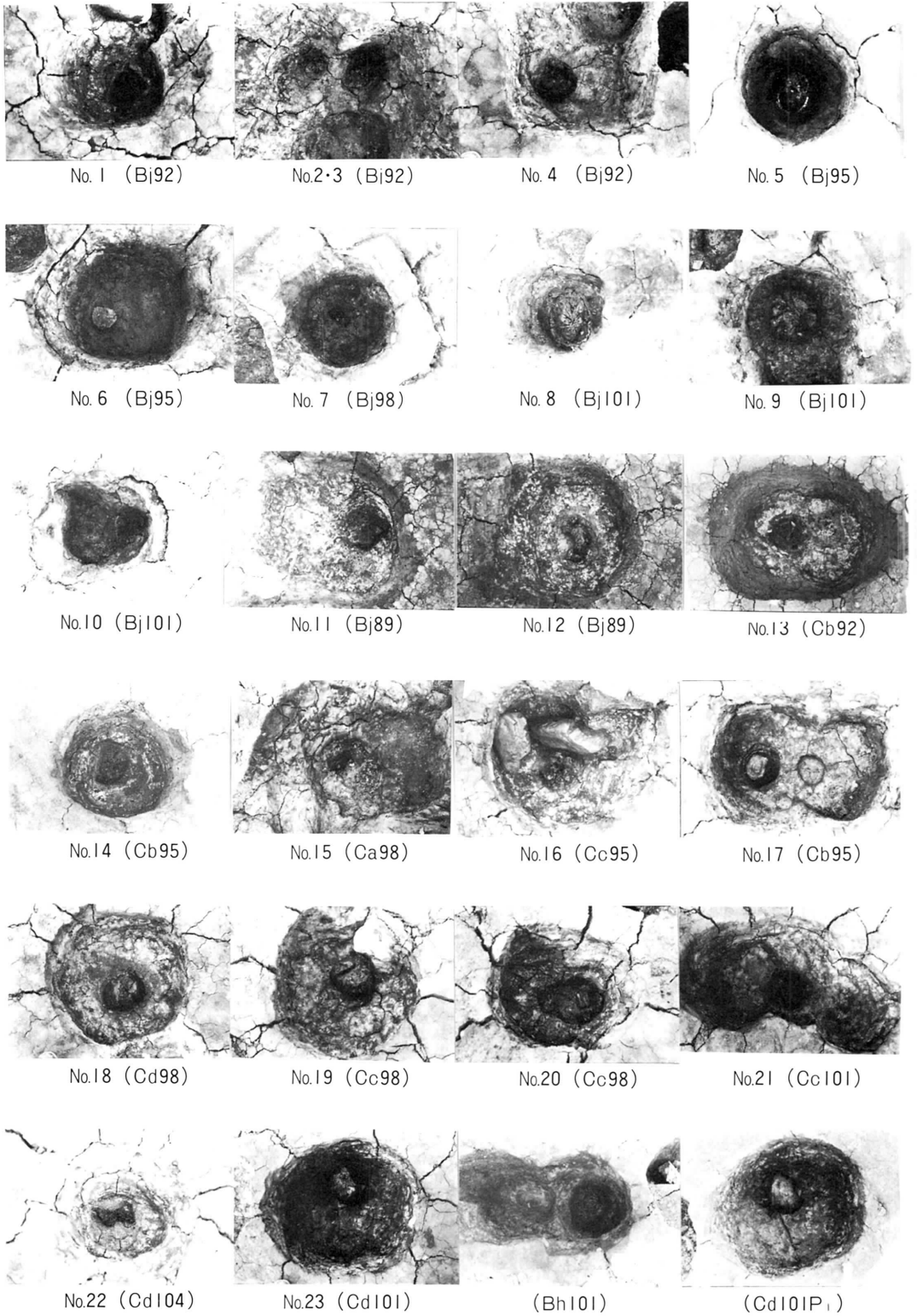


(Cd71)溝中土壌



(Cd74)溝中土壌

第21図 第一群建物跡(上5段)・第三群建物跡(1~5)柱穴、その他土壌



第22図 第二建物群、柱根



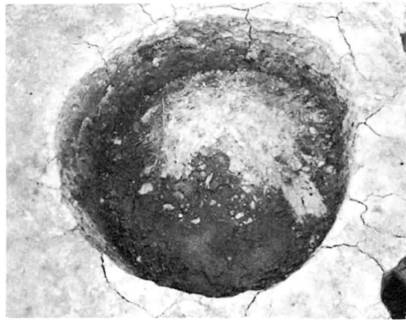
第23图



(Bi 98) 掘込み



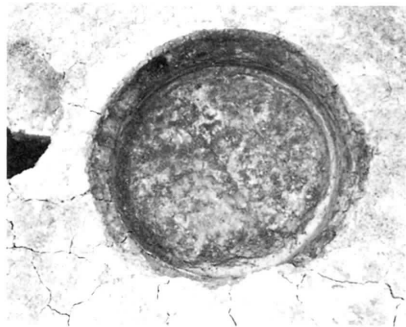
同左 断面



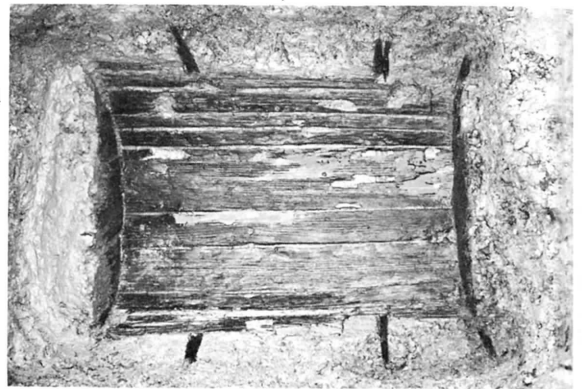
(Bj 101)
掘込み



(Bj 95) 焼土土壌



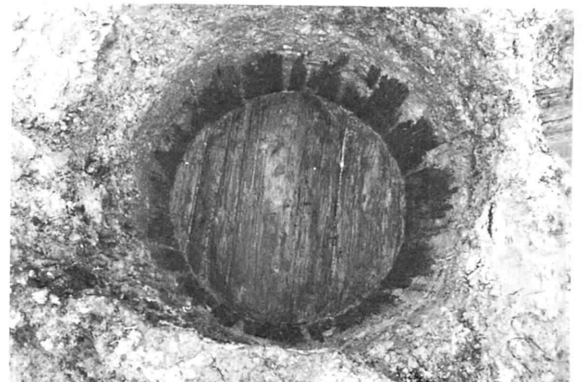
(Ca 104)
肥つぼ



(Bc 95) 墓 No 1

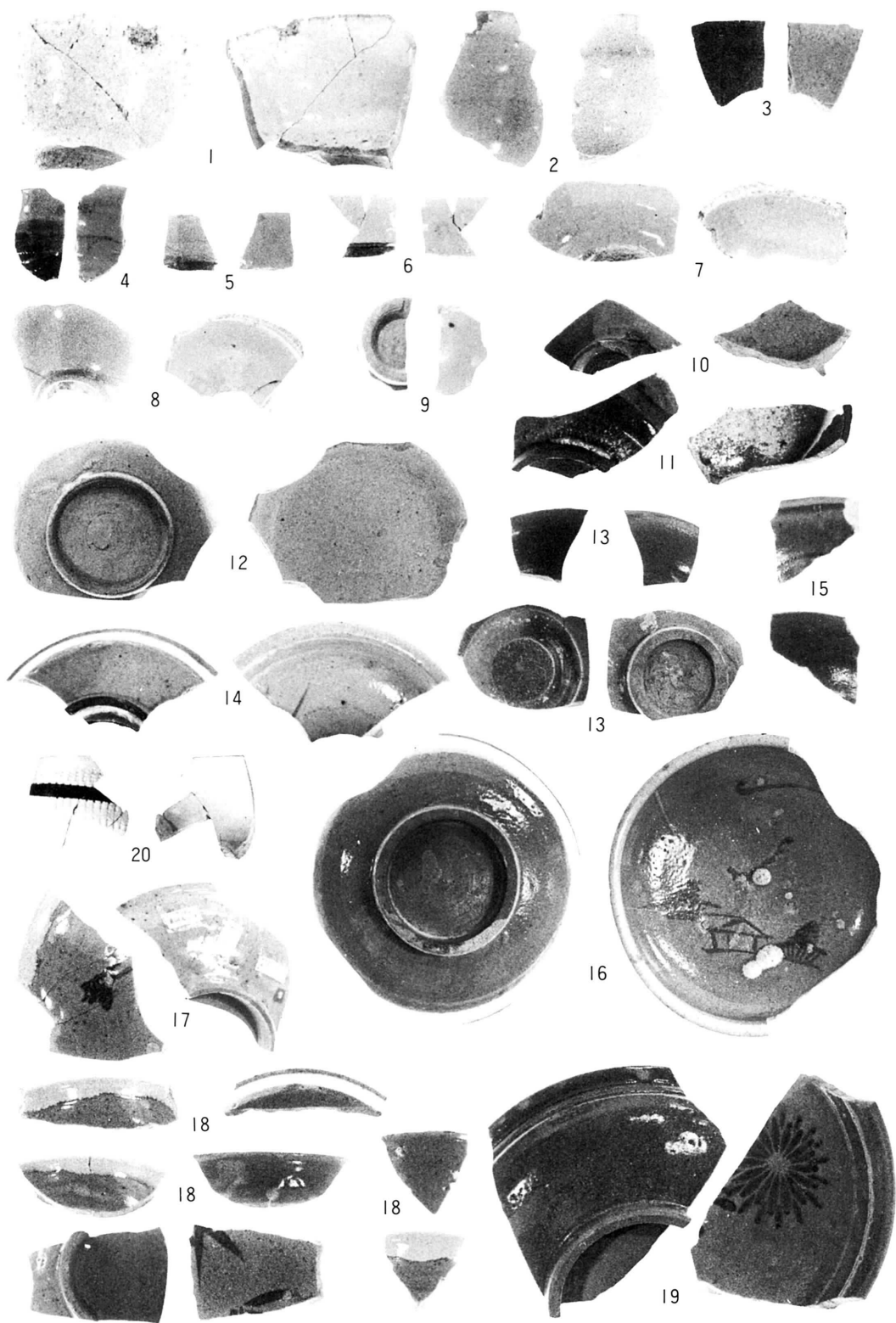


(Bc 95) 墓

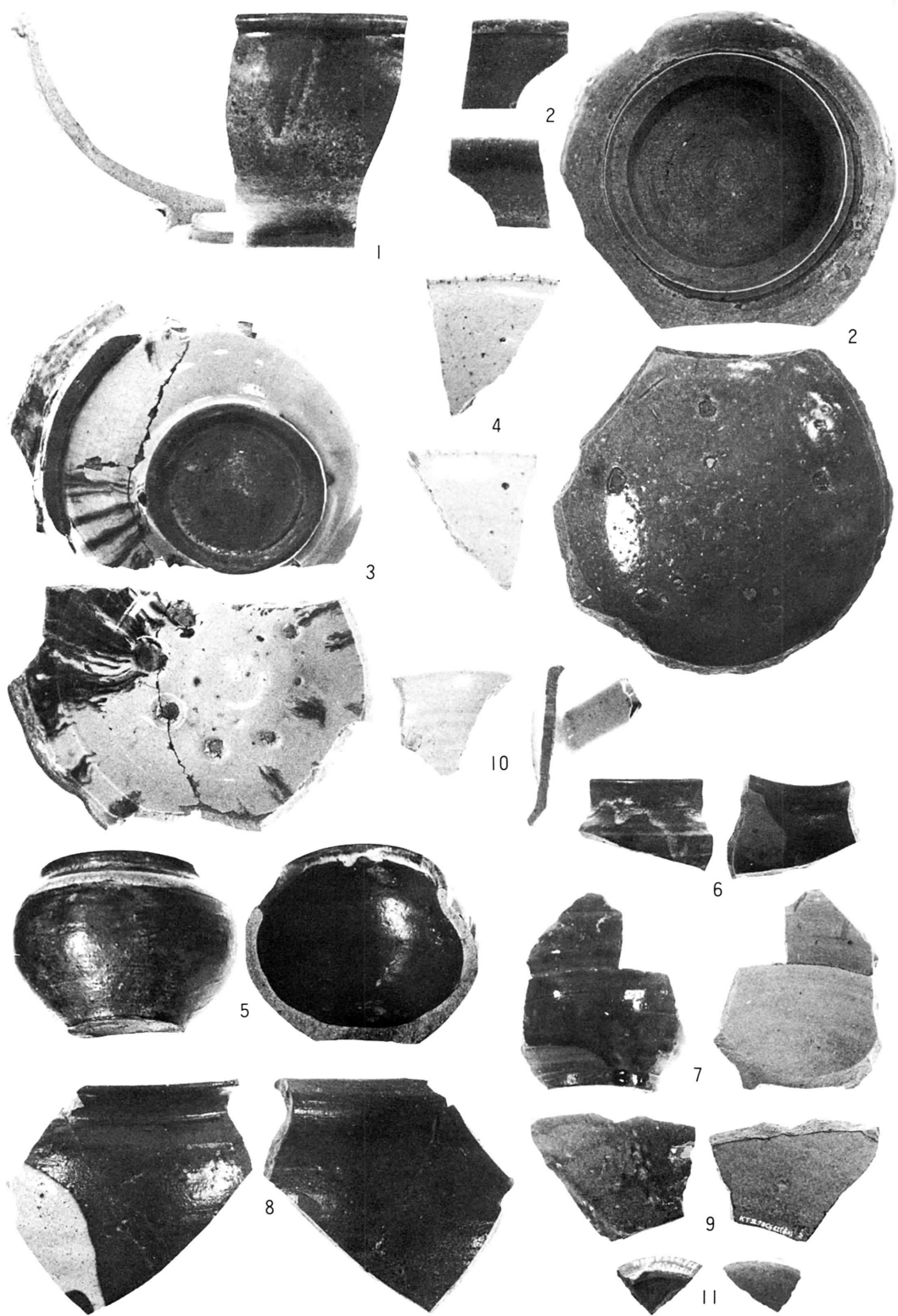


(Bc 95) 墓 No 2

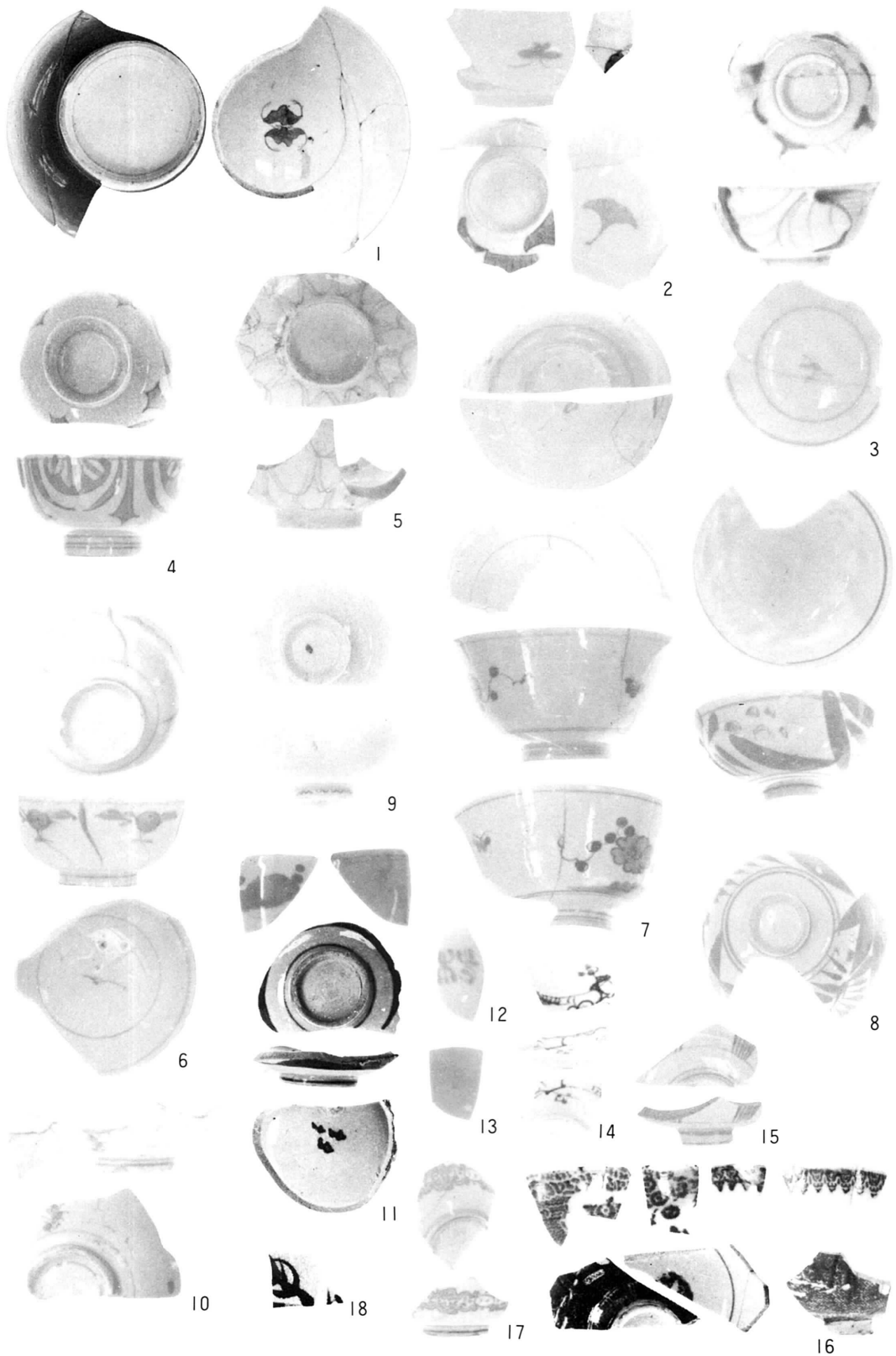
第24図



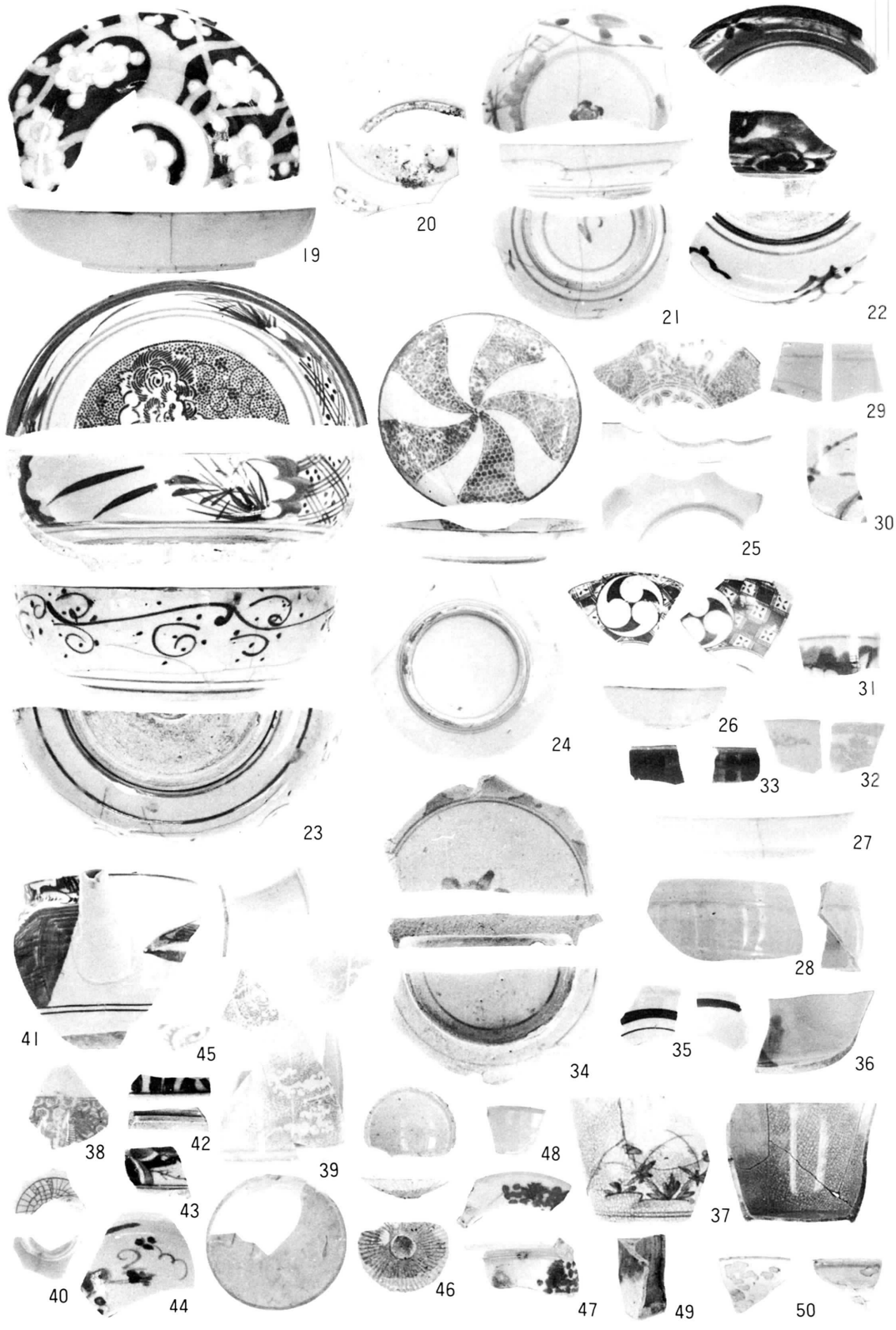
第25图 陶器



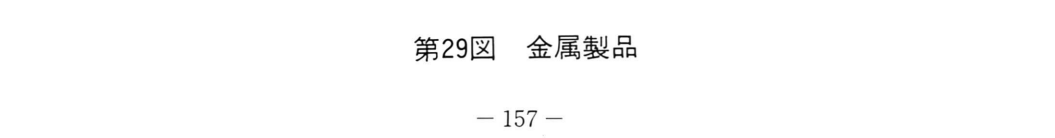
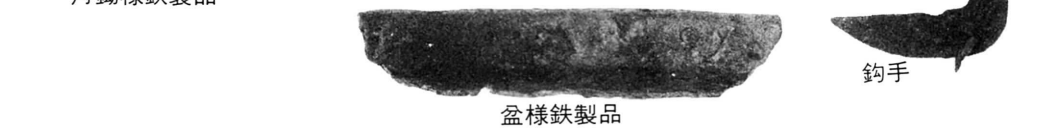
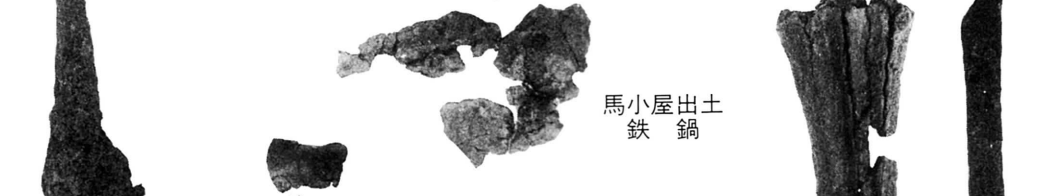
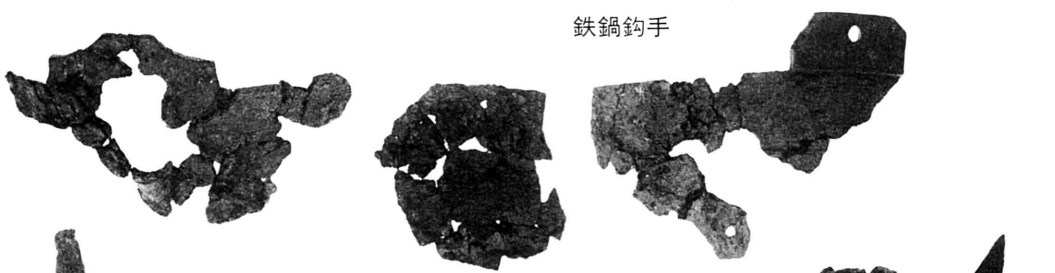
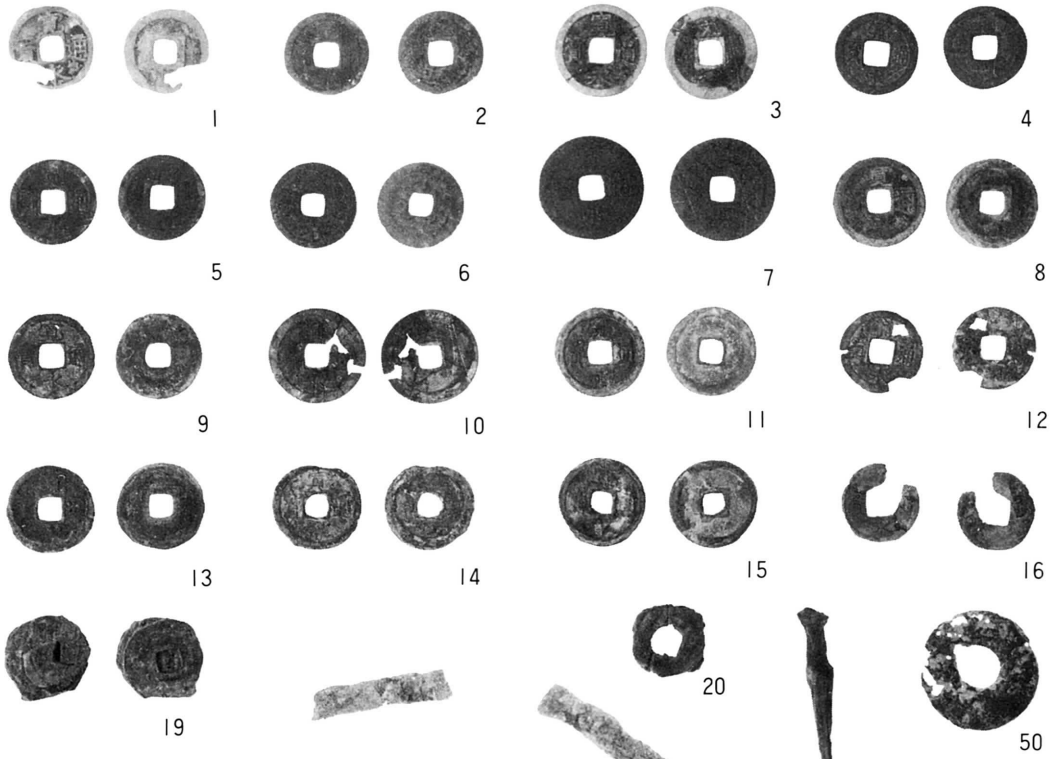
第26図 陶器



第27図 磁器



第28图 磁器



第29図 金属製品

土器胎土の岩石学的方法による分析結果

照井 一 明

1. はじめに

土器の製作地推定のため岩石学的方法で分析を行なった。また窯跡周辺の粘土も比較のため分析を行なった。

2. 試料……別表のとおり

3. 分析方法

- ①試料をカナダバルサムで固定し、100分の3mmの厚さの薄片を各3枚ずつ作成した。粘土は、φ4の標準篩で水洗し残砂を乾燥した後薄片を作成した。
- ②偏光顕微鏡を用い、鉱物組成、特徴、岩片の種類・頻度を調べた。
- ③1つの試料について、それぞれ500~1,000個の粒子について検討を行なった。(0.05mm以下の鉱物は基質として扱った)。
- ④鉱物、岩種別構成から、粘土の供給源の地質を推定し、製作地を考察した。

4. 結果

- ①各試料の鉱物組成・岩片構成・特徴は別表のとおりである。
- ②須恵器の焼かれた温度は、石英→鱗珪石に再結晶していることから推定すると、β₂-鱗珪石(高温型)の安定な870~1470℃であろう(例えばN₂、N₄、H₂など)
- ③各土器は、石英・斜長石の破片結晶から主に構成されるが、試料によっては黒雲母・角閃石・輝石(特に斜方輝石)の含有量が増加する。
- ④岩片としては、チャート・珪石・ホルンフェルス・花崗岩類・斑岩・安山岩・玄武岩・凝灰岩・苦鉄質火山岩類などがみられる。
- ⑤土器の多くは、火山ガラスを含んでいるが、これらの供給源は粘土の分析結果から北上川層群の凝灰岩が考えられる。
- ⑥土器・粘土の組成と地質とを考慮すると、土器の大半は北上川流域およびその周辺の粘土から作られたものである。
- ⑦各遺跡から出土した土器は、異なった粘土、あるいは産地のものが混じっている。
- ⑧窯跡の粘土あるいは使用された粘土の大半は鮮新統の凝灰岩・シルト岩、および河岸段丘のシルト岩である。
- ⑨安山岩・玄武岩を含む粘土の産地としては、古生層・花崗岩などの岩片および火山ガラス(凝灰岩)を特徴的に伴うことから判断すると、北上山地で鮮新統の凝灰岩が分布し、さらに中性~塩基性火山岩類の分布する地質状況が推定され、稲瀬火山岩類分布地域周辺の

可能性が最も強い（北上川東側の地域）。

⑩野外の露頭で採集された粘土（No.24-①～34-⑪）の特徴をみると、一般に北上川の西側地域の粘土には火山ガラスが含まれないか、あるいは微量である（31-⑧、32-⑨、33-⑩、34-⑪）。角閃石・輝石は含まれる場合と含まれない場合とがある。水沢市見分森の粘土は、火山ガラスを含むが角閃石・輝石を含まない特徴がある。紫波町日詰杉の上（33-⑩）の粘土には、結晶片・岩片・火山ガラスが含まれずチャート・シルト岩を主として構成される。江刺市瀬谷子の粘土（25-②～⑦）は、チャート・珪岩・花崗岩などの岩片と、石英・斜長石・鉄鉱・ジルコン・緑レン石を含み、火山ガラスを含むことが多い。凝灰岩や凝灰質シルト岩には輝石や角閃石が一般的に認められる。

江釣子村猫谷地

{ N 1、N 2、N 3、N 4、N 6、-----特徴的に火山ガラスを含み、石英・長石類と古生層・花崗岩の岩片を含むタイプ
N 5、N 7、N 8、-----上記の他に、安山岩や玄武岩を含むタイプ。

江釣子村鳩岡崎

{ H 2、H 4、-----火山ガラスを含み、石英・長石類と古生層・花崗岩片を含むタイプ
H 3、-----上記の他に安山岩を含むタイプ。

江釣子村下谷地

{ S 1、-----岩片に古生層花崗岩・プロピライトを含み、火山ガラスが認められる。
S 2、-----古生層の岩片から主に構成され、火山ガラスを含まない。

紫波郡栗田

{ K 1、-----古生層の岩片に火山ガラスと安山岩片を含む。
K 2、-----花崗岩の岩片と火山ガラスから構成される。

平泉町毛越

K 1、-----花崗岩の岩片と火山ガラスから構成される。

盛岡市太田方八丁

{ O1、 2、O4、O6、O8、---古生層・花崗岩の岩片と火山ガラスおよび安山岩・玄武岩を含む。
O3、O7 -----古生層の風化物からなる粘土。

分析結果

(Q:石英 P1:斜長石 K-F:カリ長石 Bi:黒雲母 HO:角閃石 Py:輝石)

No	遺跡名	時代	遺構名	種別	肉眼的特徴	鉱物組成							備考		
						Q	P1	K-F	Bi	HO	Py	岩片		源岩	
N1	江釣子村 猫谷地	奈良 平安	BF21 住居跡	須恵器 大甕 (体部)	(色) 褐色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英・長石・有 色鉱物 (岩片) レンガ色・白色	+++	++					+	Chert ↓ Granitic Rocks	古生層 + 花崗岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 1
N2	江釣子村 猫谷地	平安 (9世紀後半)	BD62 住居跡	須恵器 環 (口縁)	(色) 暗灰色 (組織) シルト岩状、緻 密 (鉱物) 細粒の無色鉱物 がみられる (岩片) 白色	+++	++			+			Chert ↓ Quartzite ↓ Granite	古生層 + 花崗岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 2
N3	江釣子村 猫谷地	平安 (10世紀初)	CE03 住居跡	須恵器 環 (口縁)	(色) 淡灰色 (組織) シルト岩状、緻 密 (鉱物) 無色鉱物・有 色鉱物 有色鉱物は柱状 目形結晶 (岩片) 白色	+++	+	+			+	++	Chert ↓ Quartzite ↓ matic Volcanic rocks?	古生層 +	Plate 3
N4	江釣子村 猫谷地	古墳 (5世紀?)	DA62 住居跡	土師器 甕 (口縁)	(色) レンガ色 (組織) 粗粒砂質シルト 岩状 (鉱物) 石英・柱状有 色鉱物 がめだつ (岩片) 白色・灰色・黒 色	+++	+		+	+	+	+	Chert ↓ Quartzite ↓ Hornfels ↓ Granite ↓ natic Volcanic rocks	古生層 + 花崗岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 4
N5	江釣子村 猫谷地	古墳 (7世紀?)	JJ24 住居跡	土師器 甕 (体部)	(色) 淡灰褐色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英および細粒 の長石類、有 色鉱物 は少量 レンガ色・黒褐 色 (岩片) 白色・褐色	+++	++	+			+		Andesit ↓ Basalt ↓ Chert ↓ Hornfels ↓ Tuff ↓ Porphyrit	安山岩および 玄武岩 + 古生層 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 5
N6	江釣子村 猫谷地	奈良末 平安初	BF21 住居跡	土師器 甕 (体部)	(色) レンガ色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英・長石類 ・有 色鉱物 (岩片) 白色・レンガ色 の 4mmの礫を含 む	+++	++	+	+	+	+		Chert ↓ Hornfels ↓ Granite ↓ Granophyre ↓ Quarzporphyr ↓ Dolerite	古生層 + 花崗岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 6
N7	江釣子村 猫谷地	平安 (9世紀後半)	BD62 住居跡	土師器 甕 (体部)	(色) 褐色 (組織) 石英・斜長石 (鉱物) 石英・斜長石 ・有 色鉱物 (岩片) 白色・灰色・レ ンガ色・黒色	+++	++	+			+		Chert ↓ Quarzporphyr ↓ Andesite (Hematite) ↓ Dolerite ↓ Serpentin (?)	古生層 + 安山岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 7
N8	江釣子村 猫谷地	平安 (9世紀後半)	CI53 住居跡	土師器 甕 (体部)	(色) 褐色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英が多く長石 類は細粒、有 色鉱物 はめだたない (岩片) 白色・褐色・レ ンガ色	+++	++	+			+	+	Andesite ↓ Porphyrite ↓ Chert ↓ Quarzporphyr	古生層 + 安山岩・ひん 岩・石英斑岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 8
H2	江釣子村 鳩岡崎	奈良末 平安初	DJ50 住居跡	須恵器 甕 (体部)	(色) 赤灰色 (組織) シルト岩状(セラ ミサイト様) (鉱物) 石英と有 色鉱物 がめだつ 鉱物 の再結晶の可 能性 がある (岩片) 白色・黒色 岩片は多くない	+++	++						Chert ↓ Quartzite	火山ガラス (凝灰岩) + 古生層	Plate 9
H3	江釣子村 鳩岡崎	奈良末 平安初	DJ50 住居跡	土師器 環 (体部 内黒)	(色) 淡褐色(内部黒 ぬり) (組織) シルト岩状 (鉱物) 石英と細粒の 有 色鉱物 が認め られる (岩片) 白色	+++	++	+	+	+			Andesite ↓ Chert ↓ Granophyre	花崗岩 + 古生層 + 安山岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 10

No	遺跡名	時代	遺構名	種別	肉眼の特徴	鉱物組成										備考			
						Q	Pl	K-F	Bi	Ho	Py	岩片		源岩					
H4	江釣子村 鳩岡崎	江戸 明治	近世 墳墓	陶器 皿 (口縁)	(色) 淡褐色 (うわ 茶使用) (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 不明 (岩片) 白色・黒色	+++ +											Chert Granite Granophyre	古生層 + 花崗岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 11
K1	紫波町 栗田I	平安初 ?	Dc03 IV	須恵器 環 (底部 回転 へら切)	(色) 灰色 (組織) シルト岩状 (鉱物) 石英と有色鉱物 が認められる (岩片) 白色・レンガ色	+++ +											Andesite Glassy Andesite Chert Tuff	古生層 + 安山岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 12
K2	紫波町 栗田III	縄文 早期末	Ch18 一括	縄文 深鉢	(色) 茶色 内部は黒 茶 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英長石が多く 有色鉱物も認め られる (岩片) 白色 レンガ色	+++ ++			++	++							Granite Hornfels Serpentin (?)	花崗岩 + 古生層 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 13
S1	江釣子村 下谷地B	平安後 期		赤焼 土器 環 (口縁)	(色) 淡褐色 (組織) シルト岩状 (鉱物) 石英とわずかな 有色鉱物が認め られる (岩片) 白色・灰色 岩片は少量	+++ +++									+		Chert Granit Quartzite Propylit (or porphyrite)	古生層 + 花崗岩 + プロピライト (又はひん岩) + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 14
S2	江釣子村 下谷地B	平安後 期		須恵器 環 (底 ~ 体)	(色) 灰色 (組織) シルト岩状、緻 密 (鉱物) 石英の他は認め られない (岩片) 白色	+++ +	+										Chert Tuff (?)	古生層 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 15
K1	平泉町 毛越A	平安末 期	Fb27 III L	赤焼 土器 (体部)	(色) 淡褐色 (組織) シルト岩状、軟 い (鉱物) 石英・黒雲母の 他に柱状の有色 鉱物が認められ る (岩片) 白色 (微量)	+++ ++	+	++	+	+							Granite	花崗岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 16
O1	盛岡市 太田方八丁	平安初 期	Cg06 住居跡	土師器 甕 (口 縁不 使用)	(色) 朱褐色 (組織) 砂質シルト岩状 (組織) 石英・長石>有 色鉱物 (岩片) 灰色・黒色・白 色・岩片をかなり 多く含む	+++ ++									+		Augite Andesite Glassy Andesite Basalt Propylit Chert (or Tuff?)	安山岩 + 玄武岩 + 古生層 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 17
O2	盛岡市 太田方八丁	平安初 期	Pd15 住居跡	土師器 環 (体部 内黒)	(色) 朱褐色 (内部黒 ぬり) (組織) 砂質シルト岩状 (組織) 石英>斜長石> 有色鉱物 (岩片) 白色・茶色・灰 色・レンガ色	+++ ++			+						+		Basalt Propylit Granite Chert Quartzite	玄武岩 + 古層層 + 花崗岩 + 火山ガラス	Plate 18
O3	盛岡市 太田方八丁	平安初 期	Pd15 住居跡	赤焼 土器 環 (口縁)	(色) 朱褐色 (組織) シルト岩状、軟 い (鉱物) 鉱物認めがた (岩片) まれに白色細粒 岩片がみられる	++ ++				+							Chert Siltstone	古生層	Plate 19
O4	盛岡市 太田方八丁	平安初 期	Eb03 住居跡 東カマ ド	須恵器 環 (口縁)	(色) 灰色 (組織) 砂質シルト岩状 (組織) 石英>長石 (組織) 石英>長石>有 色鉱物は認め られない (岩片) 白色>レンガ色	+++ +											Chert Quartzite Quartzporphyr Andesite (斑晶少ないタイプ)	古生層 + (花崗岩類) + 安山岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 20

No	遺跡名	時代	遺構名	種別	肉眼的特徴	鉱物組成							備考	
						Q	Pl	K-F	Bi	HO	Py	岩片		源岩
06	盛岡市 太田方八丁	平安初期	Lc33 -2 住居跡	須恵器 環 (口縁)	(色) 淡灰色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英 柱状有色 鉱物 (岩片) 灰色・白色	+++	+	+			++	Granite Quarzporphyr Chert Andesite?	花崗 + 古生層 + 安山岩 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 21
07	盛岡市 太田方八丁	平安初期	Jj12 住居跡 カマド ①	須恵器 環 (体部)	(白) 灰色(うわ薬使用) (組織) シルト岩状・緻 密 (鉱物) 細粒の石英が認 められる (岩片) 白色・黒色	+++	++	+				Chert Quartzite ▽ ▽ natic Volcanic rocks	古生層	Plate 22
08	盛岡市 太田方八丁	平安初期	Jj12 住居跡 旧カマド	土師器 ? (体部)	(色) 朱褐色 (組織) 砂質シルト岩状 (鉱物) 石英が多く、長 石は細粒、微量 の有色鉱物がみ られる (岩片) 白色・灰色・黒 色	+++	++					Basalt Pyroxen Andesite Quartzite Chert	古生層 + 安山岩 + 玄武 + 火山ガラス (凝灰岩)	Plate 23

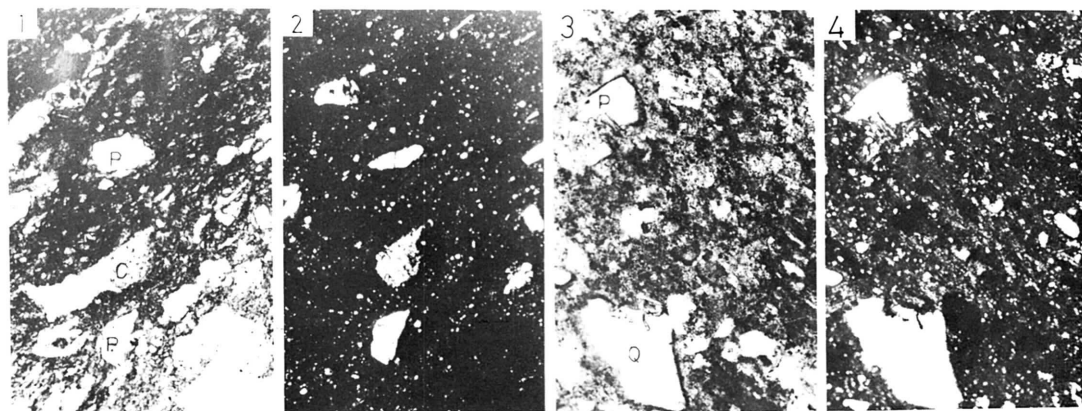
粘土資料

No	採集地	地点	種別	鉱物組成							備考		
				Q	Pl	K-F	Bi	HO	Py	岩片		源岩	
24 ①	水沢市	見分森東森	粘土	+++	++	+					Chert Quartzite ▽ Granite Porphyry	灰色凝灰質 シルト岩	Plate 24
25 ②	江刺市	瀬谷子 土山西隣	粘土(亜炭層) 上位	+++	++	+	+	+	+		Rhyolite ▽ Chert ▽ Granite	白色細粒 凝灰岩	Plate 25
26 ③	江刺市	瀬谷子 土山西隣	粘土(亜炭層) 上位	+++	+		+				Chert ▽ Quartzite ▽ Granite	灰色凝灰質 シルト岩	Plate 26 1-2
27 ④	江刺市	瀬谷子 土山西隣	粘土(亜炭層) 下位	+++	++	+		+	+		Chert ▽ hornfels Phylolite	白色軽石質 凝灰岩	Plate 26 3-4
28 ⑤	江刺市	瀬谷子 土山地区	粘土	+++	++	+	+	+	+		Chert ▽ Quartzite Schalstein Tnffcous Rocks	灰色シルト岩	Plate 27
29 ⑥	江刺市	瀬谷子	粘土	+++	++	+	++	+	+		Chert ▽ Granite	灰色凝灰質 シルト岩	Plate 28

No.	採集地	地点	種別	鉱物組成							備考		
				Q	Pl	K-F	Bi	HO	Py	岩片		源岩	
30 ⑦	江刺市	瀬谷子	粘土	+++	++	+	+	+			Chert Quartzite Hornfels Granitic Rockr	灰褐色 シルト岩	Plate 29
31 ⑧	北上市	飯豊森付近	粘土	+++	++			+	++		Chert Hornfels Tuffeous Rocks	灰褐色 シルト岩	Plate 30
32 ⑨	北上市	藤沢付近	粘土	+++	++			+	+		Chert Hornfels Quartzite Granite Granite Porphyry Schalstein	褐灰色 シルト岩	Plate 31
33 ⑩	紫波町 日詰	杉の上付近	粘土	++	+						Chert Siltstore Tuffeous Rocks	褐灰色 シルト岩	Plate 32
34 ⑪	和賀郡 和賀町	岩崎新田	粘土	+++	+	+	+				Chert (or Tuff?) Hornfels Propylit	灰色 シルト岩	Plate 33
35 ⑫	水沢市	石田 EC09 住居跡	粘土	+++	++			+			Chert Quartzite Hornfels Tuffeous Rocks Schalstein Glassy Andesite	灰色 シルト岩	Plate 34
36 ⑬	水沢市	石田 DF59 住居跡	粘土	++	+		+				Siltstone Chert	灰色褐灰質 シルト岩	Plate 35

——凡 例——

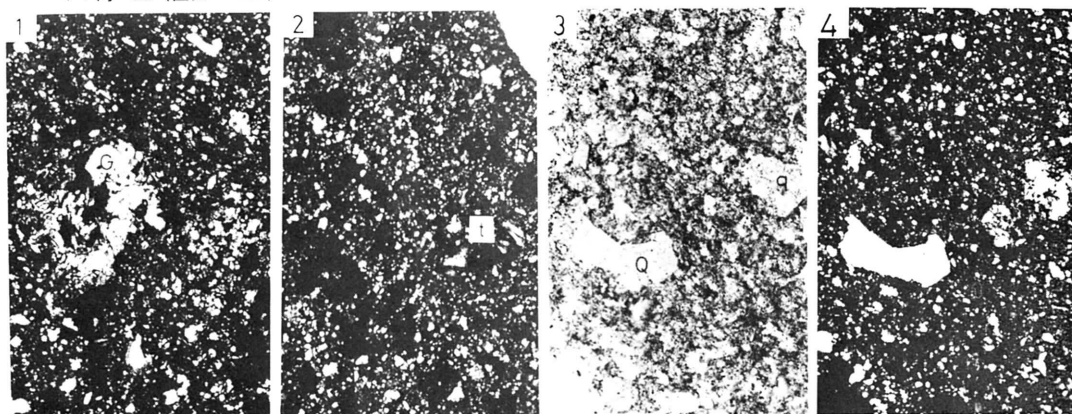
Q : 石英	t : 鱗珪石	B : 玄武岩
P : 斜長石	G : 花崗岩	S : 蛇紋岩
b : 黒雲母	Gp : 花崗斑岩	T : 凝灰岩
Ho : 角閃石	C : チャート	M : 苦鉄質火山岩
Py : 輝石	H : ホルンフェルス	
g : 火山ガラス	An : 安山岩	



N-1 須恵器(大甕)、出土地：江釣子村・猫谷地

Plate 1

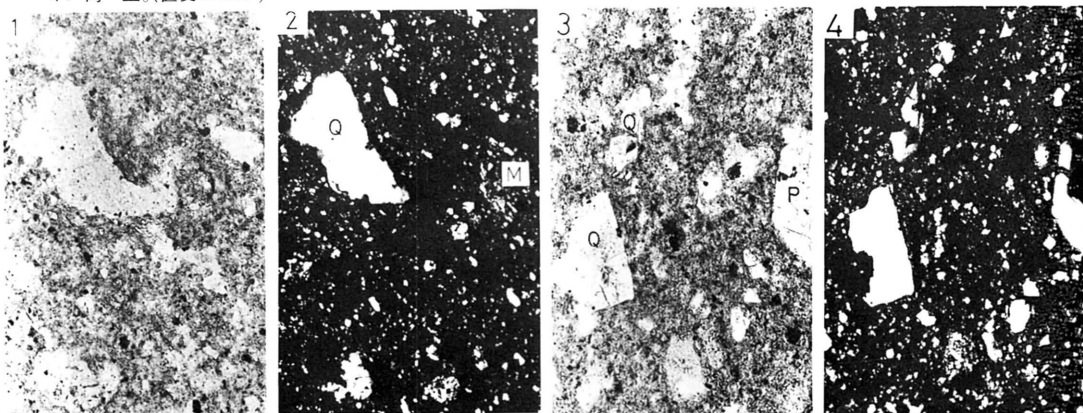
- 1 : 石英、斜長石、火山ガラスおよびチャートがみられる。(平行ニコル)
- 2 : 同上(直交ニコル)
- 3 : 溶融形を示す石英および斜長石。(平行ニコル)
- 4 : 同上(直交ニコル)



N-2 須恵器(坏)、出土地：江釣子村・猫谷地

Plate 2

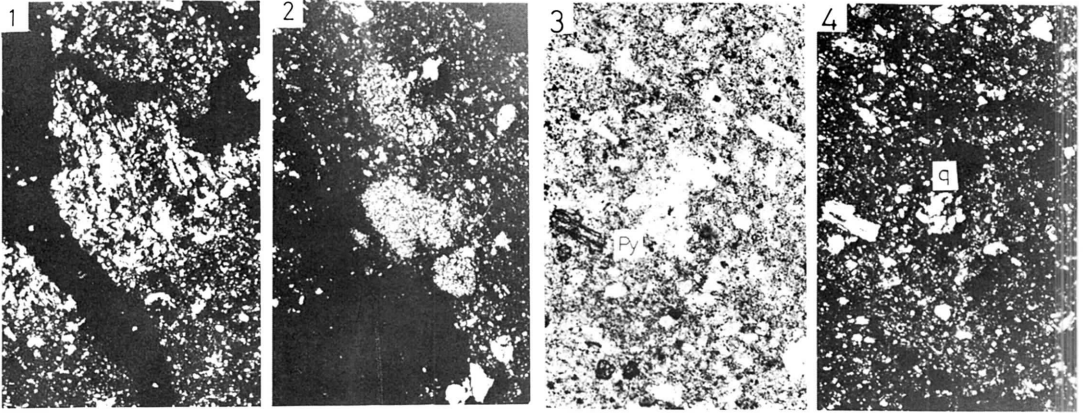
- 1 : 文象斑岩。(直交ニコル)
- 2 : 鱗珪石よりなる結晶片。(直交ニコル)
- 3 : 石英、斜長石、黒雲母、火山ガラスの他にチャートや珪岩より構成されている。(平行ニコル)
- 4 : 同上。(直交ニコル)



N-3 須恵器(坏)、出土地：江釣子村・猫谷地

Plate 3

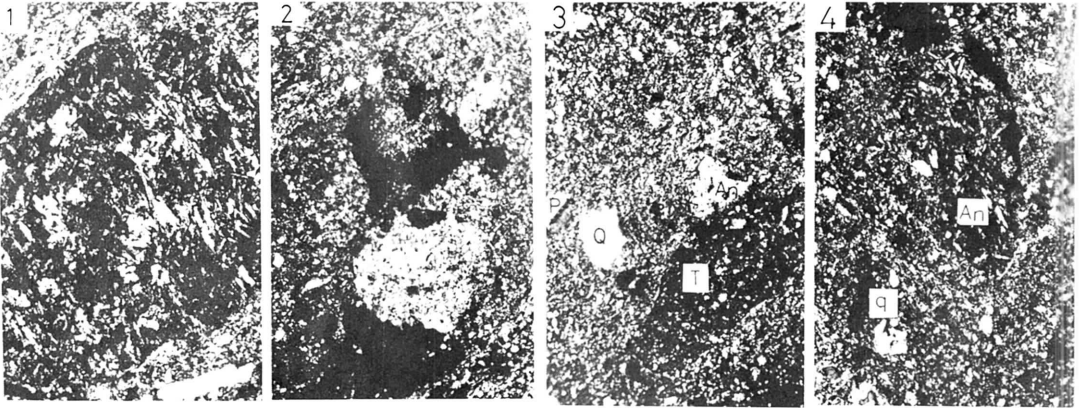
- 1, 3 : 石英、長石・角閃石、輝石などの結晶片とチャート、苦鉄質火山岩などの岩片より構成される。(平行ニコル)
- 2, 4 : 同上。(直交ニコル)



N-4 土師器(甕)、出土地：江釣子村・猫谷地

Plate 4

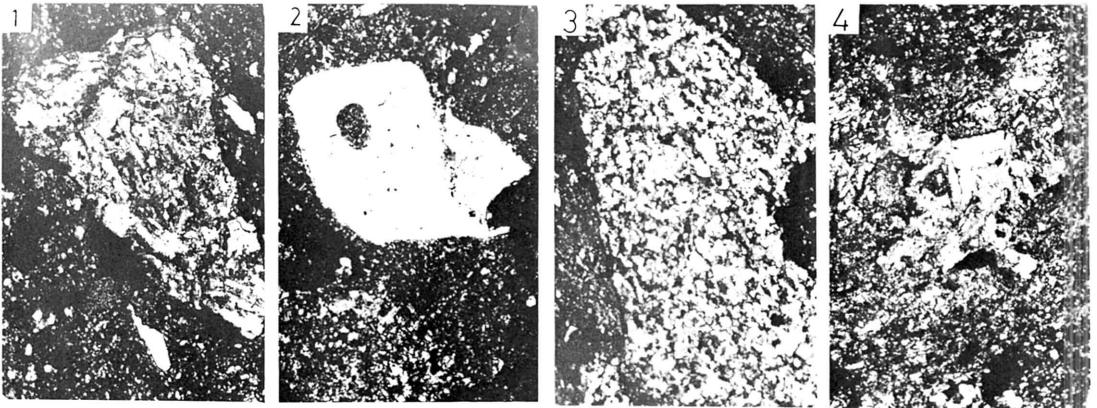
- 1: 苦鉄質火山岩。(直交ニコル)
- 2: チャート (直交ニコル)
- 3: 石英、斜長石、黒雲母、斜輝石のほかにはチャートや珪岩がみられる。(平行ニコル)
- 4: 同 上。(直交ニコル)



N-5 土師器(甕)、出土地：江釣子村・猫谷地

Plate 5

- 1: 玄武岩。(直交ニコル)
- 2: ホルンフェルス。(直交ニコル)
- 3, 4: 石英・斜長石、角閃石などの結晶片と安山岩・チャート・珪岩などの岩片を含む。(直交ニコル)

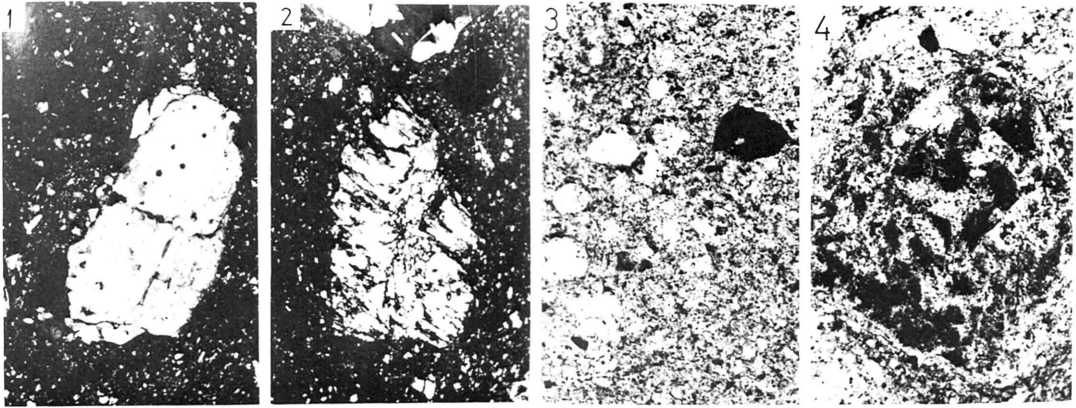


N-6 土師器(甕)。出土地：江釣子村・猫谷地

Plate 6

- 1: 粗粒玄武岩。(直交ニコル)
- 2: 石英斑岩、ホルンフェルス化している。(直交ニコル)
- 3: ホルンフェルス。(直交ニコル)
- 4: 花崗岩。(直交ニコル)

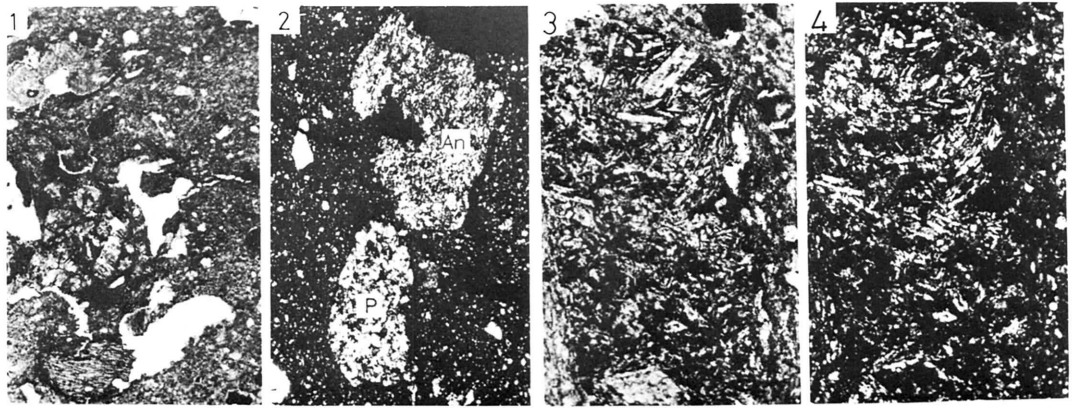
第2図



N-7 土師器(甕) 出土地：江釣子村・猫谷地

Plate 7

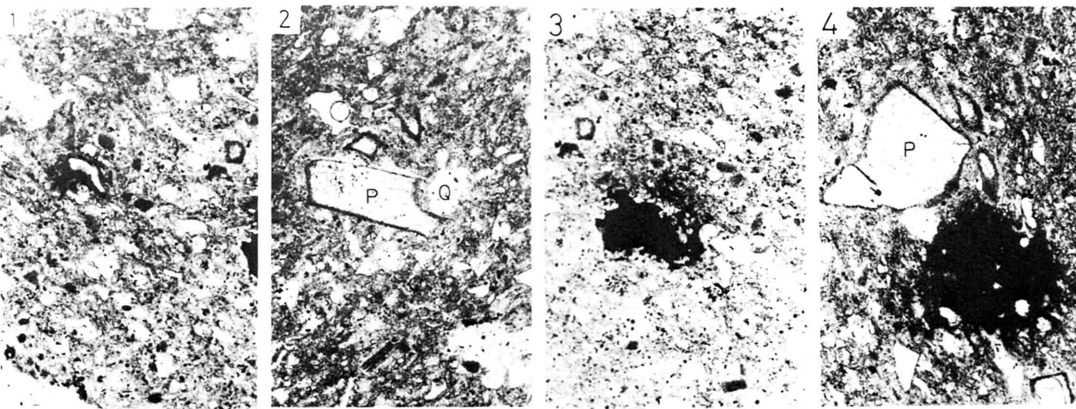
- 1：石英(直交ニコル)
- 2：蛇紋岩(?) (直交ニコル)
- 3：石英・長石・角閃石および少量の火山ガラスがみられる。(平行ニコル)
- 4：変質安山岩。(平行ニコル)



N-8 土師器(甕) 出土地：江釣子村

Plate 8

- 1：石英・長石・角閃石・輝石・火山ガラスの破片結晶とチャート・石英斑岩などの岩片を含む。(平行ニコル)
- 2：安山岩およびひん岩。(直交ニコル)
- 3：安山岩。(平行ニコル)
- 4：同 上。(直交ニコル)

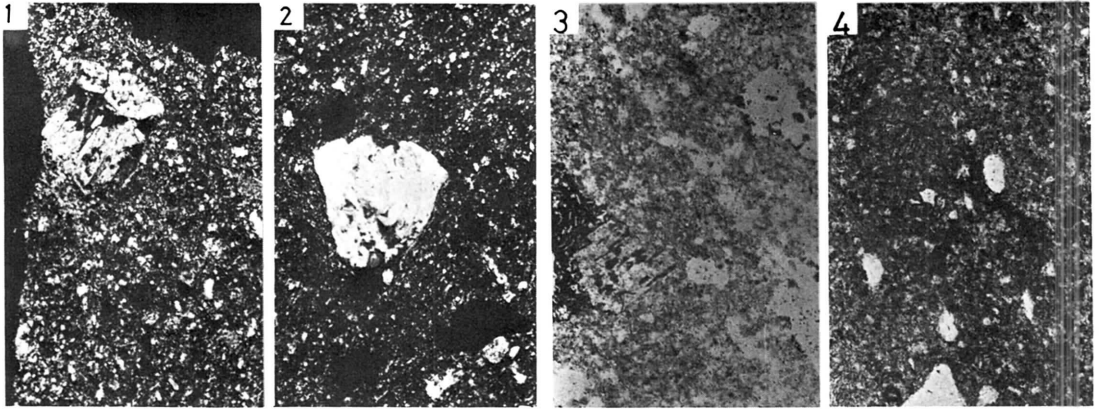


H-2 須恵器(甕)。出土地：江釣子村・鳩岡崎

Plate 9

- 2：多量の火山ガラスと石英・斜長石・鉄鉱などから構成される。石英・斜長石は周辺部が溶融形を示し、再結晶の進んでいるものがある。岩片としては珪岩・チャートがみられる。
- 1, 3, 4：岩片(黒色)の一部は溶融し斜長石(?)の再結晶を生じているものがある。(平行ニコル)

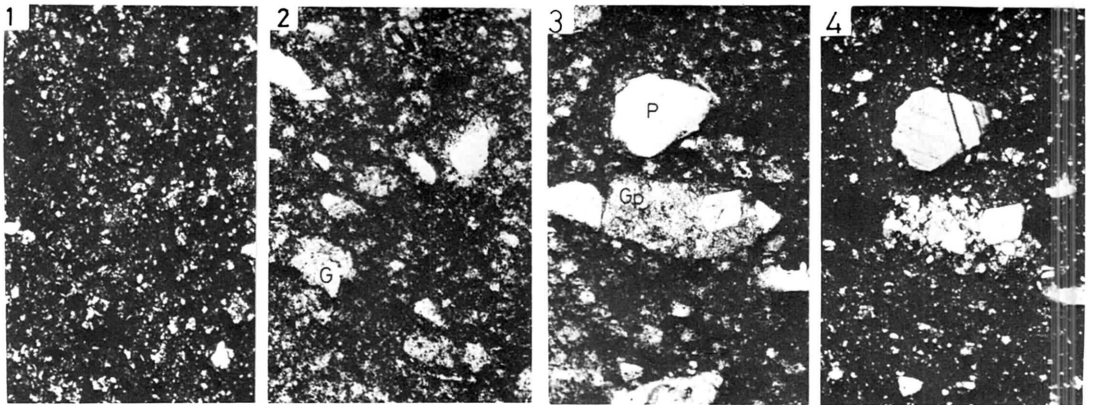
第3図



H-3 土師器(杯)、出土地：江釣子村・鳩岡崎

Plate 10

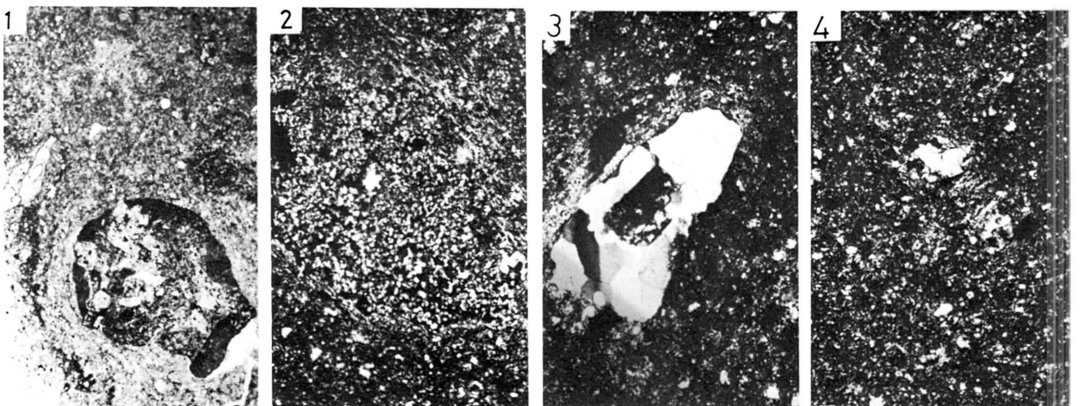
- 1：石英、長石、黒雲母、角閃石、緑レン石、火山ガラスなどの結晶破片と花崗岩などの岩片より構成される。(直交ニコル)
- 2：花崗岩。(直交ニコル)
- 3：安山岩。(平行ニコル)
- 4：緑レン石。(平行ニコル)



H-4 陶器(皿) 出土地：江釣子村・鳩岡崎

Plate 11

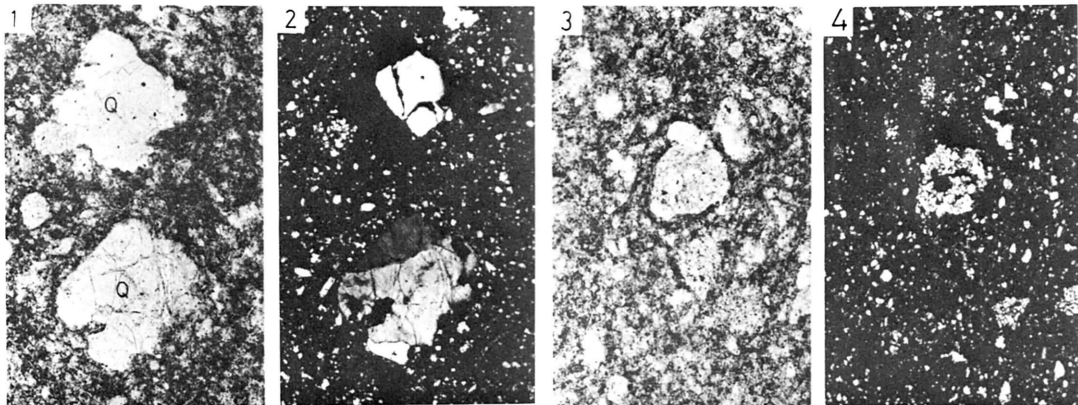
- 1：左上から中央にかけて結晶化したうわ薬がみられる。(直交ニコル)
- 2：石英・斜長石・火山ガラス・鉄鉱のほか花崗岩・チャートなどから構成される。(平行ニコル)
- 3：花崗斑岩。(平行ニコル)
- 4：同 上。(直交ニコル)



S-1 赤焼土器(?) (坏) 出土地：江釣子村・下谷地

Plate 14

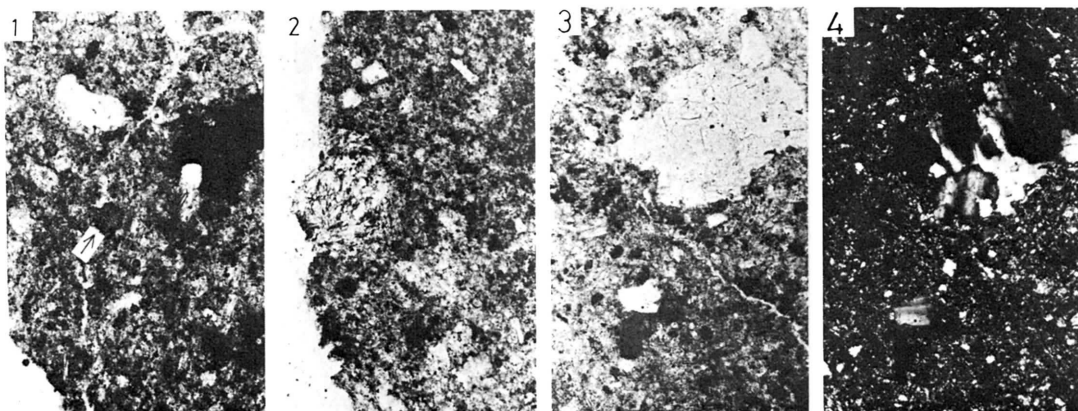
- 1：石英・斜長石・輝石・火山ガラス・鉄鉱・緑レン石などの鉱物が見られる。岩片はプロライト。(平行ニコル)
- 2：チャート。(直交ニコル)
- 3：花崗岩。(直交ニコル)
- 4：珪岩。(直交ニコル)



S-2 須恵器(坏) 出土地：江釣子村・下谷地

Plate 15

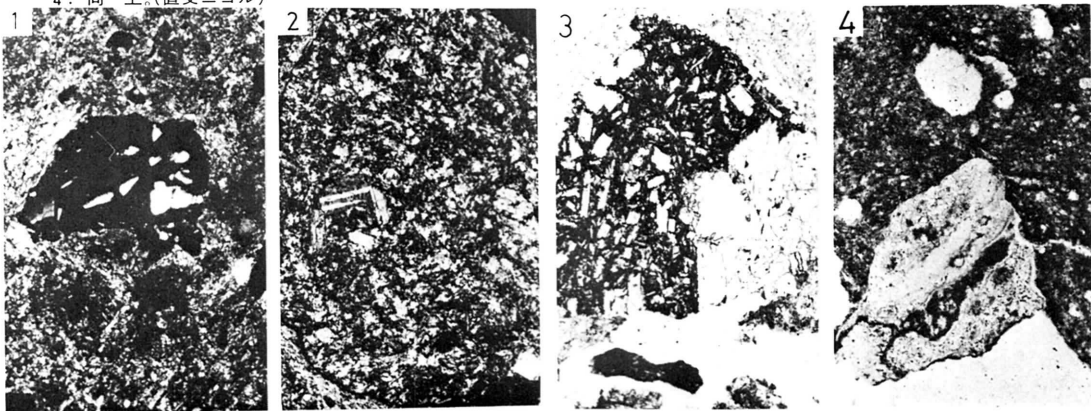
1. 石英・長石・鉄鉱および少量の火山ガラスを含む。(平行ニコル)
2. 同 上。(直交ニコル)
3. チャートの岩片。(平行ニコル)
4. 同 上。(直交ニコル)



No.16 K-1 赤焼土器(?) 出土地：平泉町毛越

Plate 16

- 1: 石英・長石・黒雲母のほかに、まれに輝石が含まれる。軽石および火山ガラスを多量に含んでいる。しばしば珪藻が認められる(矢印) (平行ニコル)
- 2: 火山ガラス。(平行ニコル)
- 3: 花崗岩。(平行ニコル)
- 4: 同 上。(直交ニコル)



O-1 土師器(甕) 出土地：盛岡市太田方八丁

Plate 17

- 1: 石英・斜長石・角閃石および少量の火山ガラスより構成され、火山岩やチャートの岩片が多い。中央の岩片はガラス質安山岩(直交ニコル)
- 2: ひん岩。(直交ニコル)
- 3: 安山岩。(平行ニコル)
- 4: 珪質岩。(流紋岩質凝灰岩またはチャート)(平行ニコル)